MF文庫 J
あ-05-11

緋弾のアリアVIII
赤松中学
MEDIA FACTORY
580

9784840136785
ISBN978-4-8401-3678-5
C0193 ¥580E
1920193005806
定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY

緋弾のアリアVIII　螺旋の天空樹（トルネード・ハイ）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。犯罪組織『イ・ウー』の崩壊により始まった二つの連盟――『師団（ディーン）』と『眷属（グレナダ）』の争いに巻き込まれたアリアとキンジ。そんな中、文化祭の準備が進む武偵高に、アリアととても関係が深い“あの人物”が現れて――。深まるアリアとの亀裂、孤立していくキンジ、失われた“アリアの隣り”をキンジは取り戻すことができるのか!?　大スケールアクション＆ラブコメディー第8弾!!

緋弾のアリアIII

Aria the Scarlet Ammo

螺旋の天空樹（トルネード・ハイ）

赤松中学

P11 1弾 乱世の宵（タービュレント）

P56 2弾 変装食堂（リストランテ・マスケ）

P139 3弾 白銀のICBM（ボラリス）

P217 4弾
高度350メートルの
トルネード

P282 Go For The NEXT!
螺旋の天空樹（トルネード・ハイ）

Contents

Jeanne
Aria
Shirayuki

口絵・本文イラスト●こぶいち
編集●笹尾明正

1弾　乱世の宵

「――『宣戦会議』に集いし組織・機関・結社の大使達よ」
夜の人工浮島・空き地島で――
霧の中に照らし出された異形の集団に、甲冑姿のジャンヌが語りかけている。
「まずはイ・ウー研鑽派残党のジャンヌ・ダルクが、敬意を持って奉迎する」
その声は、奥歯に刃を秘めたような感じだ。
歓迎するような事を言ってはいるが、な。
ああ……チクショウ。
ヒステリアモードでない俺にも分かる。
ここに集う一同の、交錯する敵愾心が。
――一触即発のムードだぞ、こいつら全員。
（何なんだよ……一体！）
正体不明の武装集団と遭遇したケースでは、まず敵の戦力を把握するのがセオリーだ。
だが、今の俺にはそれが出来ない。
まず誰が敵で誰が味方なのか。そこから分からない。

ジャンヌ、レキ、そしてさっき俺に話しかけてきた隣の……キツネ人間？……コイツは敵じゃなさそうだが……他が、全員分からない。

――カナは、味方であってほしい。だがあの『砂礫の魔女』パトラと仲睦まじく現れたところを見ると、警戒せざるを得ないぞ。

あとは全員、何をしでかすか分からない。

だとしたら命が危ないぞ。こんな所に、これ以上いたら。

だが、逃げようにも――

その行為自体が危険かもしれない。

この場に背を向けた瞬間、全員から撃たれるかもしれないんだからな。

だから、俺は――

（チクショウ……！）

ただ、立ち尽くすしかなかった。ここでは。

クソッ。

なんでだ。

俺はただ平凡な人生を送りたいだけの、つまらん男子高校生なのに……

なんの因果で、こんな怪人だらけの集会に引っ張り出されてんだよッ!?

その疑問にヒントを与えるように――ジャンヌが再び、バラ色の唇を開いた。

「初顔の者もいるので、序言しておこう。かつての我々は諸国の闇に自分達を秘しつつ、各々の武術・知略を伝承し――求める物を巡り、奪い合ってきた。イ・ウーの隆盛と共にその争いは休止されたが……イ・ウーの崩壊と共に、今また、砲火を開こうとしている」

――イ・ウー――

思い出したくもないその名を、俺は胸の裡で復唱する。

それは原子力潜水艦を根城とし、ここにいるジャンヌを始めとする無法者の超人たちを輩出した組織の名だ。

2か月前、俺はヤツらのリーダー――アリアの曾祖父、シャーロック・ホームズと戦い……その結果、あの組織は壊滅した。ハズだった。

それが今なぜか、ここで取り沙汰されている。

ゴクリ、と生唾を飲んだ俺の視界の端で――

ヤツらの一人が、全員に語りかけるように一歩出た。

「――皆さん。あの戦乱の時代に戻らない道はないのですか」

柔和そうな、どこか艶のある甘い声。

一同の中で最も穏やかな、青く、澗んだ瞳。

マスカラが不要なぐらい長い睫毛と、泣きボクロが印象的な彼女は――その美しい顔と首ぐらいしか、白い素肌を晒していない。

大人っぽい身体は金糸の刺繍を施した純白のローブに包み、小さな十字架を持つ手にも白い長手袋をし、徹底的に肌を隠す服装をしている。

ふんわりした長いブロンドの髪を隠すヴェールは無いが……

この女は多分、シスターだろう。

多分、というのは——彼女がちゃんと薄化粧をしており、色っぽい美人であることに加えて……普通のシスターは決して持たないものを背負っているからだ。

鍔を金で飾り付けた、冗談みたいにデカい、剣をな。

「パチカンはイ・ウーを必要悪として許容しておりました。高い戦力を有するイ・ウーがどの組織と同盟するか最後まで沈黙を守り続けた事で、誰もが『イ・ウーの加勢を得た敵』を恐れてお互い手出しができず……結果として、長きに渡る休戦を実現できたのです。その尊い平和を、保ちたいとは思いませんか」

シスターは、手を合わせて十字架を握りしめる。

誰だか知らんが、いいぞ。あんた、いいこと言ってるぜ。どうやらいい人っぽいな。

是非、平和を保ってくれ。俺が今夜ここで死なないで済むためにもな。

「私はパチカンが戦乱を望まぬことを伝えに、今夜、ここへ参ったのです。平和の体験に学び、皆さんの英知を以て和平を成し、無益な争いを避ける事は——」

「——できるワケねェだろ、メーヤ。この偽善者が」

彼女のナナメ後ろから口を挟んだのは、最初から修道女（メーヤ、という名前らしい）を睨んでいた黒いローブの魔女だった。

魔女、と断定せざるを得ないのは……

コイツの姿が、隅から隅まで典型的な魔女っぽいからだ。

小柄な体を真っ黒なベルベットのローブに包み、黒のトンガリ帽子をかぶり、ご丁寧に大きなカラスまで肩に乗っけてる。

S研的な事に疎い俺にすら一目で分かる。これが魔女じゃなかったらサギだろう。

14歳ぐらいに見える黒髪・おかっぱ頭の彼女は、隻眼なのか瞼脂色の眼帯をしている。

眼帯の……あの黒いマークは何だ？

卍？　いや、逆卍をナナメにしたような——ああ、あれは……！

欧州の歴史上、最も忌まわしいマーク。

旧ナチス・ドイツの、ハーケンクロイツだぞ。

その眼帯魔女は紅い左目だけで、ぎろ、と修道女・メーヤを睨み上げる。

「おめェら、ちっとも休戦してなかったろーが。デュッセルドルフじゃアタシの使い魔を襲いやがったくせに。平和だァ？　どの口でほざきやがる」

イラッとした口調で吐き捨てた魔女を——

「黙りなさいカツェ＝グラッセ。この汚らわしい不快害虫」

……えっ？

と思うぐらい口調を急変させた修道女・メーヤが、眉を吊り上げてる。

「お前たち魔性の者共は別です。存在そのものが地上の害悪。殲滅し、絶滅させることに何の躊躇いもありません。生存させておく理由が旧約・新約・外典含めて聖書のどこにも見あたりません。しかるべき祭日に聖火で黒焼きにし、屍を八つに折り、それを別々の川に流す予定を立ててやってるのですから――ありがとうと言いなさい、ありがとうと。ほら、言いなさい！　ありがとうと！　ありがとうと！」

さっきの穏やかなムードとは打って変わって、魔女の首を絞めて叫ぶメーヤは……

ぜ、前言撤回だ。ちっとも、いい人じゃなさそうだぞ。

ていうか二重人格っぽい。それも相当、タチの悪いタイプだ。

「ぎゃはは！　おゥよ戦争だ！　待ちに待ったお前らとの戦争だぜー！　こんな絶好のチャンス、逃せるかってんだ！　なぁヒルダ！」

チビ魔女は首を掴まれ吊り上げられながらも、ゲラゲラ笑いながら別の女に話しかけた。

話しかけられたのは――

この場で一番、人間離れした姿をした少女。

その背中に、コウモリのような形の大きな翼を生やした、金髪ツインテールの女だ。

「そうねぇ。私も戦争、大好きよ。いい血が飲み放題になるし」

剣呑なセリフを放つ真っ赤な唇の間に、俺は再び目を見張る。

先端を何やら緋色の金属でコーティングしているから見えたが……あれは、キバだぞ。

アリアみたいに犬歯が目立つ女の子、って感じじゃない。

もっと鋭くて長い、コウモリみたいなキバがある。

「ヒルダ……一度首を落としてやったのに、あなたもしぶとい女ですね」

バッ、とチビ魔女を捨てたメーヤは、今度はそのコウモリ女を睨み付けてる。

ひょっとして……この修道女が一番、あれこれ敵に回してるんじゃないか？　最初の平和的なセリフとは裏腹に。

「――首を落としたぐらいで竜悼公姫が死ぬとでも？　相変わらずバチカンはおめでたいわね。お父様が話して下さった何百年も昔の様子と、何も変わらない」

ほほほっ、と赤いマニキュアをした指を口にあてがい、縦ロールの金髪ツインテールを揺らして笑うコウモリ女――こいつは、ヒルダって名前か――は、18世紀のヨーロッパのドレスを現代風にアレンジしたような、ゴシック&ロリータ調の衣装を着込んでいる。

フリフリでヒラヒラな点は理子の甘ロリと同じだが、その色調は漆黒を基調としており、不気味で退廃的、魔的な印象がする。

そして……ミニスカートの下のパニエと、クモの巣柄のニーソックスの間――昔、武藤が『絶対領域』とか呼んでた、太ももの部分――に、白いイレズミのような模様が――

あれは、見覚えがあるぞ。
6月に横浜で戦った竜悼公・ブラドの肉体にあったのと同じ、目玉模様だ。
色白だし、ガーターベルトの紐と紛れるような位置にあって気付きにくかったけどな。
（吸血鬼、か……！）
ブラドの他にも、まだいたのか。
見るのは二度目だから驚きは少ないが、それでも……戦りたくはない相手だぜ。
「和平、と仰りましたが――メーヤさん？」
ノンキな感じの声を挟んできたのは、色鮮やかな中国の民族衣装を着たスマートな男だ。
丸めがねの下で、糸みたいに細い眼をニコニコさせている。
こんな危なっかしい集団の中にいるのに、余裕綽々だな。
「それは、非現実的というものでしょう。元々我々には長江のように永きに亙り、黄河のように入り組んだ因縁や同盟の誼みがあったのですから。ねぇ」
そこまで言うと、そいつは風力発電機の翼に腰掛けているレキを見上げた。
レキは……ただ黙って、ドラグノフ狙撃銃を抱えている。
「――私も、できれば戦いたくはない」
ジャンヌが、アイスブルーの瞳で一同を見回しつつ言う。
「しかし、いつかこの時が来る事は前から分かっていた事だ。シャーロックの薨去と共に

イ・ウーが崩壊し、我々が再び乱戦に陥ることはな。だからこの『宣戦会議』の開催も、彼の存命中から取り決められていた。大使たちよ。我々は戦いを避けられない。我々は、そういう風にできているのだ」
時間はかかったが、ようやく……
俺にも、少しずつ見えてきたぞ。この集会の正体が。
ジャンヌの話から類推するに、この世にはコイツらが属する様なアンダーグラウンドな集団が複数存在してきた。
イ・ウーが、その一つだろう。ブラドの吸血鬼一族も、ココ達が言っていた藍幇という組織も、レキのウルスとやらも多分それだ。
そして彼らは、互いに対立したり同盟を結んだりして、鎬を削ってきたらしい。
話の端々から考えるに、永い、永い間。
その間、滅びていない――この場に使者を送り込んできている――ということは、その関係は拮抗していたのだろう。
だが、イ・ウーが現れた事で、その関係に変化が起きた。
戦略ミサイル搭載型の原潜による高い攻撃力・隠遁性を有し、かつ、裏世界では中立を保っていたらしいイ・ウーの存在は、誰の目から見ても危険なものだった。
自分の敵とイ・ウーが同盟したら最後、パワーバランスが崩れて……一気に、やられて

ごまいかねない

だからコイツらは、しばらく「休戦」していたのだ。

テーブルに載ったタイ・ウ、というナイフを、誰がいきなり取るか分からなかったから。だがそのナイフが今、無くなった　ーに、アリアと俺のせいで

それで

では、古の作法に則り、まず一つの協定を復旧する　80年前の宣戦会議ではフランス語だったそうだが、今回は私が日本語に翻訳した事を容赦頂きたい

第一項　この何時、誰かが誰に挑戦する事も許される　戦いは決闘に準ずるものとするが、不意打ち、闇討ち、密偵、奇術の使用、毒物は禁じられる

第二項　警護無き殺戮を避けるため、決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる　これは第一項より優先される」

時代かかったセリフだが、意味は、分からなくはないぞ

この2つは、七ヶ条で考えるべきルールだろう

組織同士で戦うは戦うか、総力戦、にはしない

それぞれの組織がカードゲームみたいに戦闘タイプの代表者を出し、そいつらの決闘で勝敗を決める

決闘の回数や代表者の頭数などに厳密な規定は無さそうだが　要は現代の戦争みたいに

カタギを大勢巻き込んでとっちかか皆殺　になるまで戦うのは禁止

自分の組織から強力な戦士がいなくなった時て、一旗を揚げる――　こと事だろう

戦のスタイルとしては随分と古い、無くはない　日本では安時代にあった、その1地で名のある武士たちが順番　一騎打ちをしていく形式に似ている

合理的といえば合理的、だな。

「第一項　戦いは一に「師団」と「律魂」の双方の連盟に分かれて行う。この往古の盟名は、歴代の外道たちを敬う故、永代、改めぬものとする

それぞれの組織がどちらの連盟に属するかはこの場での宣言によって定めるか、戦秘・無所属も許される　以後の鞍替えは禁じないが、誇り高き各位によりそれに応じた扱いをされる事を心得よ

続けて連盟の一員を募るが　まず、私たちイ・ウ　研鑽派残党は　師団　となる事をせてもらう　ハチカンの聖女・メーヤは　師団　殺女連隊のカ　ェゲフセ、それと亀仲公爵・ヒルダは「春風」よりも鞍替えは無いな？」

ルールを語り終えたらしいシャンヌが、さっき喋っていた3人の女を名指しする

ああ　神様　再び剣を取る私を、お赦し下さい

ちゃっちゃ、とメロンみたいな乳のしこり字を切った修道女・メーヤは、

「はい　ハチカンは孔よりこの汚らわしい律魂共を伐つ「師団」　殺戮師団の始祖です」

ーレースの長手袋をこさえて、魔女と破眼鬼娘をかしたる

「ああ　アタシも当然、一番属」た　メーヤレ仲間になんてなれるもんかよ

そう応えた魔女・カツェ＝グラッセの向こうからは、

「開くまでもないでしょうシャンス　私は生まれながらにして闇の番属――番属」よ

玉藻、あなたもそうでしょう？」

今度はコウモリ少女・ヒルダが、カツノ、とハイヒールを鳴らしてこっちに

いや、俺の隣にいるキノネ少女のち向」向き合った

ー藻と呼ばれたキノネ少女は、カラコロ、と　本歯ノゲタを鳴らして少み出て――

さっきまでシャンスのちに向けていた耳――頭の一部にぴょこんと突き出た実り耳を、

ヒルダのちへと微修ーした

この子　ファトセレみたいに背負った本箱のト、短いスカートみたいな和服の裾のト

から　やはりというか何というか、フサフサした尻尾が出ているそ

明らかに、キノネの

「すまんカラ、ルダ　僕は人間、師匠　しゃ　また小説のみしゃか、今の皆俺は基督

教会と盟約があるそうしやからカラ　パトラ、お目もこっちゃ来い」

ま、待て。おいキツネ。

今お前、皆俺のことわなかったか　しかもあのヒルダやパトラと知り合いらしいし

何者なんだ。この玉藻とかいうキツネ少女は。

意外なキーパーソンかいたみたいだそ　すく見元に

どうやら超能力者や怪人たちには俺の知らない人間関係があって、コイノはその二ネで

俺にも味方してるらしいな　なんとなくだが、その空気が読めてきた

玉藻に声をかけられた霧の先、でかい水晶ーを指の1でクルクル回してたパトラは

タマモ　かつて先祖が教わった諸々の事、妖は感謝しておるかの、イ・ウー研鑽派の

優等生どもには私怨もある　今回、イ・ウー　戦派は、番属、ちゃ

アヒル口で、そう返している。

「あー……お前はどうするのぢゃ。カナ」

水着みたいな衣装を着たパトラは、コブラを模した金冠ことカナの方を見る

死神が持つような大鎌　サソリの尾を模えたカナ　俺の、兄さんは

創世記41章11――「同じ夜に私達はそれぞれ夢を見たが、そのどちらにも意味が隠れ

ていた」　私は個人でここに来たけれど、そうね「無理矢」させてもらうわ

宝石のような瞳を閉じて、そう宣言している。

「そうか・　まぁ、それが道理ぢゃろうなぁ　」

それを聞いたパトラが、しゅーん……と、いきなりしよぼくれている。

しょうがないなあ、という表情でパトラの猫をつついた兄さんに、パトラはわたわたと

場面　ここいるか
兄さん
あんた　この戦いに参加するつもりなのか　何か狙いなんだ
ジャンヌ　リバティー・メイソンも　無事済　だ　しばらく様子を見させてもらう
という低く通る声は、霧の最も奥にいるトレンチコートの美男子が
触れれば切れそうなほど、鋭く、危険な、象のするヤツだか――
それ以　何も言わないから、それ以上何も分からないな　コイツの事は　正体不明だ
「――LOO――」
もっと、いや、最も正体不明なヤツか、声、いや、音をけた
これればずっとコイツから目を逸らしていたかった　非かり、銘ひかいた風車の下に
いる、というかある、3mを超すシルエット。
1歳やヒルダ以　に人間らしくない、迷彩塗装の鋼鉄ヤロウか
ボディのあちこちから、照準器、アンテナ、擲弾砲、発神遮発射機、etc　を
ジャキンと突き出させたそいつは　見すると戦闘車輌のようだが、それは違う
まず、車輪じゃない
タイヤやキャタピラの代わりに、膝か人体とは逆関節の、本足でいる
さらにボディーのあ右にはこれもまた人な脚甲のマニピュレータ、かあり　というか、
ハルカン砲とは――通常は戦闘機などに搭載される機関砲の製口径で、秒間120発もの弾をバラ撒く鬼のような武器だ
使用弾薬は1発か100gもあるM50弾　人間なんか、掠めただけで致命傷だぞ
冷却の配合1.3秒以上は連射できないらしいが、それでも、持ってくるのは反則だろ
そんなケテモノ
LOO――LOO　LOO――
二足歩行の戦車、と呼ぶしかないソイツは……ルウー、ルウー……
と、何か喋っているようだが……何だ？　分からない。
LOOよ　お前かアメリカから来たのは知っていた、私はお前をそこまで
意思疎通の方法が分からないままであれば、とちらの連絡に
先なすか　良いな」
物怖じしないジャンヌにビシッと言われたソイツは……
「LOO」
と、頷くように少し姿勢を変えた。
それで何となく分かったが、あれは日常兵器じゃないな　中に人が乗り込んでる
うなれば、人型1真戦機

名前はよく分からないか――100、と思うことにする　シャンヌもそう呼んでたしな

「――『眷属』――なる！」

いきなり、インディアン喋りでルンな指を張りげたのは――

トランマ模様の毛皮を着た、10歳くらいに見える女の子だ

なんで、こんな子供が

と思った俺は、その理由をすぐさま思い知った　ソノ、キングな光景と共に

その少女は叫んだ後、くっ　ぶっん　と踏んに置いていた大斧を持ち上げたのだが

その斧が、本人よりでかいのだ

人きく、ブ厚く、斧というより、鉄塊と言うべきソロモノ

女子の重量挙げ世界記録はクリーン&シャークでも200キロにならないが、明らかに

それを超えた重さだろう　―確には分からないが、300キロをトらないハズだそ

少女はそれを持ち上げたのだ　しかも、片手で

ずしん

その斧の　派手な小根飾りをつけた石突きを少女が地面に突くと、足元に微震が起き

た　なんて重量感だ　岩き地鳥全体が震えているような錯覚さえする

「――ハピ――『眷属』―」

鼻―を向いて、ちょっと鼻に掛かったクセのある声で繰り返したその少女の

名前はよく分からないハヤハヤ　鬼ニ　跳ね　か　た　髪　ト下　ノノ

2本のツノが、見えた。チラッと。

―なるほど

コイツも、ハケモノってわけか

ハピ　と自称したらしい少女のツノは、アリアのアクセサリーよ小さい

額の左右、その内側に皮膚が内側からちいさな円錐形に盛り上がっている　ウマやシカの

等はった角というよりは、サイやキリンのように皮膚に覆われた角のような

――なビと、ハケモノを冷静に分析できるようになってる自分が哀れになってくるな

「退け　バスカーノル、はピノちに付くのだ

いきなりジャンヌがこっちを向いたので――

俺は、頭の中が真っ白になってしまう

「な、何だ　何で俺に振るんだよ、ジャンヌ

「お前は、シャーロックを倒した張本人だろう

い、いや　あれはどっちかっていうと流れで　アーアを助けに行ったら、たまたまシャ

ーロックがいたっていうか

「また分からないのか　この官戦会議にはお前の　味　最上『バスカーノル』という

組織名ができたわけだが　その、リーダーの承認、署名が不可欠だ　お前はイ・ウーを壊滅させ、私たちを再び戦わせる口実をもったのだからな

「ま　待て　ハスカーヒルってのは　あれは学校に提出した　ただの学生武偵のチームだぞ　お前らみたいな連中とは違う　それに俺はリーダーといっても、名前を貸してるだけの――」

魂に　お前は、やったのだ　やったのなら、その責任を取れ　男たろう

「ふざけんな！　俺はここにいたって、いきなり呼び出されただけだ　お前、俺にどうしろってんだよ」

――師団か、脊柱　生き残れそうなら、いつけ」

お、い、

有無を言わせない口調のジャンヌに、俺は言葉を返せない

――俺は関係ねえ！

と、叫んで逃げ出してしまいたいのに……

今、俺には超人たちの視線が集まっている　それだけで、身動きが取れない

まるでヘビに睨まれたヘヒの群れに包囲されたカエルだ

いや、そんな俺とジャンヌに、コウモリ女・ヒルダが、クリクリの白い目玉を回しながら声をかけてきた

そ　、　、　、

警戒心から話に割り込めな、俺か、最後の1人を見ると
最初から話を聞いているのかいないのか分からなかった、ピエロみたいに派手な衣装を着た男が――がしゃん！
と、それまで聴いていた携帯端末ブレーヤ をいきなりヤフォンごと足元に捨てた
「チッ。美しくねェ」
そう吐き捨てて顔を けたそいつは… やっぱり 話を聞いてなかったみたいな
苛ついたような目で俺たちを見回すその顔は、どこかの軍事民かやる戦闘化粧みたいな
フェイスペインティングに彩られている。
ケッ ハカハカしいぜ 強えヤツが集まるかと思ってきてみりゃ、何たこりゃ 寄せ集めの走り集いってワケかよ どいつもこいつも取るに足らねェ ムダ足だったぜ」
こいつはどうやら、俺と同じ 帰りたい派だったらしいな
気が合うじゃないか。
ここにいたくない理由は、1人対みたいだけどな
GⅢ――ここに集うのは確かに 大使、戦闘力ではなく、本人の希望、組織の推薦に加え、使者としての適性、定番段の事柄が理解できる事などを基準に選出されている
また、義務ではないか お目のような個人で ない限り、大使には応じないし好戦的ではない男か、若い乙女を選ぶ方が多くからの仕来りだ お前の求める様な向きではない事は

私たちと同じ物を求め、奪い合う限り、いずれは戦う事になる その際 邪魔一か
【容赦】に付いておけば、敵の数が減るのだ 私たちは各々の組織の人数を明かしてはいないが、少なくともここの一余名のうち、数は敵に回さずに済む
敵だ。」
ペッ、と脇にツバを吐いたGⅢ……それが名前か？
ソイツの無礼な行為に、ジャンヌが眉をひそめる。
笑わせるな 今日は、最上テメェらの間りに強そうなのが出てきてるみたいだから様子見に来ただけだ いいか 次は 番強えのを連れてこい それを今殺 ……
とにかくGⅢの体から
ノイ ンンン… という壊れた蛍光灯のような かしたかと思うと
その姿が、見えなく、なっていく。
文字通り、消えていくのだ 今はもう、GⅢの背後を流れる霧が流れが透過して見える
まるで特撮映像 の、透明人間

見る間に半透明から完全に透明になり、消えてしまったG3は
や　し余そうなヤツだな　能力も、話しっぷりからするに、性格も
「――下賤な男　吹えづく仔犬のようだわ　殺す気も失せる
夜なのに一夜を共にしたままのヒルダか、溜息交じりに言う
「でも、これで全員済んだみたいね。そうよね、ジャンヌ？」
その通りだ　最後に、この論争は　冒戦会議の地域名を元に名付ける慣習に従い、
極東戦役と　FFWと呼ぶ事に決める　各位の参加に感謝と、武運の祈りを
「じゃあ、いいのね？」
う　――もう、から
いいでしょ別に　もう始まったんだもの
待て　今夜は　ここでは、お前は戦わないと言っていなかったか
そうねえ　ここはあまりいい環境ではないわ　高度も低いし、人気もイマイチよ　でも、
気が変わったの　折角だし、ちょっと遊んでいきましょうよ
なんだ、お前ら。
何の話をしてるんだ。
なんで
こっちを見てるんだよ

血を見たな　た　戦に義などない　通り、掘かったという　ねえ
に、　こ笑、ビキニを俺に見せたヒルダに
ジャンヌか慌てた表情で走ってきた紅緒（ヨーウィンキング）マハタキ行り――逃げろ。――に、俺は――を
見張る

俺を巻き込んだハタモノたちの会議は、終了し――
ここからは　誰が誰と戦ってもいい　ここレかよ
たがいきなり仕掛けてくるというのは予想外だったらしく、ジャンヌも俺ったまま
剣を持ち――げている　その刃が　ばき、ばきばき、と氷の結晶を纏っていく間、
そそそ　そそ
と足元にある自分の影の中に溶け込んでいく　ヒルダの姿が、建動もか取れなく
なんて　月現実的な光景だ
ヘレ　タを抜くが、撃つ対象がもう、ないしゃないか
影は引きずられる絨毯のように、棒立ちの俺へ向けて蠢いている
「遠山、逃げろッ！　30秒は縛る！」
ジャンヌが投擲槍（ジャベリン）のような手つきで投げた魔剣（デュ）が、ザクッ――！

と、その影に突き立つ。
その瞬間、影の動きは鈍り始めた。ノインヌの突き立てた剣で、地面と縫い付けられたような感じだ
だが　その影縫いは不完全なようだ
それでも、ズル、ズルル、と、こっちへ向かって　また蠢いているぞ　影か
こんな　こんなヤノ
ヒステリアモードでも何でもない、ただの高校生の俺に
どうしろってんだよ！
そもそも、どっちに逃げればいいんだ　あちこちにワケの分からねえヤノらがいる所で、こんなバケモノから……
助けを求めるように、キツネ少女・狐藻の方を振り向くと
狐藻は、こっちを見ていなかった
人工浮島の南側――海の方を見ているいや、狐藻だけじゃない。
あのハヒとかいうノノ少女も、大斧を手に同じ方角を見ている
その2人に続いて、怪人たちは次々と南を向き始めた

その数秒後　ようやく、トルルルル　とインターフォンが俺の耳にも届こえてくる
あれは、小型のモーターボートが上陸する音
ごつん、と、北側人工浮島に衝突するように接舷する音に続き　しばらくして　――
ばしゃ　空き地島の南端、その方向から人が掴まるのが見えた
あ、あれは
「SSRに網を放らせといて正解だったわ　あたしの方が速くところにたどりつくとはね
その勇気だけは褒めてあげる　そこにいるんでしょ　バトラー　ヒルダ・甲高いアニメ声。
んしょ　と、空き地島のフチによじ登ってきた、セーラー服のノインヌ。
アリア……じゃねえか！
イ・ウーの残党！　セットで逮捕よ！　今月のママの高裁に、［　］何かできるかね
霧の向こうからだと全容が見えないのか――
アリアは自分が踏み込んだ場所のヤバさに、まだ気づいていない様子だ
「ア、アーア！　今はマズい！　ここには　！」
自分の事はさておき　俺はアリアが火に油を注がないよう制止しようと叫ぶ
だが、未逮捕のイ・ウー残党を見つけたアリアが止まるハズはない

揃い踏みしている怪人たちに、「」というルビをふりながらも、ごやきしやきー
「銀と漆の拳銃を、　とも抜いている
や、やめろ　こー
「――LOO――」
ぎゅいん、と駆動音をけて振り返った装甲戦車・LOOに――
　子下を連れてきたのねっ　キンン！　いるなら援護しなさい！
アリアはいきなり、ばきゅばきゅばきゅー！
問答無用のマズルフラッシュを閃かせた
「！」
銃弾はLOO本体ではなく、その頭上、壊れた風力発電器のプロペラに命中した、
て火花を散らしている。
プロペラは錆び付いて脆くなっていたのだろう　集中砲火を浴びたその1枚が、ギギッ
ハキッ、
軋み音に続いて、根本でブチ折れた
――LO　ッ？」
駆動音をけたLOOは上を向くような動きをしたが　ゴスン、
避けるヒマもなかった　落下してきた数トンはあるプロペラに押しつぶされ、その場に

[illegible]

あ、アリアは　敵方味方かも分からないの
アリアのやつ　いきなり、やっやがった
明らかに故障したカンジで煙吹いてるぞ、LOO。
あはっ、あはは　来た　来た！」
ビたたたたっ、その場でガニ股になってグルグルするのは、さっきのノノ少女、
ハビだ
鉄塊斧を小刀のように軽々と振りーげ、踊ってやかる
まるで菓しいお遊戯か始まった幼稚園児みたいなノリだ
[illegible]
ビルダの力を確認しようと思って振り返ると、こっちはこっちで――
貴れたLOOに爆笑する魔女　カノ　グラセの背後に、修道女・メーヤが、そ
　とー込み　よいしょ　ー！　という仕草で大きな剣を振りかぶり――
「水を魔女　討ち取ったりイ　ッ！」
金切り声と共に、カノェ　グラ　セを真っ　つけするような勢いで剣を振り下ろした
がぎんっ！
ヒっくに気づいていたような動きで、魔女は鳥剣――拡張の影刃とダイヤモンドで飾り

れた、古い西洋の軍人が持つような剣だ ――で、切り結ぶ

「あー、メーヤ　お前サント、いっぺん死なないとダらねェなァ　そのアホさ」

カツェ＝グラッセか細剣をいなすと　ガスンッ

メーヤの人差かコンクリートの足元に落ち、剣の自重で突き刺さった

お、人人しく斬られないとは　ああ神よ、この者の罪をお許し・・いえ、許さなくこ結構です！　神満代行ッ、謹んで務めさせていただきます！

せえ、せえ　ともう息を切らしながらのメーヤか、改めて大剣を上段に構えこる

あ、あっちも始まっちまったぞ。

――ううんたよ、これ

何の接触れもなく、ぱしゃっ　と、突然2人の間に水が弾けて

水滴の1くらまに紛れるようにして、魔女は　瞬て聖女から距離を取った

そして捲れあがった黒いロープの内側から、金ピカの銃を取り出し発砲している

あれは――ルガーP08　銃本体からスラ　と伸びたハレルや、尺取り虫のように動く銃身ー部分トグル動作で分かる

今しや骨董品だが、日サチス・トイツ軍では将兵御用達しだった命中精度の高い銃だが、そのP08の弾は――パンパンパンー

僅か9mほどの距離から連射されても、メーヤは当たらない

うっ、[illegible]、[illegible]、[illegible]体を捻[illegible]ように見えなかった

考えぐい光景だが、まるでメーヤには弾が当たらないように見えた　今のはチ　やっぱダメかよ　とこと人重のいいヤツだな

べろん、とロープを口らめくって――生白い腿と紫のカターリングを露出させつつ、カツェ＝グラッセは銃をレッグホルスターに収める。

そして短剣を再び構え　改めて大剣を担ぎ直したメーヤめがけて、駆ける

その2人の間に　サッ　と、防弾コ　の人影が割り込んだ

金属音が2つ連続し、優組の人鎌か2つのメと同時に切り結ぶ

カナ　ー

その名を呟く俺に「早く帰りなさい」というような目配せをした兄さんは　人前を鎌背で、短剣を鎌の柄で、バランス良く静止させている。

そして、くんっ、と腕の方向を変えたけて――メーヤとカツェ・グラッセは同じロープを翻して転んでしまう。

「お　人さん　今はまた――ちょっと早いわ　もう帰りましょう？　ねっ」

ニコ　、と――

女優顔負けの美人顔で微笑み、編みしけブーツを鳴らして霧の奥へ後退していったカナ

を、2人が呆然と見送った時……

「キンジー　――ジャンヌもいるの!?　どういう事!?」

俺のそばまで駆け寄ってきたアリアが、周囲を見回し　ジャキン！　ジャキン！　と手際よく、スカートの内側から取り出した弾倉を銃に再装填している

アリア、撤退だ　ここはマズい　見て分かんねーのか

最初は霧でよく分かんなかったけど、どうもそうらしいわね　――

カナのもへもみ寄るバトラを見たアリアは　1歩を今せ、ハハ

周囲の全員を威嚇するように、両手を広げた姿勢で拳銃を突き出す

バトラはあんたのお兄ちゃんと　緒みたいだし――ヒルダは、逃げたみたいだし

言われてヒルダの事を思い出した俺は、霧の雪う足元を見回す

確かに……影は消えている。

いや、ヒルダだけじゃない　正体不明だったコートの優男もいない

いきなり始まった戦闘から、いち速く逃げたらしい

漆黒　ない　か、足元　山松模様の美しい絹手毬が落ちてる

その手毬からは微妙にキンヌの兄貴の気配みたいなものが　出ていたが、俺の視線に

気づいたようにシュッと毬の内側に引っ込んだ。

よく分からないか、防御モード　かっ　それ

撮影者が[illegible]

[illegible]

[illegible]

この水の壁に隠れて、逃げるつもりなのだろう
シャンヌが爆発のように水粒を広げていく事に集中する――その時
「……！」
アリアの、アリア自身の影の中から――
まるで、プールの水面から上がってくるかのように――
あの時のプフトと同じように姉を金色に光らせたヒルダが、土笑いて浮き出てくる。
[sup]Mit Kandidat aus Pulpe Prinzipal ist fast fertig[/sup]
[sup]※訳：果肉からできた主役はほぼ完成の意[/sup]
真後ろから、レーマニア語で呟くヒルダに振り返ろうとするアリアだが、それか、できない
既にヒルダが、真っ赤なマニキュアをした右手でアリアの後ろ首を掴んでいるのだ
ハンマー
というフグノフの銃声――
「レキ　ル
ヒシェ
[sup]Schuss[/sup]×34R弾がヒルダの頭部を右ーから右トへ貫通し、縦ロールのツインテールを跳ねさせたか
キャン

着ロ　ー　ア　ア　ア

駆け込んでの突き――フェンシングの華麗な動作で、シャノンの鎧が翔ける
じゃら、
アリアから離れたキハで鎧を突き刺したヒルダは、くるり、とターンして離れ
嬉しい誤算だわ　私は第一態のまま、もう一段を外せるなんて　おほほほ　おほほほほほほ」
手の甲を頬にあて　もう、レキに撃たれた銃創が血が止まってやかる――更に響く、
超一流の高笑いをした
ほーっほほほほ　ヒルダ　ほほほほほー」
耳を塞きたくなるような嬌笑が響く中、アリアは噛まれた左耳から――首に左手で触れ、
出血量を確かめている　そこで動脈を切られてはいない事を確かめ、チャキッ――
ガバメントを構えて、振り返ろうとするが……
がくっ、と、その場に膝をついた
あ　か
俺が青ざめてアリアに駆け寄ると、
マズいぞ、遠山の　毒よりマズい事になりそうだ」
誰も触っていないのに、かってきた手錠が、足元から這ってくる　十字の声で

海より、マズいな
という事だ？　と、アリアを見るこちら、その一葉の意味が分かってきた
アリアの体が――
ぼんやりと、光り始めている。
目の錯覚しゃない　体の周囲に、緋色の光の靄のようなものが発露しているのだ
「これを……俺は見た事がある。過去、2度。
「おお――」
アリアを見て驚くような声を上げている、そこのパトラレ戦った時
そして――イ・ウーでシャーロックと戦った時
アリアは、この状態になった。
そしてその後、体から艦砲のような威力の光弾を放ったのだ
だが、あの時とは少し違う
光か外側にどんどん出てくるというよりは――内側に龍もっていて、それが僅かに漏れ出てきているような感じだ。
「アリア……大丈夫か！」
両手でアリアの肩を揺すると――

アリアは、二度、三度、苦しげにマバタキをしてから、
「――」
無口のまま、ゆっくり、俺の方を見上げた
その赤紫色の瞳が、俺を捉える
誰？
と、言うように。
アリア？
――違う
この目つき。この、表情
何か月も一緒に暮らしてきたから分かる。
目つきも、おかしい事は分かる　だが――これは、アリアじゃない
誰だ。これは！
こりゃダメ　お、「設定七星」破、まで識ってたか
「光本に思いなさい　史　初よ　設分数を人数かけにするのは――
俺の足元の手錠は、ヒビダと一緒を交わすと
鬼――ン　アリアが来てしまったのか運の尽きしさ　は俺かいますから　消れる　ない

アリアを動かさぬようにしろ　メーヤ　おーもっ　ひゃせ
なレ　ってかレ、はしゃ――　と、白神をしぼって九ノ一像に向ったまるでアニメか映画のような変身を見せた上澄は、耳や尻尾のモを追ってその小さな手に、巫女が持つような御幣を持っている
そしてアリアの方をにらみ、御幣の両端を棒術のように握って構えた

緋色の光か　際涌まったので、俺はアリアの両肩を掴んだまま、言葉を失う
光は炎のような緋色をしているか、熱くはない　それはむしろ
たか　首になったように、指先に光が集まる現象は起きない
あの時とは違う現象……なのか。これは。
光はそのまま――ぱっ！
と、アリアの体から弾けるように！
う。
たたアリアの体を支えて呼ぶ事しかできない俺の両手、右往、あちこちへと飛び散った
強力な赤色灯のように、輝いて飛ぶ、複数の緋色の九球
その九球か、「焼き付」ように感じられる
ハチノ

たところだった
「よーしよしよし。よい子じゃ……もどれもどれ……ッ！」
上澄は九の中心に語りかけるようにしながら
くい、と御幣の両端を押し下げ、九を押し戻した
すると九は御幣から跳ね返るように、アリアの右胸へと戻っていく
「――きゃ、あ、あ、あ」
慌てるような声を上げたのは、修道女・メーヤだ。
彼女も九球を御幣で受け止め、その剣身を滑らせるようにして動かしている
ふら、ふらふら、と九を制御するためかよろめいたメーヤは、
「んッ！」
両手でクロスのハスのように振るい、九の球を投げ飛ばした
残り弧を描いて飛んだ九球は、アリアから微妙に逸れた　スを飛んだか、
駆けたノインスがラケットのように振るった剣に軌道修正されて――これも、アリアの
胸へと戻ってくる
「一体　これは

何か起きてるんだ
ついていけない
分からないまま周囲を見回すと、残りの光球は――
ヒルダ、カツェ＝グラッセ、ハビ、諸葛、パトラ……
さっき　眷属　の同盟を選んだ5人にそれぞれ、キャラされていた
5人のまわりから、みるみるうちに溜まっていく光は、何やら極々小さい1日の
ような固体になって安定していくようだ。
――その数、みんなにもあげるわ　「眷属」についたご褒美よ　それにこれ、お父様の
カタキ共への嫌がらせだから　私が1人で持つより、いやらしくていいでしょう？
コウモリ女のヒルダが、上から目線でパトラたちにいう
そして、自分も持っていたレモンのような光を胸元に収めた
「きゃは……きゃははは！」
光をぽんぽんお手玉したハコは、もちろん、とそれを口に放りこむ
そしてケモノのように四つん這いになると、霧の向こうへ走りこんでいってしまった
魔女・カツェ＝グラッセも、
「メーヤ、また会おうぜ」
「ヤノ、と娘を引きつらせるような笑みを作り――霧の　警戒　くなった方へ駆けていく

よ。
懐から取り出した細い竹筒に光の粉を収めながら、監督の老婆も嬉しそうだ
「あぁ、もう帰るの？　レキを殺すなら、見物してあげるわよ　あのときみたく、私の頭を
撃ったし
金色の目でレキを見上げつつ　ヒルダが言う
レキはヒルダを見下ろし、狙撃銃を持ったまま黙っている
いえいえ　私は後方担当ですので　と攻撃では戦えませんよ　君子危うきに近寄らず、
とも言いますし」
穏やかな口調でそう言いつつ、諸葛は
いつの間にか足元に置いていた煙幕弾から噴出する煙に紛れて、見えなくなって、
「ほほ……　ヒルダ、お前たち父娘には　ウーを紹介してやった貸しがあるでしょ　これは
遠慮なく貰っておくよ」
さぁっ　と、霧に交えた砂風に隠れるように　て、パトラも消えた
「ふぅーん　じゃあ、私も今夜はこれぐらいにしておくわ」
自分以外の「眷属」がいなくなったのを見て、ヒルダも　ずずず
と、また自分の影の中に沈んでいく。

あの褐色の肌を取ったのを合図にしたように、容姿、が、音もなく消えていく、

「ま、待て……！」

その場にへたりと座り込んだまま動かないアリアを引き寄せるように抱き寄せながら、俺はベレッタをヒルダに向ける。

だが……撃てない。勝機が見えない。

もう、ヒルダの足の目玉模様は影に沈んでしまったし――

レキやジャンヌの攻撃を受けて平然としているコイツを、アリアをあやしているうちに戦闘不能に追いやらせたコイツを、ヒステリアモードでもない俺が倒せるのか

いや、倒したところでどうなる

いまアリアの身に起きたことが分からない以上、それが致命的なもので、ヒルダにしか治す方法がかからない場合、発砲は最善手ではないかもしれないのだ

――どうする。どうすればいい。

分からない。今の、俺には、

「バイバイ。また遊びましょ」

カカ鏡を向けることしかできない俺を嘲笑うように、ヒルダはくるくると一回転をし、影の中に消えていった。

さらにその影も、みるみるうちに薄くなって――消滅、する

敵のレキやジャンヌが全員いなくなったので、アリアを見ると――

アリアは

気を、失っていた

アーア、

声に振り向くと、ジャンヌが戦闘装束（コスプレ）を解除し、俺とアリアの所に駆け寄ってきていた

ジャンヌ

仲間が倒れている場合じゃないから責めるつもりはなかったが、俺の血には少々そう分別くさいのが交じっていたようだ。

やれやれ、とアリアの額を覗き込んだ、彼女か、俺の胸をホレ指さすようにして、

それから、ジャンヌの方に振り向く。

ジャンヌ　お褒めはせぬ　多少の小競り合いになるのは止めておれ、とか、ここの小娘どもは、ヒルダか　殺傷した　破りまで使いおった事、とりわけ予想外過ぎたぞよ

俺　そういうな、ジャンヌのために、もう一人

「彼女が……『緋弾（ひだん）のアリア』……なのですね」

気を背負い込んだメーヤも、やってきた

「どう見る、メーヤ。アリアの容態を」

「気を失っているだけ　のように、見えます　命に別状はありません
「儂の見立ても同じじゃ　緋袋は2枚でも機能せんことはないからな　弱まりはするが、しばらくは大丈夫じゃろ」
と言って、びこぴこ、レキツネ耳を動かした王藻は
「ジャンヌ、おしもヤソらを追え　雷姫はもう行ったぞ　儂の耳によれば今頁、日散に七方八方へ散っておるか　あわよくば、1つぐらい首級をあげられるやもしれん　たた、深追いはするてないぞ　儂は鬼払結界で守りを固める」
「はい」
ジャンヌはずっと年下に見える王藻に礼儀正しく頷くと、
「遠山　謝罪する　アリアの容態については　王藻とメーヤから聞いてくれ
ちゃき、と銃を鳴らして踵を返し、曲がり風車のプロペラ――もう、そこにレキの姿は無い　を見上げてから、自分のホートがあるらしい空き地島の東側へと駆けていった
いつの間にか霧も晴れつつあり、周囲にはだだっ広い空き地島が見えている
辺りにはもう、置き去りにされたフイトレ潰れた歩行戦車、そして風力発電器しか見えない
残っているのは、べたんと座り込んだまま動かないアリアと、俺・王藻・メーヤの4人だけだ。

俺は全員、影も形もない
まるで……悪夢を見たような気分だ。
しかし、これは夢じゃない。現実だ。
俺は、一体何が起きたのかも分からないまま、その夢を引きずってここにいる
座ったまま気絶している、アリアを抱き留めながら……！

2弾　変装食堂

アリアを賞金首にして宇宙島乃男子寮へ入る道すがら、俺は「春風」の連中からしたターンごと襲ってきやしないかと警戒していたが　一向は、

ヤツらは所詮、使者に過ぎぬ　はないからこの一帯には式神を放ってお見張らせておるのよ　角の浮島のレもらかい、春風が入ったら、すぐ式神が報せてくるから安心しろそれに儂の耳によれば、どいつもこいつも海や空を渡ってよろこんでおるわ　ふふん」

と、俺の不安を一笑に付した

修道女・メーヤにすれば、俺の住所を聞くなり「買い物をしたいので、先に行ってて下さい」とコンビニに入ってしまっている。

ああいうバケモノどもの行動パターンや、S研的な見解は分からないが　その専門家っぽい2人がこれだけ警戒を解いているのだから、たぶん大丈夫なんだろう

というか、そう思う以外に、俺には判断材料が無いのだ

となると……次に気になるのは、アリアの容態だ

自室に戻り、アリアをソファーに横たわらせるとー　ちっこいから3人掛けのソファーにすっぽり収めるように寝かせる事ができた　アリアは、

なにごとかをぶつぶつ呟いていたが　やがて寝たまま笑ってやがる

確かにアリアを失ってるだけ　というか、寝ているだけのように見える

呼吸も普通にしているし、脈拍も正常だ

ふんふん、神棚も無いとは、どういう家じゃ　仏壇の「ふんふん」

何やら俺の部屋にいきなり文句を垂れつつ　鼻をふんふんさせてキ　チンに入っていく上様よ

水飴は無いのか、水飴は」

なにと言いつつ、冷蔵庫から　理子のニマークで書かれたプリンを取り出した

そして一匙、匙、匙　なんと美味そうに百均のスプーンを取り、はぐはぐ

勝手に　食べ始めたぞ。

なにこれてんた

「ほもー　これもなかなか美味しゃのう　竜山　様もでいかがす」

プリンのフタ裏までナメナメした、豪は、大変幽愛な笑顔で振り返ってくる

後で怒るぞ、理子が　ていうか、なんで初対面の俺にそう親しげなんだよ

酷虐をついていると、とにかくここから、と裸にここから走ってきた上様は、

「ふもー　これから今代の遠山か　かつて伝承野で会った遠山と五　つ　初顔合わせに

思えんの　ちょっとばかし灯ってネクラそうな感じもするが、良い、良い　じゃあ、ほれ
何やら俺の縁起と乱り合いのような事を口ずっぱ　そして俺のアダ名をいきなり見抜き
ゃがって、ランドセルみたいに背負った木箱を見せつけるように背中を向けた
「……っ」
ほれ　今日は儲もよく働いたからな　1番料を入れろ
ふりふり、と1藻が背中を振った際、じゃらしゃら、というコインの音がしたのでようやくわかった
これ、賽銭箱かそ
そんなもん背負って歩いてんのか
「タマゲン　っ」
と俺が分からずにいると、
ほれ早う、入れろ入れろ
1藻は体を前に出す、ノオをひげんとしごいた
「……」
ずさ
と、俺はその光景に一歩後ずさってしまう
こ、こいつ、はいてないぞ。何も。

お、おい　はよ
ト駄は腹かんで遠いじゃろ　家のトしや
「そ、そうしゃない　ハ、ハンノをはけ　ずめて、その服に尻尾を出す穴を開けろ」
「ぱんつ？」
1藻はシ　ボを「っ」型にし、くる、とこっちを振り返り、下着のことから　和服には付けても湯文字しゃ　そんな事も知らんのかと、ズレた指摘を自してる
俺は冷やけを拭い、1藻の子供っぽい外見のおかげでヒステリアモードにならずに済んだ事を神に感謝した　まあ、コイノも神の　種なのかもしれないけどな
とはいえ、応、俺は1藻から視線を逸らし
眠るアリアのそば、コの字形に並べたソファーの一つに腰掛けた
「アリアが心配か、遠山の」
「当たり前だろ」
お前のト半身も心配だけレな　風邪ひいかりしないのか
「案ずるでない。すぐ緋緋神にはならぬ」
「……ヒヒガミ……？」
と、俺が眉を寄せると

そうか、知らんのか　まあ、やむをえんな　鬼一侍は絶えつつあるからの

藻はへたん、とその場に崩れ気味の上体をした

鬼王家で何一つ引き継がれておらんか　ならば、儂が教えるしかないの　儂は十藻――

十四全ての人狐　お前たちの言葉でいう、化生、妖怪じゃ」

出た

今度は妖怪か

まあ超能力者や魔女、吸血鬼も実在するんだ　今さら驚く事もないか

母も十藻、私はもし藻――儂の　族は昔から人間と色金の出現を見張り、監視・監事を勤めてきた　その機関で世界平和と・対敵の関係もでき、今に至る　その色金しゃが、このか娘の心の臓にも、ここからは、アリアにも宿ってないみ　埋められておるのしゃ

それも、史上最も大質量の緋緋色金かな

あ、ああ　そこは　心、俺もアリアも知ってる

色金と人は、繋がることができる　その繋がりには2種類あってな　一つは和び　――おそらく、超能力の力を供給する繋がりと　一心同体　――感情の繋がり、しかし　質量の多い色金は、体も心も、人と過剰に繋がってしまう　特に「心臓」、つまり色金が人の心と繋がりすぎると、人は心か色金と混ざり　しまいには取り憑かれてしまうのしゃ」

そういえば

京都の星伽分社で、白雪と

――「色金は人の心と通じる金属」だとか、

「色金に、憑かれる……どうなるんだ、そうなると」

緋緋神になる。なったら、殺せ」

「こ、殺せって、おい……！」

慌てる俺に、十藻は冷たい瞳を向け告す

慌てるでない　すぐにはならん　とはいえ　なったら躊躇わず、すぐ殺せ　さっきの様子を見ていたが、この小娘はおヤを信用しているようじゃからの　まあ、やれるしゃろお子がやらなくとも、誰かが殺す　儂でもよい」

やめろよ！　殺すだの殺さないだの　そんな話

「この世に戦が起きても良いのか」

「戦……？」

「緋緋色金は戦と恋を好む厄介な色金でのう　それに憑かれた者　十緋緋神は、闘争と恋心――その2つの心を激しく荒ぶらす、なり神になるのじゃ　しかも、なった人間もおる　その者は帝を籠惑し、戦を起こし　ついには、鬼一侍と早伽羅女とを打ち殺されたのじゃ」

ッ」

「案するでないと言ったじゃろ　アリアは、すぐにはそうはならぬ
何かで　助けてるのか　そうなる事を
分からないままに、素人じみた質問をすると――
こくり、と玉藻は頷いた。
その提案を　度と繰り返さぬよう、当時の巫女たちが編み上げたのか
この小娘の緋色金にも、しっかり殻金が被せてあった
「カラガネ……？」
殻にゃよ、殻　緋緋色金に特殊な殻を鎖のように被せて、「止結び」みたけを結ばせ、
「心結び」は絶縁する　そういう、人に都合よい殻を作り出したのしゃ　殻は7枚あれば
心結びを断絶できると分かったので、殻金七重とも言うがの　殻があれば、止結びは
緩やかに　3年ほどで結ばれ、心結びは完全に絶たれる
3年――という言葉に、俺はイ・ウーでの出来事を思い出す。
確か、シャーロックが言っていた。
緋弾の継承者は　能力を覚醒させるまで、最低でも3年のあいだ緋弾と共にあり続ける
必要があった、とか。
それは下僕の…　「止結び」が完成するまで、という意味だったのかもしれないな

[illegible]　たんで　[illegible]　はなかったの　お前に殻金は7枚のうち
2枚、戻すことができた」
2枚　たと、どうなるんだ
この小娘は緩やかに、色金に溺れていく　いずれ、緋神にもなるじゃろう
「々慌てることない　しばらくは大丈夫じゃ　その間に、殻金を　眷属」の者共から取り
戻せばよい　どうせ戦の相手しゃ　後で7枚集めてくればよいのかっ」
新しく　その、殻金ってやつを作れないのかっ」
数多の金剛石、青石、緋石、翠　諸々の材料を集め、白金人からの巫女を働かせて
錬成すれば、作れようが　しかし殻金は色金と馴染ませるのに百年は必要しゃ　それを綴じ
ようと、残りの5枚を作り直そうと、小娘が緋緋神になるまでには間に合わん
しゃあ　どのくらいなんだ、その殻金2枚で抑えられる期間は
ながらぬ　そんなこと、試した者はおらんからな　ただ儂の見立てでは　山勘じゃが、
数年はもつじゃろ。今日明日どうこうなるものではない」
「　」
数年　か

それを、どう考えればいいのか
それだけの猶予があるなら、確かに何とかできるかもしれない
とりあえず、今のアリアは無事みたいだし　な
とはいえ、緋緋色金の「心結び」は少しずつ始まる　まずはこれから、戦と恋について、
小娘は本心をあまり隠さずに言うようになるかもしれん　それが最初の指標しゃ　しゃか、
お主は慌てず、それに応じろ。良いな？」
戦と　恋　？
俺は少し考えてから、眠るアリアを見て……頷いた。
「ああ。分かった」
戦　戦闘についてアリアが本心を隠した事は無いだろう　今までと変わらないわけだ
それに、恋　恋愛については　これも人一人たろう
初めて会った頃から何かにつけ　興味が無い　って言ってたからな　アリアは
始業式での「れ、恋愛なんて　くだらない」に始まり、「レキンカ」た時は
「恋愛なんか　あ、あんな時間のムダ、したこともないし、するつもりもない」
レキには「恋愛とか、そういうのは　と、どうでもいい！　ほんとに、ほんとに、ほんと
にどうでもいい　ホントだからね？」まで否定してたし
だからアリアは……変わらないんだろう。何も。

メ　ヤ　し
薬はまるで外が見えているかのように言うか、俺は心ヘレッタを引き連れて行き
ノメキ穴から店の外を見ると、確かに修道女・メーヤたった
「……何か買ってきたんですか？」
と、年上っぽい彼女に敬意で聞きつつ、アを開けると、
「あー、トオヤマさん　よかった　お部屋、ここたんですね　私、力が足りなくて
フラフラしてたら迷っちゃって。うふふっ」
と、アハアハ笑いながらメーヤが入ってきた。
なんか　：さっき魔女カソェ　グァセに斬りかかってた時とは全然違う　ほっとか
した雰囲気だな　なんか、どこかの少女さんの　重人格　ふりを彷彿とさせるっ、
その少女さんというかーは、今後、水天宮の祭事に出かけている
婦りは明日の午前中とかに　ていたか
さっきも、1かの加勢があれば少　は違　てたかもな
と、さっきあまり力勢にな　てなかったメ　ヤが持ってきたビニール袋の口を何気なく
見ると……うっ。何だ。
洋酒のビンが大量に詰まってるぞ。

こんなじゃあコンビニから買い占め状態だろ　あと、菓子パンが幾つか。なんだそれ。
頬をひきつらせる俺に、にこやかな微笑みを向けたメーヤは
トオヤマさん　よくぞ、あの場で無傷でしたね　やはり噂通りの、名馬な聖騎士です
と、米各用スリーパをはき、ヒールの袋を両手にハタハタとヒングルかかった
なんか　背中のでかい剣はともかく、団地のお奥様ってムードだな
俺もリビングに戻ると、メーヤは、ふわり　ソファーの傍らに正座し、
「タマモさん、アリアさんは？」
ガサガサと酒ビンを取り出しつつ、アリアの様子を見ている
無事しゃ　しかしやはり設金が足らぬ　"眷属"の連中から取りたてねばならんな
「まぁまぁ……くぴっ」
あ　飲んだ　レンェ・クレ　ム・ト・ブル　ヘリー　出てるぃニオイのする、カク
テルベースっぽい果実酒をストレートで。
I像といいこの人といい、仕事終えたら飲み食いするか、睡眠の人々なのかな
「いえ、それを遠ーにやらせるのは荷が重そうしゃ　僕らで何とかしよう　メーヤ、
お米にカノェ　グラノセをすち、1枚取りゆしてこい　奴は狼遠に帰るっぺろ」
「はい」
いきなり強そうな酒を水のように飲みほしたメーヤが、うなずく

ンと、次の酒ビンを取り出した。
（あっ、あれは……）
ヘイリーズ・アイリッシュ・クリーム――衛生科の我那覇先生が授業中に呑んでた
砂糖菓子みたいなニオイのする　高カロリーで強い酒
メーヤはその酒をくぴくぴと空けると、更にこれまた強そうなハ　ホン・ウィスキー
・ワイルド・ターキーの口を捻るようにしてヒキ　と開けてる
ううん　酒なんて飲んだ事ないか、見てるだけで気持ち悪くなってきた
あ、あの　それ
俺に悪いんじゃ、と続けようとした俺を・
メーヤが、びし　白い長手袋の手で制する
酒を振る動作で、きら、きらり　ふわふわのブロントヘア　が揺れた
飾りたいことは分かります　たしかに修道女は、お酒を飲んではなりません」
「い、いや・　そうしゃなくて　」
しかし、私の他にもこういう修道女はいます　私たちは特例なのです　I種超能力者は
自分の体を削って能力を消費するので、戦った後は人間に何かを経口摂取しないと先んで
しまうのです　糖分、タンパク質、アスコルビン酸――摂取すべき物は人それぞれですが、

私の場合はアレコレ　してます　でもご心配なく　イタリアでは16歳から飲酒が認められていますし、一切酔わない体質ですので　暴飲の罪、お兄さんにおすみません　神よ赦し給えゴクゴク……ふはぁー」

神に赦しを請うた割には、すぐまた飲んだなー

まあ、この人は　自分より巨大な胸の他は全身スラッとしてるし、高カロリーな酒をレんなに飲んでも大丈夫なんだろう　見たところ、確かに酔ってないし

俺もその程度の超常現象は、アリアのももまん　気やレキの超常連事件で見慣れてる

悲しいことに　この日々、々驚いてたら心が持たんのだ　それはもうずんだ

と、リキュールの甘ったるいニオイが満ちた部室で――

俺も諦めを交じりに、ソファーに座り直した

また心配になってきた、アリアの鉄拳を予感して胸をさすると　平鉄だ、な

ぜ葉さん　あの魔女は必ず仕留めます　ご戦公議の和義にも失敬したし、このままでは宗教裁判で異端審問にかけられて、破門されて八つ裂き刑になって一字架もない、無縁墓地にうち捨てられ　私、あ、あの魔女ともに一緒に、地獄へ

ふるふる、レその場に震えたメーヤさんは、あんパンの袋をひねり、と開ける

せめて魔女狩りは完遂してみせます　殲魔科の単位も足りてません」

殲魔科……？

こ、この人、ローマの武偵高生か？

たとしたら世界中、どこの武偵高も、緒だな　変人ばかりだ

・まあ、やる気があるのは良い事しゃ　とうしゃ　カナは抱き込めそうだから

カナ。

先さんの名前を出した瞬間に、俺は頭を上げる

それは　分かりません　先輩は、以前と少し変わってしまわれたから・

メーヤさん　あんた、カナを知ってるみたいだが――

話に割り込むと、メーヤはウォッカのビンを丁に突き出してくる

はい　トオヤマさんの、お姉様ですよね」

お姉様

ま、まあ野っておくか　性鬼も個人情報の一種だ

勝丁に喋って、後で先さんにタコ殴りにされるのもイヤだしな

「カナ先輩のお名さんに、少し自己紹介　こおかないとですね　私はメーヤ・ロッソノ

18歳です　国籍はイタリアと同じイタリアです　父はイタリア人で、名前も

と、メーヤは長ーいレシートの裏に万年筆一可仗　ご書き、

「こうも書けるんですよ」

とや顔で見せてきた

　応、『ああ、なるほどね　おどろいたなあ』という顔をしてやるか

俺の反応に満足したのか、メーヤはヒマワリみたいな笑顔になった

――バチカン市国で映画師として叙爵を受け、ローマ武伯爵では魔術科の3年――あ、イタリアでは高校は5年まであるんです　留年しないですよ　それで、その2年の時、強襲科のカナ先輩と共に犯罪捜査をした事があるんです　彼女とはぶが今うといいますか、波長が合うといいますか　楽しくお仕事をさせていただきました

あー　」

俺は、何となく納得した声を出してしまう。

確かにこういうほんわかしたタイプは、カナと気が合いそうだな

その時、聖書の暗誦をお教えしたらすぐに覚えられてしまって　あまりの頭の良さに驚かされたのを覚えています」

なるほど　留学以降の兄さんが時々聖書の　文を語るようになったのは、この人の影響だったのか。

兄さ　カナには特殊な力があるんです　カナの時は、度読んだ本の内容を全部思い出せる　あれはチートですよ　驚くような性質の事じゃないんです

リアモードの力で覚えたとか

メーヤいせ兄さん　俺には　日本語は勉強に思えてきたクセに

それにしても　俺の知らない所で意外な人間関係があるんだな　超人・怪人集団には

そういえば、工業　お前もハトラにいきなり話してたよな　知り合いなのか

メーヤのビー　レ袋からクリームパンをこっそり抜いていた工業に聞くと、

「ん？　あ、ああ、パトラか？　うむ。会った事がある」

上座し自　た工業はパンを背後に回し、シッポで隠　ながら答えた

前回の戦で儂は　雀属二の　その時、ハトラの智祖はと何間たったの　そういえば1本語を教えたのか儂での　そいつは戦後、次の戦に備え、分の子孫に日本語を教えたそうじゃ　しゃから、ほれ　乳りはあれど、パトラの喋り方は儂に似ておろう」

確かに　パトラは、どこかりめかしい喋り方をすると思ってはいた

それは彼女に日本語を教えた智祖はが、そもそもこの工業から1本語を習ってたからなんだな

　前回の戦って、それはすいぶんの話じゃないのか　パトラの智祖はがってうぐらいだし。一体お前、幾つなんだよ」

プラトやシャーロックの事があったから、その子供、みたいで100歳だと言われても驚かない自信はあったが……

「儂か、建仁2年の生まれじゃから、数えで808歳じゃ」

「はっ……!?」

驚きに、それ以上言葉が出なくなる。

あ、あ、ええねえ

――11世紀、鎌倉時代から生きてんのかよ

というか、こら、遠山の　女神に歳を聞くとは何事じゃ　信心が足らん　へもへち、と、ちっこい手で俺の膝を叩く　薬は、どう見ても小学生

それも、低学年に見えるのに。

「だ、だったらもっと婆ちゃんのカッコすればいいだろっ」

膝を緩しながら反論すると、

儂は　ど々、人狐じゃ　それが変化して、この姿をしておる　人間に変化するとなると、質量はさほど変えられん　こんなちさな老婆かおったら不審がられて　都におられんようになるじゃろ　しゃから、童女に化けるのじゃ　そのくらい聞かんでも分かれ！

聞いても分からない理論を返してきつつ、手薬はどこからか出した偶幣で、さらに俺の膝を叩いてくる。痛えって。

「不審がられたくなかったら口とオを慎せよ、まずは

と、俺が至極真っ当な事を言うと……

こんな事は　お前が子供の姿をしてはいないわ

ふ鱗に触れられたようだったな

お前が子供の格好するんなら、子供として扱うからな　俺たって、カレーは外でお前に散歩使ってたら不審がられる　7歳くらいの女児に敬語使う男なんて、それだけで通報モンなんだぞ。今の日本では」

御幣を押し返しつつ俺も膨れる。

新人のくせに　今代の遠山はナマイキじゃ　いか遠山の　儂は何度も「戦役」を経験してきた、おぬはノビーターしか　戦い方も　生き延び方も、斬い方も、守り方も、よオく知っておる　しかから、もっと年長を敬え　信心を見せろ

と言うと、こやつめ、と頬を膨らしてこっちに背を向け、四つんばいになって賽銭箱を突き出してくる。

花びも重ねて、入れろ　信心を入れるのじゃ

・結局、金かよ　こいつかこっちに尻フリポを向けるな

しつこいから100円くらい入れてやってもいいかなと思ったが、子供を甘やかしちゃいけないな

俺はコイツと遠縁になれるよう財布から10円を取り出して、

はいはいゴメンよ、お姫ちゃん」
と、入れてやった
「まぁ。トオヤマさん、きっと御利益がありますよ」
ぱちぱち、と、メーヤがその光景に拍手をくれている。
なんだか俺はワケも分からん内に怪人レもの戦争に巻き込まれてるらしいが
今の数少ない味方らしい、この2人を見てると
不安が増すな　むしろ

その後、メーヤは成田空港への終バスに乗ると言って帰り、十蘭も、結界はすぐ広げる
今すぼこの浮島から出るでないぞ」と言い残し、2時頃に部屋から出て行った
パンの袋は片付けていったか　あ、酒のつきビンが机に置きっぱなしだ
まあ明日片付ければいいか　もう今日は、俺も疲れてる
ビン自体はどれも洒落てるし、インテリアだと思おう。
はぁ　」
・・・「円卓会議」で張り詰めていた気分も、あの2人のおかげというかせいというかで
すっかり弛んしまったな
とはいえアリアの事は心配だったので、俺はその小さな体に毛布を掛けてやり・・・

その後、頬杖をつきつつウトウトしはしたが――
アリアが吸血鬼になって大暴れする夢を見たりしてしまい、ちゃんとは眠れなかった
それでも少し深い眠りに入りつつあった、早朝……
チュン、チュン……というスズメの鳴き声の中……
「――バカキンジぃ！」

がすっ

ぐおっ

いきなり馬ー　ソのあんよで顔面を蹴られて、か弱めた
アー　アリアぁ
起きたのか
俺が目を擦りながら顔を上げると、アリアは――
キ、キ、キンジあんた　な、何っ　これは何っ　なになになっ　何なのよっ
制服姿にもかかわらず毛布で体を隠すようにして、わなわなわなわな
2～3人に分裂して見えるぐらい、震えている。

たか　それを見た俺はいの中で、小さく安堵の息をついた。
いつものアリアだ
俺には分かる
顔を殴られて怒鳴られて、というのも何だが、動作や喋りも、いつものアリアだ
「アリア、良かったよ……」
と言いかけた俺の言葉を普段通り中断させながら、
な、な　なんてあたしかあんたと2人で、も、もう敵なのよ　ほ　他に誰もいない
部屋で　2人っきりで　よと、夜逃し
ぉぉぉぉぉ　よい0・1秒
急速な面術の速度も、いつも通りだ
なか　何に赤くなってんだ
眉を寄せる俺から、すり、ずりり、と後ずさったアリアは、岡+1のように突き出した
毛布の向こうで……
おしゃしゃ　と自分の服の中をあたこたまさぐってる
何……やってんだ……？
レ見てたら、かし　拳銃（けんじゅう）一丁を俺はそ
お、おいアリア　そこまでいつも通りでなくていい

キンはほんとか、それ（ニア）を晩はしてきた　風呂入　風呂入中射
お、おい、落ち着け　おれ拳銃は2丁合わせても1発しか撃てた　というかさっき
から何を　てんた、お口は閉じ、空き地局で
時し　空き地局　き　記憶が無い
レ　たアリアは、ガラスのローテーブルにズラリと並んだ酒の空きビンを見て
レをまんまるに見開いた
「キンン　あ、あたし、何も覚えてない　それ、そ、その手口　映画とかトラで
見たことあるわよ　」
と、酒ビンの群れを指して、ぎろろろろ。
何をどう解釈したのか、俺を重大犯罪者のように睨み付けてくる
「お、おい、手口って……」
そこまでは、こんな事はこないと思ってたけど、ゆ、油断してたわ　それは女
たらしの常套手段　や、やってくれたわね　っ　い、いたた
は
アリアは連帯感に欠けていたのか、ヒルダに噛まれた首筋を押さえた
首元はほとんど無く、もう傷は塞がっているようだったが

そこにはヒルダに肌を強く吸われて鬱血した、唇形の跡が残っている。

「ま、ま、まさか！」

さらに赤面して頭からシュ、シュッと湯気を噴出させ、暴走機関車アリア号はどたどたどたー！

大慌てで洗面所へ行き、

「ぎゃー！」

英国貴族とは思えない悲鳴を上げ、どどどどどどっー

戻ってきた。

両戦争議にいたとのハケモノよりも、恐ろしい形相で

な、なの、何てことしてくれてんのよー　このエロキンシ!!　どエロキンジぃーー」

な、　何なんたよ、お前、　今回も

・アリアに俺が、朝、2人っきりで起きた

・アリアの昨夜の記憶が無い　なお、机の1には力フの酒ビンが何本も置いてあった

・アリアの首筋に、唇形の鬱血がある

この3つが組み合わさる事で、なぜ俺なガオガオ叱えられなきゃならねーんだっー

「こ、こ、これじゃあ……」

と、自分の首筋の唇マークを震える指で指したアリアは、

これしゃあ今日　学校、行けないしゃない　ハカキンシ

な、なんでだー

なんでそんな鬱血ごときで学校に行けなくなるんだよ!?

――つけるなら少しは後先考えてつけなさいっー　このエロハカキンシ、EBK、」

次回てオリンナル地団駄を踏むアリアの剣幕に、俺も次回になりそうだ

質問　体何を考えて、何をいけないんですか　俺は

という質問をするための挙手も間に合わず　これもいつも通りだ　ソファを踏み台にしてジャンプした、リアは、スカートを翻し

風ぺミサイレノノ

ミサイルのように、俺の顔面に両脚トロノプキックを叩き込んでくるのであった

その後――なぜかアリアは俺の顔を見るのも恥ずかしい、という態度で自室に閉じこもってしまった。

登校時刻になっても、出て来ない。

本気で学校を休むつもりのようだ。

昨日あんな事があった後なのでアリアと離れたくはなかったが、上級は"容嶋"か海や空を渡って――多分、船や飛行機で　ここから離れていった、と言っていた
それに、武神　俺なりの解釈で言えばレ　ダーレ警報を兼ねたような網を張っている、よもやっていた
しかもアリアは歩行戦車LOOをいきなり倒す戦闘力の持ち主だし、ヒステリアモードでない俺がいたら……むしろ足手まといだろう。
それこの諸条件から、俺はしかけた
しゃあ俺は行くぞ　心、銃と刀は手放すな　予備弾倉も満タンにしとけよ
アリアが勝手に自室、こいる公部屋のトアごしにしかけて、1人で登校する事にした
い部屋の内側から、
あれ　いつ竪ったっけ　えっ？
と弾数を数えて独り言してるアリアは――
やっぱり、昨日の夜の記憶が飛んでるみたいだ
並製科でよく見たか、人間、いきなり気をうとその前後の記憶が飛ぶもんだからな
あと　ある確かな筋から聞いたか、お前はイ・ウーの残党に狙われてるぞ　ヤツらの仲間もウヨウヨいる　こないだのコラ娘もその　派だ　くれぐれも気をつけるよう
と、薬にうなレ　れたイロカネ関連の事を避けて、心伝えておくレ　。

それは今まで通りでしょ、は、早く学校行っちゃいなさいよっ
アリアは俺を追い払うような口調で、アニメを返してくるのだった

やきもき　なか、英語、化学、数科目の授業を受けているとー
4時間目、3クラス合同のLHRが始まる直前、アリアはようやく登校してきた
見れば、ブレザー制服を着ているな　理子が部屋に持ち込んでた、キティーちゃん柄の襟元の飾りが自然に小さくなって、あれで隠せるようになるまで時間を潰したらし
俺を見るなりまた赤くなったアリアは、ぼすん、と隣の席に座る
もんのすごいあからさまに、俺の方を見ないようにしてる。
か、怒っている　というより、恥ずかしい、というカンジだな
怒り執態のシグナル　チワイオンみたいなヒゲも聞こえないし、時々、チラ　ーと
ちを見ては赤くなり、またソッポを向いたりしてるし
その挙動の意味はよくわからないので、とりあえずスルー　こで
（さて……これ以上、昨晩の事を伝えるべきかどうか……）
LHRが行われる体育館にクラスの皆と移動しつつ、その事を思案するアリアには、どうやら昨晩の記憶が無いらしい
そんな訳ない、いきなり昨日の突拍子もない事件について説明しても　信じてもらえ

ないだろう　しかも今、なぜか俺はアリアにやたら警戒されてるみたいだし
となるとそんな俺か1人で言うより、シャンヌやレキも巻き込んで今後の方針を決めてから皆で話した方がいい　人虎を成す、とも言うしな　自宅には上澤が、折を見て話すから、直接からは言うな　と言っていたが、それもアリアへの伝達を防ぐためかもた
それに「師団」だの「参謀」だの話をアリアにする危険性は、もう、ある
昨日もそうだったが、アリアはイ・ウの残党を見ると猪突猛進に強襲する傾向がある
裁判に勝てそうとはいえ、そいつらはアリアの母親に濡れ衣を着せたヤツらだからな
そんなアリアに昨日の事を教えたら、ヒレダを逮捕しにヤツの拠点――イメ　シたが、多分ルーマニアに城でもあるんだろう　まで遠征するとか言い出しかねん
――まあ、気持ちは分かるが
それは、非常に危険な事なのだ
まず、武偵の戦いはアウェーになったら圧倒的に不利である
これは感覚的にもすぐ分かる
敵を追い詰めるべき方向、逆にこっちが退避できる場所、武器弾薬や食糧・水の補給所、全部分かっているホームの方が遥かに戦いやすいだろう　通信科、車輛科、衛生科などによる救援だって、遠征すれば当然鈍る。
――次に、敵の戦力がまだ分からない。

簡単に言えば、敵の陣地に攻め入って勝利するには少なくとも3倍の戦力が必要になるということだ　それくらい、一攻め入る、には莫大なエネルギーが要される
だからとりあえず、アリアへの警告は今朝話した内容に留めて――
――しばらく、様子を見よう
まあ　こんな事を俺が　々考えるのもどうかと思うが
先月、俺はチーム・ハスカーどのリーダ　という事にされちまっている
その後で知らされたのだが、各チ　ムリーダーには　戦略I　という講義が必修となり、俺はそれにマシメに出ているのだ　割と簡単に単位が取れそうだったからな
そのせいというかお陰というかで、今はこういう事を考える習慣がついてきている
――ガキレも　それじゃ文化祭でやる　変装食堂　の衣装決めをするぞ
トン、
さわやかな生徒達を天井への威嚇射撃で静まらせつつ、強襲科教諭・蘭豹が叫ぶ
体育館には2年B・C組の生徒たちが集められている　B組のアンスは見あたらないな　欠席らしい
電話も繋がらなかった。盗聴を避けながら、「蒼鴉」を追っているのかもな
よぉーし、各チーム同十二集まって待機イーゴホゴホッ！」

単位制教諭の緩かな声と、D組とE組、減多に姿を現さないA組の連中はいないものの、可レチームのメンバーがそれなりに揃う。
緩め、むせるぐらいなら体育館でタバコなんか吸うなよ
などと言える俺のそばにも、同じ組のアリアや理子だけじゃなく、B組のレキ、C組のレキが集まってきた。
昨日の件もあったので　レキにそれとなく視線を送るが
レキはレキ　何ら反応もないな
いつものヘッドホンをかけたまま、ボーっとしてる。
まあ、今あの話をするのも場違いだしな　ジャンヌが来てからにするか
ていうかそれ……そのヘッドホン。
また風様から、キンジ狙撃指令とかを受けてたりしてるんじゃねえだろうな
と思って、ヘッドホンを真　にヒョイと外してやり、かぶって聞こえるとかも　レキかコ　ト何風のリモコンを操作　、俺の耳には学園サイレンみたいな音インストで始まる、ザ・プロテイン　ファイヤースターター　が聞こえてきた
な、何だよこれ。どういう意味だ。お、おい。音量を上げるな　うるせえ

レキは　由、アリアの方を向いたままこっちを見てないから、表情はわからんが
キンちゃん、クジ引き箱が来たよ」
「あ、ああ」
気がついたら俺の真横をヤ　フとでっかい　箱が通ったので、俺は我に返り、かぼ、レレキの頭にヘッドホンを戻した。
手払いの1年か持ってきた、　丸い穴の開いた箱は　武偵校の文化祭で俺達2年の部が担当する、変装食堂　――そこで各人が着る衣装を決める、クジ引きである
（このクジ引きも、命がけなんだよな……）
変装食堂とは普通の高校でいうコスプレ喫茶みたいな出　物なのだが、ここは　普通ない武偵高　着た衣装の職業をきちんと演じ　それらしく振る舞う事が求められる
なんちゃってでは許されない
武偵高からこてみれば生徒の潜入捜査技術を　般にアピ　レする機会でもあるから、ヤメにやらないと教務科（マスターズ）によるそれはそれは恐ろしい懲罰が待　ている
つまりこれはこれで、命に関わる重要なクジ引きなのだ
「さき師匠、引いて下され。こちらが男子の箱でござる」
あ　風魔（ふうま）くねえか　箱持ってんの　いま気づいたけど

お前、人前で俺を師匠とか呼ぶなよ　スクラマ・サクスでボコるぞ
なお、引き直しは1度のみ認められているでござる　では、ご武運を」
なぜかニコニコ俺を見送ってくる風魔に対しては無言を通し、俺は箱に手を入れ、中にある無数の四つ折り紙をまさぐり始めた
――いいのが出てくれよ？
念じたところでいいのが出るわけじゃないんだがな。
うーん　箱の底にあるヤツか、狙いにかもしれないぞ
真にあるということは、初めのうちに書かれた衣装だろう
クンの製作係か誰かは知らんが、初めのうちはイロモノは書かないだろうからな
ちなみに大ハズレには『女装』というのもある。
それを引いたらこの場で拳銃自殺しよう
教員どものリンチで死ぬよりはマシだ
「どっこいしょっと」
と、引っ張り出した紙を恐る恐る開くと
『神』
ダメだダメだ　これは竹とんぼとか雑巾とかだからな
紙を盗み見るなりキンちゃんさま私達やっぱり結ばれる運命かとうのこうのとウトリ

チェンジすると1枚目は無効、2枚目の衣装が強制になるでござる
それは知っていたから決死の覚悟でひいた2枚目は　警官・警視庁・巡査
良かった　これならなんとかなりそうだ　そこら辺にいるし、観察も容易い
俺は女児の息をつき、その場に座り込む　これにて一件落着だ
見回せば、箱を持って歩く1年は何人もいて　体育館のあちこちから、クンを引いた男子や女子の歓声や嗚咽が聞こえてくるな
部屋、シャンス殿は本日欠席でござるが、前もってクン引き代理人に師匠を指名されていたでござるよ　ぜ
と風魔が女子用の箱を突き出してくるので、俺はシャンスの分もクンをひく
「ウェイトレス・アドトホーム・カフェテリア
店の名前は知らんが、まあいいだろう
というか何でもいいや。人のだし
「じゃあ次は理子、いっきまーす！」
ヒラヒラ制服の理子は拳銃の手つきで、女子用の箱から紙を取り出してる
いいなーお前は。変装、得意だから。
というかコイツは先月から宿戦会議の事を知ってるようだったが、叶のことは聞いて

いいのかな　卜蔵の指示が無いから分からないが
などと見ていると、理子の1枚目は「呪棒」漫画「キャプテン・アイー風」と出た
うわ　なんちゅうノモ力だよ理子　トロボって　まんましゃねーか
お前、雀士とかになったらどうだ。
と驚愕する俺の目の前で、
「えー……これじゃコスプレし甲斐がなーい！」
ぼーい
理子はその紙を、背後に捨ててしまった
お、おい、その牌を捨てるのか。
理子が引いた2枚目は、『ガンマン（西部開拓時代）』――
本人は　おー　やるやる、と楽しげだが、なんで女子の箱に　マン　で終わる役か
入ってんたよ。ほんと油断ならねえな。このクジ引き。
続いての目は、
1枚の一チャイナドレスを、体の線が出て恥ずかしいから　と、キャンセル
一応、想像してみるが……
そ　そうだな　やめてくれ　お前が着たらその大きな胸でファンかハノキリ吹き出て、
かもスリットのせいでむっちりした脚の太ももが腰まで見えてしまう
よかった、これなら
と　ってる自分の2枚目は、教諭「小学校　高校」何者ー　うん　それなら
無地で箱、手を突っ込んだレキの1枚目は、魔女使い
ハスカーヒレ　同か面白になる中、レキは　りこうで手伝いをしてる1年女子、陸奥
力を見てから、何もいわず2枚目を引いた
何かツッコんじゃいけない雰囲気がしたので、誰もそれにはツッコまない。
で、今度は『化学研究所職員』と出た。
まあ　いいんしゃないかな　それで　あまり喋らなくてよさそうだし
す　、はあー
深呼吸してるのは、変装が人のニガテなアーアで
すでに安全圏にいる自宅・理子かニヤニヤ見守る中、アーアは不発弾処理でもしている
ような顔つきで箱に手を入れ　信管を抜くように、ノート　と紙を抜き出した
アリア、クン引きに意気込みは関係ないぞ　まあ俺も人の事は言えないかな
ゴクリ　と、ノートを鳴らして開かれた紙には、
『アイドル』

と書いてある。

「あ、あ、アイドル……あ、あの、日本のテレビに出てる、プリッ子 …の事？」

震えながら紙を凝視するアーアは、早くも涙が

うん、うんうん、と背を少し屈めてうなずく自分のHPには、笑いをこらえている時が出るとくまか見える

即子はネコ…ぼくを飼めた！ これも笑いをこらえてる時のHPのきだ の端から、ふしゅ、とプチ笑いを漏らした あ、ちょ…とヨダレ出たぞ そんなにガマンしてんのかたとえば、て、俺もKBIにアリアを入れて想像してみるが

く くくく、 い、いかん 笑うな俺

また笑うな こらえるんだ 笑ったら射殺されるぞ

というか何をとり取り繕っても、1人だけノンアイドルだろ アーアがやったら本物のアイドルには程遠い

さらに俺の頭には、アリアちゃん 8さい とかタイトルを付けられた、残念なDVDパッケージが思い浮かび、

「くっ エンド！」

一瞬笑ってしまったが、咳き込むフリをして誤魔化した

バ……バレなかったか……？ と、恐る恐るアリアの顔色を窺うが……

像という余りにしんどいモノを想像する知恵熱に近熱器のように赤熱しており、俺の笑いには気づいていないようだった。よかった。死なないで済んだ。

ならり……だら、だららら……

マンガみたいに額から入量の汗を垂らした、アリアは——

女王の決断を強いられた軍人みたいな口調で、

「チェ、チェン、チェンジ、よ……ッ！」

と言い、バ！ と力を込めたみたいにした右手を構えた

か、神崎殿 それでは、次で確定でござる

小学くらいなら視線だけで殺せそうな目つきをするアリアから、風魔な微妙に後ずさるとかかん

風魔の腕輪を破壊しかねん勢いで箱にまを入れたアリアの2枚目は、果たして何かスローモ に開かれていく、アリアのちっこいますかつまむ紙には

紙、には……

小学生！

と、あった

しょ

八学生」

今度こそ本当に、『アリアちゃん　8さい』じゃねーか

ア、アリアよ。お前ってヤツは……！

なんて連れ去りなんだ　キャンプルレか、生贄やるんじゃねーそやった――――！　やったよアーア！　ある意味ハマり役だよ！　きゃはははは！

と絶叫した理子は、「八学生」の文字を見た瞬間、しばらく呆然としたかのように凍結していたアリアの足元を転げ回り、あひゃひゃひゃと腹を抱えて爆笑してる

一番もついに耐えきれなくなったのか、一目惚するみたいに伏せて声にならない笑い声を漏らしながら、ばし、ばし、と体をついてる

アアア連れ去りにも等しく、ここでいた俺も、赤ランドセルを背負ってペロキャンを咥えた銃口のきのこ学生を……いや、本当にいい、思い浮かべてしまい

ハッ――

と笑いかけた所で、竹装するようなアリアの殺気に気づいた

俺の脇をすり抜けるようにアリアの殺気に気づいた

ピアリアがスカートの側面に両手を突っ込み、拳銃を抜いたぞ

や　やばい　朝一発を満タンにしろとかいうんじゃなかったぜ！

！　撃ち、撃し撃し撃ぁ――――しっ！　まずアンタは死刑！」

風魔めがけて、今銃をぶっぱなしたアリアに、俺と理子がなだれかかる

「やめろアリア、撃つな　最初もいるんだぞ　俺らまとめて処分されるだろうが

あきらめようよアリアちゃん　理子が武装解除してあげる　きゃはは！

誰かアアアちゃんよ　風穴　風穴流平留一　風ハビ　グ　ハーン

今日は大体ンリーズか　色々あるな　風穴シーマ

なにレ思いつの俺は、もみながらマキビシを撒きつつ逃げていく風魔を、アアア銃から守ってやる　ああんなんでも俺の接華、彼女たからな

きゃすー　と当初のタケトに逃げられても諦め続けるアリーは　まさにダダ

状態だ　分でハズレ引いたんだから諦めろよ　大人げない事この上ない

理子がこう通り、ある意味ハマり役だな　八学生」

死ねー　死ね　死ね死ねね死ねみんな死ねー　見たヤツがみんなね　ゃ

ことになるんだわー　むぎぃーー」

なレと喚くアリアを口雪が目交い締めし、俺と理子がアリアの銃を必死に押さえ、レキはいつの間にか体育館の外に逃げており、消弾扉の陰から顔を半分だけ出してこっちをシーレと見てた　レキお前、この流れから分かってんならちゃんと事前に警告しろよ

それから武偵高はしばらく短縮授業となり、文化祭の準備が進められた
アリアは　あのあと体育館で、「24時間やります」と言うまでの30時間ほど連続で強襲
メヤーマン　スープレックスを喰らわせられ続けた。以外は誰に襲われる事もなく
敵　すなわち「奴隷」どころか、ジャンヌ・上澤・メーヤの　師団」も姿を現さない
でいる。
アリアのそばにいる「戦妹」の人使は、レキ、そして俺だけだ
あいつらが何をやっているのか分からないのは不気味だが　日々が安全である以上、俺
も　何もできないし、する事がない　安全な事自体は、良い事だからな
なお、俺の安全関連でもう一つ有難い事に……
なんとなくだが、アリアの機嫌がいい気がするのだ　最近
これはん月アイソ、指輪をやってから見られた傾向だが、例の貧血マーク事件から、
さらに俺に対する発砲回数が減っている
同時にアリアは、口先や理子に対してケンカをふっかける回数も減った気がする　これ
は　仲が良くなったというより、なにか余裕ができたようなムードだな　今までより上
から目線で話してるカンジもする
例の殺意減少が作用してホルモンバランスでも崩れたのかと思ったが、これらの傾向は
俺がアイソの誕生日に指輪をあげた直後から見られたものなので、無関係だろう

女子ってやつは、ホントに……よく分からんな

11月のクリーニングで決まった　変装食堂　用の衣装は、自由で個性的であるのがルール
その準備の〆切は、文化祭より大分前に設定されているのだが
〆切日に完成していないと強襲科・尋問科　殺人拷問　衛生科・我慢強の
人体実験という、武偵高名物　体罰フルコースを喰らうことになる
これは本気で命に関わるので、皆、〆切はなんとかして守る
そのためこの〆切前夜には皆で夜の教室に集まり、徹夜で仕上げをするのが伝統行事と
なっているのだ
その「仕上げ会」が行われる夜……9時過ぎ
俺が贈呈の衣装入りの紙袋を手に入った教室では、5、6チ　ムが集まってダベりつつ
衣装の仕上げを行っていた
机は教室の後ろに片付け、皆、チームごとにビニシ　トを敷いて座って作業して
いる。
ほぼ完成した衣装を既に着てるヤツもいるので、仮装パ　ティーみたいな雰囲気だぞ
小さなスピーカーを持ち込み、音楽を流してるのもいるな
見れば教室の　角に白雪とレキ、あと、ソフトバンクの白のお陰で人気上昇中のハイ

マキもお座りしていた

（……？）

ところでこの、壁際の　衝立で区切られたゾーンはなんだろう

と思って中を覗こうとした時、中からしゅるしゅるという衣擦れの音と、

ねね、早坂さんはどんな男子が好きなの？

アタシは、そだな、ちょっと陰のある男がいいかも」

うちのクラスたと誰？　いやいなよ」

なんていう声が聞こえたので、俺はヒステリアモード並の瞬発力でパーテーションをスライドした

これ　着替えゾーンかよ

衝立の足元にちょっと開いているスキマから、スカートが落ちてるのが見えてるし

この　着脱のカケラもない、武偵娘ども

制服から衣装に着替える空間が必要なのは分かるが、更衣室をこんな所に仮設すんじゃねーよ　血圧があがりやがって

高圧の騒がしさからも類推できるが、教室に集まってるせいか、けっこうみんなテンションが高めだ　こういう時のガールズトークは　男の警戒心を麻痺させるぞ

「キンジ、そっちはベストポジションじゃねえぜ」

俺が今やいを拭っていると、前列一姿の武偵が声を掛けてきた

「お、俺はそんなもの興味ない、ていうか作業させろッ」

と振り切り、俺はチームハウスカ　ビルの方へと避難する

ていうか何だ、シルエットショーって

もっと他のものに集中力を使えよ　勉強とか　お前こないだ現代文で赤点取ってたろ

「あっキンちゃん。衣装、どのくらい出来ましたか？」

女教員の姿　いブラウスに濃紺のタイトスカートを着たアリアが、いそいそと自分の隣を指し示す、俺が座るスペースを作ってくれた

「満も　気持ち、気持ち、ぱんぱんしてるな　役作りにも余念がない

教務科から、一教室、衣装貸出　用の衣装を着る時は、入れ後、最低一着着ること、仕上げ、撮る際、一練習する事　と通達があったのを守ってるんだな　さすが優等生だよ

ほぼ完成してる　後で連絡先を聞いて、かな？　くれ

「はい。ふふ……何だか楽しみ。キンちゃんのお巡りさん姿」

眼鏡メガネをかけてニコニコと俺を見ている理子は　働かってるなあ

九々人々っぽい体をしてるし　まるで本物の新米教師みたいだ

母性みたいなものも含まれてるから、小学校の先生ってカンジだけとな

「これ　アリアと理子が来たら、本当に小学校みたいになるなぁ」

と、俺は武藤たちの兵站系チーム「キャリアGS」のシートにちょこーんと正座してラメ入りの布をちくちく縫っている平賀さんの背もチラ見してから　シートについた

そして紙袋から取り出した警官の衣装は、実は、ほぼ出来合のものを買ったがけたちなみに衣装の購入は非推奨行為とされているが、ルール違反ではないため横行してる

みたいに生地から服を作れるヤツの方が少数派だからな

そしてその服の製造　販売は、特殊捜査研究科の女子達が請け負っている

いわゆる「色仕掛け」で犯罪組織に迫る彼女らは、被服で異性を幻惑する技術も学んでいる　男には大抵、無性に好きな女の服装が一つやつはあるものだからな

なので、あいつらはどんな服でも自由自在に作れる　男装する生徒もいるから、男子の服だって変装　してくれる

俺はあの美女軍団の所へ直接交渉しにいくのがイヤだったので、通販みたいにメールで発注したんだが　この時見た　CVRの悪女レもめ、足元を見てふっかけてきやがったとはいえ、高かったけあって服はリアルだ　原型はこれで問題ないだろう

「かしこの「変装食堂」、教務科からもらったプリントには「ただし・コレなどのリアリティが不　分なものは許可しない」と書いてあった

許可されなかったの体育返しなので、俺は親父の警官制服を揉んで使用感を出したり、ハンマーを下にぶら張ってビンのふを広げたり、細かい作業に勤しもキ、キンちゃん、私の先生姿　どこかなり　ヒーかおかしかったり、しないキ　黒潜の角をヤスリで削りしてたり等が、こっちに口出しして聞いてくるって俺はそのツンと突き出たでかい胸を見ないようにしつつ、

假今、こる　小学校の先生っぽいよ

「横　で適当に流しておく

すると　ーは、にへら、ーとニヤけた笑顔になって　それを隠そうとしたのか、いきなり土下座するように伏せた。

そして　遠くに、ためよ　私たち、先生と生徒なの、　こも、その垣根を越えてまえるなら　ナインョなら、いいよ　、なんと狡りしてるそ

何を一人で垣根越えしてるんだよ、雪価先生は　意味がわからん

ていうかおれ、先生の頭投してる時はちゃんと「遠山さん　一いんこるこれか始業式の朝から　ってるが、その調子でいかがん　キンさん　はやめてくれよ

（ていうか……）

俺、早くも作業に飽きてきたぞ。

ニガテなんだよな。こういう単純作業

少し気が散ってきた俺は……

そういえば、後の校舎なんて　レキに狙撃されたっ思い出したな

作業しながら前、レキの方を見る。

「……」

研究所職員　を演じる予定のレキはセーラー服の上に白衣を着、黒髪、色のアクセスをちくちく縫っている

俺が入ってきた時から、全　ほし姿勢た　1ミリも移動してない

レキってヤツは　単純作業に全然飽きないタイプなんだよな　やれと言われた事はきっと、延々こなす　その能力、少しだけで欲しいせ

――ちょっとアクセスの袖を取って、仕　かりを見てやると　うぇ

その縫い跡は、まるで工業用の　ンで縫　たみたいな精密た

性格が出るなぁ　こういう作業をさせるレ

レキは、狙撃手としては細かいからな　不発動作策もねちっこいし、暴発を嫌うて、トラブルには使えない弾を実弾から弾倉に詰し直す機構まで改造で付けてるし

そんな完璧主義者・レキの脳の前には　レキなり　アリティーを出そうと　たのか、フチ無しのダテ眼鏡が用意してある。

それを手に取り、そーっとレキの顔にかけると　・それでも微動だにしない
お前、ちょっとは反応しろよ。
と思ったら、チラ、とメガネのレンズに開いた空間から俺を一瞥するに見てきた
う。
これは　・メガネ好きでもある武藤が昔言ってた「メガネをかけすらして　日遣い一の
体現だ　あいつは　あの破壊力はマジハネェ　とかいってたか、その意味が少し分かった
何だろうこれは　微妙に、ヒステァ・ア性の血流を感じるぞ
レキに組み合わせると危険なアイテムだ　外しておこ
写伽先生のメガネ、それとシャツヌかたまにかけるメガネ　も今後は警戒だな
ふー　メガネレには意外たったな　けの中は危険物で　杯だ　俺にとっての危険物で

そうこうしている内に、「みんな、おっはよー！」とガンマン姿の理子がやってきた
なんでおはようなんたよ　今、夜の10時たぞ
とも思ったが、理子に発言の意味を問う事はチンパンに何で鳴くのか聞く事くらい
不毛なことなので聞かない事にする　とうせそれもネト用語か何かたろ
すでに理子は衣装が完成しているらしく――
テンガロンハットをかぶり、厚手の上着ファウスを胸の前で結び、おへソは丸出し

単のチョ、キレブ　ノなちゃんと着て、テームのこースカートの裾には細い編みたいな
単純かこ　ノ亜んでヒラヒラしてる　ふか細かいな
でいうか拳銃まで背重ねみたいなナレハ、に変えてるか、そんな装備で真夫人か？
という俺の不安はさておき、ノノコ二の理子は教室のドア前で、
「ぼら早く！　絶対ウケるって！　可愛いは正義だよ！」
ドアの裏側にいて見えない誰かの腕を引っ張ってる
くく！」
人の丁聴域を超えた高さで叫んでいるらしいその人物の、ズリズリ引きずられつつの必
が：　見えてきた
真、赤なストラップフェース、　こンクこ口のしましノ　クス　ノ　クスの　縁に
は、ヒラヒラした白いフリルがついてるな。
こういう風に人の服装を分析して見える　服装分析　は、探偵科で習慣付けられてる
決して他意は無いか、観察させてもらおう　小学生さんよ
「や、や、やっぱり！　いくくくくや　くよくくくっ！」
右の胸の一部にでかいボタンをあしらったキ、スサイズのブラウス、これの下裾にも
入きめのフレかある。を着て、アホほどミニなピンクのスカートをはかされているアー
アは、腕関節が外れそうな勢いで理子に抗ってる。

ある。そこは小学生としてのリアリティーが極めて高いな。
とうという分身図か明らかになったアリアちゃん8歳は、ちゃんとランクかかったホラ
トセルも装備し　その上側回はノブラノ　コーダーのホルダーがぱかぱか　いる
この芸の細かさ。衣装、理子が作ったな。多分
風穴対策としてアリアのお学ノ姿を1週間イメトレし、笑いを堪えられるよう訓練こ
いた俺たか、それでもこれは、予想ノア　アを見ていたら爆笑しかねんので
「アーア、あきらめろ　それより衣装の細部を作り込んでおかないと、後に関係にハイク
で市中引き回しの刑をやられるぞ　主に我で　オフ
最後に自嘲気味に笑いか漏れてしまったか、練習各み方　後込む手つき　ここまで
俺か真顔で言い放つと、アーアは、ぶしゅうう　と頭のてから白線のノ　ト
みたいな湯気を上げつつ、真下を向いたまま……
酔拳を見ゴコ・猛妹みたいにフラフラやってきて、俺の隣にあぐらをかいた
俺の真隣に座ったアーアに対して、ギロ
と理子が　瞬刃物のような目つきをしたような感覚かしたので、そっちをチラ見すると
ここここ、と、いつもの穏やかな理子
ど、どうやら俺の服れ目による錯覚だ　らしい　細かい作業やし過ぎたせいだな

目を擦りつつアリアを見れば　ランドセルの右側に「1年2組　かんざきアリア」と書かれた名札を付けている　小1設定かまたノホ・・てしまった俺は再びダミーの咳をし、ン・　秋は、空気が乾燥し始めるシ　ズンだな　風邪気味らしい

こみ上げる笑いに震える声で、風邪気味宣言をしておいた

すでに赤田香みのアリアは、笑ったら風穴ー　の顔で俺を睨みつけてくる

ふぅうぅっとほっぺたまで膨らましてて、これしゃ本物のなアリだ

ヘイー　アリアちゃんー　お裁縫箱はこっちでちゅよ　アリアちゃんー」

ぽーん

シャンプして萌れた毛先をした理子が、日ごの裁縫箱を勝手にアリアの足の上に乗せる

アリアは、くぬぬぬ　という顔をして、自分のスカートを、ぎゅううう

両手で思いっ切り握　て、悔しさをガマンしてるな

あんたね…　それ絶対、　アリアちゃん、言いたいだけでしょうか、　ノ」

マスの利いた声で言ったアリアの額を、人差し指で、つん

思いっきり温かな笑顔で、仁雪先生がつついた

「ダメでしょアリアちゃん　小学生かそんな1調で喋っちゃ」

教務科の命令、入室後1時間の一服を着ての役作りの事を言ってるな　これ

「…　うく

はい、それしゃあ、道具を貸してもらったら御礼をいいましょうね？
よく見るとヨー先生、そのアリアの肩越しに立てた人差し指、私立てませんか
アリアから俺から遠ざけられるようにソリッドスライドしていくので気づいたが、自毒、
ものすごく指に力を入れてるぞ
ルールル、ルールル、主服を着ているからには小学生として振る舞わなければならないアリアは、
「……あ、あ、後で覚えてなさいよ」
とノートの奥から見るような表情で言ったかと思うと、に、にいい
顔の筋肉を痙攣させながら、サ、ヘッタイカーかムリヤリ笑うような表情を形作った
そこで体内で渦巻く羞恥心と怒りのマグマから立ち上る煙を口から漏らしつつ、
が、く、は、はい　あいかとうございます、　せん　、せ
赤紫色の目をカ　ッと見開いて一言に叫ぶ
ピキイッ！
と、アリアのこめかみに血管が　体内でこういう形になってるんだろう　「D」の
形に浮き出る
、　、
それから俺の眼には、死ね、のひに見えた
ひょっとするとアリアには身体のどこかに「I」と「L」の形に血管が浮き出る部位か

こ　こ　　怖ェ！　なんだこの新システム！
あまりの殺気に、アリアをインる怖い物知らずの武装な女さんでさえ引いてるぞ
ガンマン理子も上半身を後ろに倒してズリズリ後ずさってる。
俺はD白髪モ　ト・アリアのヒンクいスカ　トをコ、ソ少し持ち上げ、太ももに常銃
してない事をさりげなく確認しつつ、
あ、アリア、演技はしなくていい、普通に、作業やしよう　な？
アリアが素手でグーズリーを倒した事かり日慢したことを思い出しつつ、決死の思い
でメルトダウン1前の原子炉を冷めた
チクショウ　武偵高は地獄だぜ　衣装を作る平和的なイベントなのに、なんでこんなに
寿命を縮めさせられなきゃならんのだ
あとレキ　お前は何で　いつの間にかハイマキことケムリのように消えてんだ　また、
髪頭のいいヤツめ　あとで魂　逮者かイチャモンつけて逮捕してやるからな
夜日時を回る頃には、それぞれの衣装も完成　できて
婦る人は後ろに寄せていた机を1人3つずつ元に戻す決まりにしていたので、たんたん
教室の光景は元に戻ってきている。

ハスカービレからも人間時計のレキ博士か「就寝時刻です」と帰り、白雪先生が生徒会の仕事で帰り、アリアちゃんもトナトナが聞こえてきそうな足つきでトボトボ帰っていく

（よし……俺もまあ、これでいいだろう）

制服・制帽を身につけて全身鏡を見れば、俺は　心、ちゃんと警官っぽく見えるそなんか　若干なのに超やる気のないお巡りさん、ってカンジだけどな

最近の警察官に配備されているS&W　M360Jも装備科からレンタルしてきたが、掛ってみると――軽量で、堅実な造りで、いい銃だな　これはこれで気に入った

そのままの姿で見せれば、残っているのは数人になっている

それも偶然、女子だけだ　イヤだな　俺もそろそろ退散しよう

……しかし

文化祭の出し物　「変装食堂」の準備も、そろそろ終わりか

物騒かつ面倒ではあったが　皆で集まってこういう準備をするのは　つまらなくは、なかったな。

いま高2だから、高校での文化祭の準備は、あと1回しか経験できない

そう思うと、少し感傷的な気分になるな　柄にもなく

バスカービルの居残りは、手際が悪くて遅くなってしまった俺と――この場の雰囲気が好きなのかゴロゴロしてヤングカンガンを読んでるガンマン理子だけだ

……Lも、ラスト1人。キラキラした細いドレスを着て、ケータイにラインストーンを貼ってる子　あ　あれ、平賀さんか　制服じゃないし、いつも結んでる髪も解いて、へ盛ってるから　瞬時に分からなかったよ

物のついてた　この あ、かし平賀さんには細事を頼んじゃったし、ほぇしてる品もあるし、ちょっと話しておくか。

「平賀さん」

と、警官姿のまま彼女のそばで屈むと――

「あっ、遠山巡査」

くるり。

振り返った平賀さんは――

「――!?」

腰を抜かしそうになるぐらい　超ケバケバの厚化粧になっていた

「あやや～すー　ご指名、ありがとうございますですのだー!!」

目盛りファンデ、パンダみたいなアイシャドー、つけまつげもデ　テリ乗せて、キーンみたいな口紅になっちゃって　なんだよ、それっ

「オバケ……の役か？」

またまた過食ったらー　これは、キャバ嬢ですわた　お九さんカノコいいからお安く

しておきますのだー。やっふー！」

平賀さんは「カリスマキャバクラ嬢」と書かれたクシ引きの紙を両手で開き、ばちこんと重そうなまつげの両目を瞬かせた　それ、ウィンクのつもりか　また失敗したな

（ていうか、この子がホステスって……犯罪だろ、そんな店……）

平賀さんもリキが悪いな　アリアとは逆の意味で　本人の適性に最も合ってない役を、見事に引き当てる。本人はえらく気に入ってるみたいだが

「ねー　あやや、かわいいー」

なぜかスライディングで飛び入りしてきた理子には、キャバ嬢あやや　ウケてるなえへへー　いらっしゃいませなのだ　シャンパン・オーダン

トン・トン・トン・トン・ドンペリー♪

などと「せっせっせ」みたいに手をパチパチやりながら歌い始めた平賀さんと理子に、俺は、もういいや　という気分になる　平賀さん、体調戻り過ぎたな　南無阿弥陀仏

あ　それはそうと平賀さん、この間はありがとうな　北き地島の　戦車みたいなやつの残骸、跡形も無く片付けてもらって

横からヒソヒソ話しかけると、平賀さんは

「感謝！　お礼をいうのはこっちの方なのだ　あの凶獣物、超いい資材になりますのだホントに丸々もらっちゃってよかったですのだ？」

あ　えっと、こちらこそ、その節はお世話になりました　ご丁寧に　ご挨拶いただいて

アレは　」

と水を向けると、平賀さんは　あはっ　平分できてるのだ　と、シャネルの派手なハンドバッグから――

今夜は、これのエンブレムもついに縫いつけたから居残りになったのだ」

――黒い手袋を、一方だけ出した

おお　こんな感じになるのか

それを俺が仁子に付けるレ　サイズもタリた

さすが平賀さんだな

本部分はTNKワイヤー繊維で、万一衝撃があっても分散させる構造になっている人差し指と中指の第一関節、内側には――炭化タングステン「ハルト」超硬合金製チタンでコーティングしたものを着装してあるのだ　命名・「オロチ」

手袋とはいえ、これは（）F（）

指先は露出するようになっており、親指・小指は根本の方――第一関節まで、人差し指・中指はもう少し長く――第二関節までを両面から覆っている　親指は、付け根まで

ちょっとアンバランスだが、これでいい。注文通りだ

ただ、デザインは任せたが　ちょっとカ　「良すぎるなあ　SF映画に出てきそうな、

近未来的な感じた　　の中に武偵高の校章も入ってて、そこはアニメっぽいし。

（でも、まあ……いいか）

直せって言ったら、追加料金を取られるし。

人前で見せるモンでもないし、な

これは――ココ姉妹との戦闘後、俺が発注した指甲（Finger Guard）

通常こういう金属を仕込んだ手袋――ノックル（knuckle）は徒手格闘戦士に作られるが、

俺の場合は二銃撃逸らし（二丁拳銃を使うために作ってもらってる

あれは飛来する銃弾を両手の人差し指・中指で2回挟んで僅かずつ軌道を変え、自分に

当たらないようにする荒技で――

前に素手でやって激しく突き指した教訓から、作成を依頼したのだ

まあ　『銃弾逸らし』をやらされるような状況に追い込まれるほどの敵戦は御免被りたいけどな　例の『各属』や『師団』並に動きは全く無いが、修束戦役　だったかあれに巻き込まれてるらしいからには、いつ何時、誰か襲ってくるかわからないし

こんな物であのバケモノたちと互角に渡り合えるとは考えずらいが、俺は俺なりに備えておくしかないからな　平凡な高校生にも出来る範囲内で、な

「ああ、これなら　大丈夫だ　問題ない　ただこれは両手分揃わないと意味がないんだ左手用もよろしく頼む」

まさか、ここまで　ノリノリで作ってくるとは　両手揃えて、何に使うのだ

「企業秘密だ」

キョトンと聞いてくるカツスマホステスさんに、俺は答えをはぐらかしておく

どうせ、話しても信じてもらえないだろうしな。

「ところで　このグローブの名前、なんて『オロチ』なんだっ」

「と、やま巡査　手をチョキにして、開け閉めしてみるのだ」

平賀さんが言うので、言われるままやってみると

二指の内側に付けられた金属甲がカチ合って、キン、キン、と気持ちいい音が鳴った

ほら、指が口を開け閉めしてるヘビっぽいのだ

アホな事をやらされた俺が脱力していると、キラキラ

横では理子が俺の『オロチ』を見て、目を輝かせてる

かっ――こいい　超カ　コイイ！　理子にちょうだい　それちょうたいよ

だあ――――いっ！」

「こ、こら　腕を放せ　お前の手には合わんだろ！」

ねえ、と一やま巡査あ　それが両手揃ったら、一体何に使えるのだー？　教えて教えて

教えてなーのーだー！」

どうやらこの丁袋のアニメ的デザインが気に入ったらしい理子と、しつこく聞いてくる

P賀さんが、ゲイゲイと後方から袖を掴んでくる
あ、ありえん絵だなぁ。これ
制服姿の警官が、ホスアスとガンマンに絡まれてるなんて 芸術的なまでにトンチキな
絵面の多いタランティーノの映画にも無いぞ、こんなの というかもうコントの絵だよ

例の着替えコーナーで、警官の衣装から制服に着替えていると
「キンジ」
先に着替えていた理子が、働き越しに声をかけてきた
俺を「キーくん」ではなく「キンジ」と呼んできた所を見るに 「裏理子」のほうだな
何だよ」
あれを通常扱いするのか お前、どんどん人間離れしていくな
さすが、理子だな
さっきこのオロチを見ただけで、用途を見抜きやがった
――東京駅で 度見たきりの「銃弾逸らし」の事をほんやかるよ
人間離れ お前に言われちゃおしまいだ」
俺も衝き越しに返すと、理子はクス、と笑い
「理子ちゃーん、お友達が呼んでるよー なんか似たカンコの、アニメ洋服の人お

校外の人々
「はぁい 校外の人 」
教室の外から、クラスメートが呼ぶ声に「表理子」に戻って応える
理子はそのまま出ていってしまい……

ん ……?
なんか、教室から、コソコソと女子たちが移動してるような音がするぞ?
着替え終わった俺が、衝立ゾーンから出ると――
あ チクショウ やられた
教室はもう無人で、机はまだ後ろに寄せられたまま幾つも残ってる
あいつら、片付けを放棄して帰りやがった 俺にやれって事かよ
誰かが知らんか、持ち込んだアンプも忘れていってる MP3プレーヤーも置き放し
静かなピアノの曲だからいいけど、音楽もかけっ放しだ 今、
目撃証人もいないから俺もフケちまおうかと思ったが
片付けておかないと、明日、犯人捜しされちゃうかもんね 女子とも仲良くやりたいし
そうなったらまた内申が下がり、一般校への転校計画にも響く

というわけで俺は、深夜の教室で1人　ピアノ曲をBGMに机を運ぶ
（あと……少しだな）
と、教室の机を持って顔を上げると――
「？」
さっ。
と、トアの縁にピンク色のひも・というか、アリアのソインテールが見えた
頭隠してツインテ隠さず。
着替えたらしいセーラー服のスカート、その裾も見えてるぞ
あいつ、いつもあれで隠れたつもりなんだからな　よくSランク武偵やってられるよな
「アリア。何やってんだ？」
声をかけると、アリアは一瞬ビク　としてから・・教室に入ってきた
とっくに帰って寝てると思ったのに、戻ってきたのか　忘れ物でもしたのか
「何って、あたしにも、よく分かんないけど　キンジ、帰ってこないから」
アリアはちょっと俯せ、レキは寝て白雪は仕事してたけど　理子に携帯繋がんないし」とゴニョゴニョ言ってから　俺を盗み見るように見上げてくる
それで、キンジまた教室に　いるかな、って思ったら、いたから
「……？　よく分からんが、ちょうどいい。手伝えよ」

あんたこそ　何で1人、こそこそなにしてたのよ
何でって、俺にも分からん　手伝え」
2度ほど、アリアは、コトコやってきて　んしょ、と、机を1個運んでくれた
そういえば夏休みにもこんな事があった　アリアは、俺が戸付けをしてると現れるなしょうがないわね　心配させといて、これなんだから
運んだ机に腰掛けたアリアは、残りの机を運ぶ俺を安心したような　で見てる
なんか機嫌がよさそうだが：お前、1個しか運んでくれないのかよ
まあ、やってくれないよりはいいけどさ

教室が元通り、いつもの風景に戻った。
時計を見れば、もう1日が変わりそうな
最後に俺が放置されていたアンプの所へ行き、音量を1めようとすると、
それは　そのままでも、いいんしゃないっ
アリアが窓　と、2年B組の教卓にはあるヘランダの方を見ながらそう
何でだよ　朝までかけてたら、電気がもったいないだろ
「そうしゃなくて、ちょっと　その　休憩しよ、って言ってんのよ　鈍いわね
休憩って。お前1個しか机運んでないだろ。

それ、全部とはいえ、もう遅い　俺は帰って寝ちまいたいんだが
貴最様のご意向に抗うような事を言うと、死亡だしな

そんならそうと言えよ

俺はアクビを噛み殺し、誰かのイスを引っ張ってこようとしたが――
アリアは何かを思い出したようなそぶりで、ヘランダへ通じるスライド扉に手をかけた
ヘランダ　いつも男子が占領してて出たことないから　いこわよ」
からりら　俺に背を向けたまま、アリアはカギを開けてヘランダに出てしまう
ご主人様は今　いくわよ」と仰ったので、トレイも来い、という意味だろう
グダグダしてると拳銃が出るので、俺もヘランダに出る
東京湾のむこうに　また煌々と明かりの灯っている台場が見える
ハレットタウンの観覧車もライトアップされて、ここからだと細い輪切の光に見えるな
「……キレイね」
「そうだな」
いつもの台場か、教室のヘランダから夜中に見るのは初めてかもしれない
こういうか
来てから気づいたか、やたら雰囲気のいい場所じゃねえか　このヘランダ
1人ならいいか、女子と2人で　こんなロマンチックな所で、ご休憩かよ　困るよ

室内のアンプからはピアノの曲が細く聞こえてきて――それが東京湾の波音と混ざり、
逆に静けさを強調してくる　映画のワンシーンみたいだ
暗闇の中に、アリアと俺だけが浮かび上がってるような錯覚さえする
今さらだが、2人っきり感が増したカンジだ
き　気まずい、な。
手すりに肘をついて、同じく手すりに手「肘は届かなかったらしい」をのせアリアみり
をチラッと見たら
ちょうどアリアもこっちをチラ　と見たところで、目が合ったまま
2人して視線を逸らすタイミングも、全く同じ。
あー　何だよ
息が今ごのも、考え物だな
気が合ってるみたいで、ますます気まずくなったぞ。

あ、あれ

おかしいぞ。
いつもなら、おしゃべりアリアとこんなに会話が途切れることは無いのに。ヘンだな
チラ♪
とアリアの方を見たら、またこっちを見てやがった
また目が合ってしまった俺たちは、また、同時に視線を逸らす
あー　なんだこれ
困ったことになったぞ。
いわゆる、その、おれい・・『意識してる』状態みたいしゃねーか
」
風向きが変わり、クチナシみたいなアリアの甘酸っぱい香りが仄かに香る
チクショウ。話題。話題。何かないか。
女の子っぽい香りのせいでテンパっちまって、何も思いつかん
唐突にしょぼとか飛んでくれねーかな
あーーあ、あれ。あれ何かしら？」
ぴし
アリアが腕を伸ばし、いきなり地平線の方を指さした

かなぐりすてるように、指先を見ろ、とそっぽを向いて、話題を探してたらしい。
「んん？　どれだ？
俺も……少々わざとらしく言いつつ、アリアの指す方を見る
「あの、すごく高いタワーみたいなの　暗いけど」
「ああ　あれは、スカイツリーだな
天空樹（スカイツリー）……？」
きょと？
と赤紫色の瞳でこっちを見てきたアリアは、スカイツリーを知らないらしい
「知らないのかよ。スカイツリー」
「なにそれ　ヘンな英語　知らないわ」
ふるふる　アリアがツインテールを揺らして、首を横に振る
「お前なー　BBCばっか見てないで、日本のニュースもたまには見ろよ　とっても、
俺も詳しくはないが　電波塔だよ　作りかけで、また第一展望台までしか出来てない」
へー：
そういえば、スカイノリ　だいぶ、出来たなあ
ニュースによれば、今、450m　70%ほど完成したらしいけどな
あれが完成する頃　俺は　また武偵高にいるんだろうか

「そっ、そうね。だから、ああいう時間　　ういう時間を、大切にしたいの」
なるほどな。
アリアはアリアで、学園生活の思い出が欲しいんだな　こんな学校にいても
かさい頃から大人に交じって、ロントン武偵局で働いてたらしいから　こういう学生
らしいイベントが新鮮で、嬉しかったのかもしれない
：　ずっと、今日が続けばいいのに　明日起きたら、また今日の朝になってて　授業
受けて、ゴハン食べて、文化祭の準備して　…それが続くの」
SF的な事を完璧めかして言うアリアに、俺は小さく笑う
それで夜中、あたしは教室に戻って　あんたを見つけて、机を1個運ぶ　そのあと
2人でベランダに出て――こうやって……」
そう言って、こっちを見上げてきたアリアに――
俺もつい振り向いて、その顔を至近距離から見てしまった時
微笑んでいた、アリアの目が――ああ
――なんて言えばいいんだろう
とにかく、キレイで
一口出しではとてもじゃないが　美しくて
俺はつい、その視線に吸い込まれるように見とれてしまっていた

あれが完成する頃　アリアは
またしばらく、2人で沈黙して遠いスカイツリーを眺めた後　アリアがロ　ズピンクの
唇を開いた。
今日、ね。　まあ、あの小学生の衣装はどうかと思うけど　…楽しかったんだ　あたし
ああやってお祭りの準備とかするの、楽しかった」
――そうだな　俺も何か、楽しかったよ　まあ、もう終わっちまったけどな
ああいう夜って、人生に何回あるのかな」
人生に、って　何度でもあるだろ　今までだって、何度もあった
ううん　きっと、そんなにないよ　あたしは初めてだった
「初めて……？」
「ロントン武偵高とかローマ武偵高では、あたし狙われ回ったから　こういう作業は大体
キャンセルしてたし、あっても1人でこそこそやってたの　今日も本当は行かないで、1人で作業を
しちゃおうかともちょっと思ったんだけど　キンジが　いたから
「俺が？」
あ、あ、あれっ　ちがう　ウソ　あの、理子　理子に引っ張られたから」
「あ、ああ　そういえばそうだったな　まあ何にせよ　：ああいう場所に出て、みんなと
緒に仕事するようになったのは、いい事なんじゃないか？

ここまでくると、自力――とか、俗な言いかは似合わないな
誰か神様みたいに人才的な技術を持った工芸家が、理想の世界の美少女を造り出したそしてそれが命を得て、歩き出した。
そんな……感じさえする。アリアって子は。
（……？）
というか：
普段でも1分カワイイのに、今夜はそれ以上にキレイに見えるぞ
あっ、こいつ、薄くだが――メークしてるぞ　本取られたな　何が神様か
お前、化粧してきたのか。さっき衣装作りしてる時はスッピンだったのに
と言うと、アリアは――
「！」
ばわぁー
と、例の超特急赤面術を見せ、わた、わたわた。
わたた、わたたたたたー
見えないキャンディーの流星雨を掴みまくるような大慌てのすっきをした
「だ、だって――だって、だって、今夜は、デートだからっ」

「――えっ？
アリアは赤紫色の目をまんまるにして、俺の言葉に飛び上がる
いやいや、えっ？」ってやねーだろ　お前が言ったんだよ　俺の方が「えっ？」だぞ
ていうかこれ、教室からベランダに出ただけだろ
距離1mのデートなんて、聞いたこともねーよ
「も、もちろん、デ、デートっていうのは――も、ものの喩えー　」
俺に大口を開けて、アニメ声で叫ぶので
わ、分かった　分かってるよ　そんなに口を開けるな　奥歯まで丸見えだそ
というより、と、落ち着かせにかかると、ばっ
今度は何だ　きなり自分の口を両手で隠して、目だけでこっちを見てきたぞ
「……どうしたアリア」
「にゃんでもない」
なんで急にネコ喋りか
……あんまり、見ないで　前歯の　：その、横の　一
ああ。犬歯のことか
犬歯がどうした　伸びたりしたのか」

吸血鬼にアリアが噛まれた夜の事を思い出して、俺は少しシリアスになって聞く
「は？　伸びるわけないでしょ　ハカなの？　その　コンプレ　クスなのよ　この歯
「何でだよ　ネコみたいで　その、まあ　一般論で言えばだが、カワイイだろ」
「かっ　か、か、かわいい？　あんたそう思うの？　ハカじゃない？」
バカとか言いつつ、アリアは急にハッスルしたムードになる。
「その、たから　一般論ってことだろ　ごく平均的な日本人の男子として、そう思うのが普通ってことだ」
クドめに言うと、アリアは少し考えるような顔をしてから、
「キリスト教圏では、そうもいかないのよ　宗教画の悪魔が、こういう犬歯をしてるから　悪魔の歯」って、ハカにされるの　ロ　マ武偵高でも、そう陰口されてたわ」
まそうに言うので、気休めに——
「しゃあ日本にずっと住めよ」
と、言うと……
ぱあっ　ぴきー　十八番の赤血球に連携させて、石化光を見せた
日本にずっと住め、って俺にほれたんだって　なんで石化までするっ
ぎ、ぎぎぎ、と、油の切れたロボットみたいに下を向いたアリアは「Why do you say so（なんで平気と、
Because I don't want to live（ry ——と何やら分からん英語で呟いて、

[illegible]
人間丸出し生徒解禁で、かえるる、とっても脱みげできた
もう……さっきから……何なんですか、アリアさん……
これでお前の喜怒哀楽、通、見た気がするそ　もの3分で
「——あのね、ホントはね、今日はあんたに、言いたいことがあったのよ」
「何だよ」
あんたはあれこれ、ステップがおかしい男たわ」
スナップ？
俺　頭った事あったから　アリアの前で
「順序を飛ばす男には気をつけろ　って、お父様から　言ってたから　最初に体育が重
ヘンな事されてから、警戒はしてたけど　貴族はね、そういうのはスマ　通いーとな
いとダメなの　動物じゃあるまいし、こ、こ、こないだの　胃の　かいて
胃　の
ああ　あの首の、鬱血マークの事か
そういえばアリアはあの傷を、俺のせいだと思い込んでるんだよな
よく分からないか、どうやらその点について怒っているらし
……傷つけた事は、謝る」

ここでヒルダの話をするのもおかしいし、こう言っておくか。
俺が『悪かった、もうしないよ』という反省の表情を作ってみせると、
アリアは、あわ、とちょっと慌てたような顔になった。
「あ、ううん　そこまで凹まなくてもいいわよ　あたしも何か、酔っぱらってたみたいで記憶が無いから……あんまり、腹も立たないし」
立てないでくれ　本当は俺のせいじゃねぇんだから
それに、あんたにもあれだけの事をする覚悟があったって事だし　あの件は、許してあげる　もう許しちゃった事だし　ただし！　今後は、きちんとステップを踏むこと！」
また出たか　ステップ
この「ステップ」について俺は　体何を許され、何を求められているのか分からないが、アリアが自発的な表現を伏せる喋りをしている所から見て　どうも、「男女関係」に関する単語らしいな　そこまでは分かる
多分　普通の男になら、言葉の裏も察する事のできる内容なんだろう　アリアの話はそういう話がニカテなアリアにさえ、理解できて、喋れてる事なんだからな
――だが、俺は……
俺はヒステリアモードを嗅うあまり、女というものを避けて生きてきた
それも頑なに、意図的に避けた　ず　と

[illegible]　よ、理解できないのだ
実際いま言われても分からなかったし、恋愛モノのトラウマも山ほどかよく分からないだから俺は
「　　」
少し悲しい気分で、目を逸らす。
ごめんなアリア　お前は何かマシメに話してるみたいだが
意味が、分からないんだ　俺には
でも、その「ステップ」について聞き返して、詳細に解説させるのは失礼な気がするこれはそもそも話が分からない俺の幼稚さが悪いんだし、今のアリアには必死感があるし　だから　ここは、話を合わせておこう　分からないなりに
「ああ、分かった。気をつけるよ。ちゃんとステップを踏む。それでいいんだろ」
あ　う、うん　たから、これ　あんたの気持ちは、その、う、嬉しかったけど
ぱっ。と、アリアは左手を突き出して見せてくる。
「？」
「指輪。まだ、しないから」
ああ。
誕生日に俺があげた指輪か

別に、付ける付けないはお前の勝手だよ。

「気に入らなかったのか？　だったら悪かったな。俺、センスなくて」

「ちっ、ちがう！　ちがうちがう！」

ぶんぶんぶんー

アリアは阿修羅像みたいに顔が幾つも見えるようなスピードで、首を横に振った

そして改めて俺の方に向き直り、

「そうじゃなくて　ま、まだ、まだしないってだけよっ　かっ、勘違いしないでねっ　もうスイス銀行の貸金庫に送って、しまっちゃったから　厳重にっ」

「返さなくていいよ」

苦笑した俺の言葉に、かあああああ、と赤くなったアリアは

「で　でも、あの指輪はステップ飛ばし　100段飛ばしだわ　あれから　日夜ないこと考えたけど、やっぱりあたしたちにはまだ早すぎる　かから　また、しない　でもその、それにしても、あんた、あたしの誕生日、よく覚えてたわね」

「それは　一応、俺はハスカーヒルのリーダーだ　な　メンバーの事を知っておくのは任務の一つだ」

「任務、かぁ　じゃあ他のメンバーのは知ってるの？　ヨシヒロとか、理子とか、レキの」

「あー……正確には知らん」

直に言うと、アリアは「勝った」という感じの顔になる。何にだ？

それからしばらく、何かを聞こうか聞くまいか迷うように目を泳がせてから

「ねえ、ねえあ　もう一つ　あんたのこと聞いてもいい？」

「いいよ。別に隠すような事はない」

ヒステリアモード以外はな

「その、えっと：キンジってさ。い、今まで何人……カノジョがいたの？」

はっ

な、なんだよコイツ　イヤな話を続けやがるな

「いたことねよ」

「ウソだわ。だってあんたモテるでしょ」

「んなわけねだろ　俺のアダ名、昼行灯ってネクラだぞ。0か　0人　聞くまでもない事を聞くな」

俺がレをスタ　ウォーズのクローン・トルーパーみたいなへの字形にして答えると——

アリアはデレデレした、だらしない笑顔になる。

なんだよ　バカにしやがって

「そういうお前はどうなんだよ」

「え」

一発、同じ質問で逆襲してやると――

アリアはアリアで、ダースベイダーみたいなへの字口になった

「最初から言ってるでしょ　あたしは恋愛なんかしたこと無い　無かった　いつも、ママの事で頭かいっぱいだったし。」

そうか……何か、悪いこと聞いちゃったみたいだな。

「悪い。つい、売り言葉に買い言葉で――」

「い、いいのよ　もうママの高裁は来週だし、無罪なのは間違いないし　無罪になったら一告はしないって検事も言ってた　日本も民日判決を言い渡すようには改正してるから、ママは来週――自由の身になれるのよ」

「そうだな　まあ無罪は分かりきってた事だが、頑張った甲斐があったな　アリア

「うん　だからこれで、これからは、その……少し、そういう事　そ、それ的な事、考える余裕が　て、てきたかな、なんて、ちょっと思ってて、そしたらそこでちょうど、キンジが、あんなゆびゅ　ゆび・ゆびゆび・ゆびわ……」

母親の無罪の話から、またボソボソと恋愛ト　クッまい話に戻ろうとするので……俺はさっきから様子のヘンなアリアに、

「なんか……お前、いつもと違うな　落ちてるものまんでも拾い食いしたのか。」

体調でも悪いのかと思って、右を覗こうとしたそう聞いた

「武偵はそんな事しない！　あんたじゃあるまいし！」

ぷいっ、とアリアは台場の方を向き――

「そうじゃなくて、あたしはこれからキンジと……って　あ、あれ　っていうか何であたし、こんな話ばっかりしてるの　さっきから……」

「俺に聞くなよ」

アリア　やっぱり、おかしいな　今夜は

さっき小学一をやられたショックで、ちょっと神経を衰弱させたのかもだ

「……もう帰るか。寒くなってきたし」

「そ、そうね

教室に戻ると、アリアは俺の制服の背を、きゅっ　ちっこい両手で、掴んできた。

そして俺が振り返る前に、こつん、と、おでこを背につける

「じゃあ……これで少し、ステップをリードしたことにするわ」

「ステップ……」

「うん　たった1枚の扉こう、たった3分だけだったけど、今夜のこれは――あたしの人生初めてのデート　そのスタートを上がった　そういうことにしたから」

まあ、何と思おうとアリアの勝手だけとな

ほら、帰るぞ」

俺は、「そうだな」とは――

言わないでおこう　お前は今夜、何か少し、おかしいからな

おかしい、というか

俺は「感は優れないタイプだが、ヘランダでのアリ、は　何か、心の深い所から出てきた言葉を喋っていたような気がする

それが、うまくできていなかったとも思う

これは俺の理解力が足りないせいだけじゃなさそうだった

想いをうまく言葉にできない　それはよくある事だが　普通そういう時、人間は多くを語らない。言いたいけど、言えない。そういう態度になる

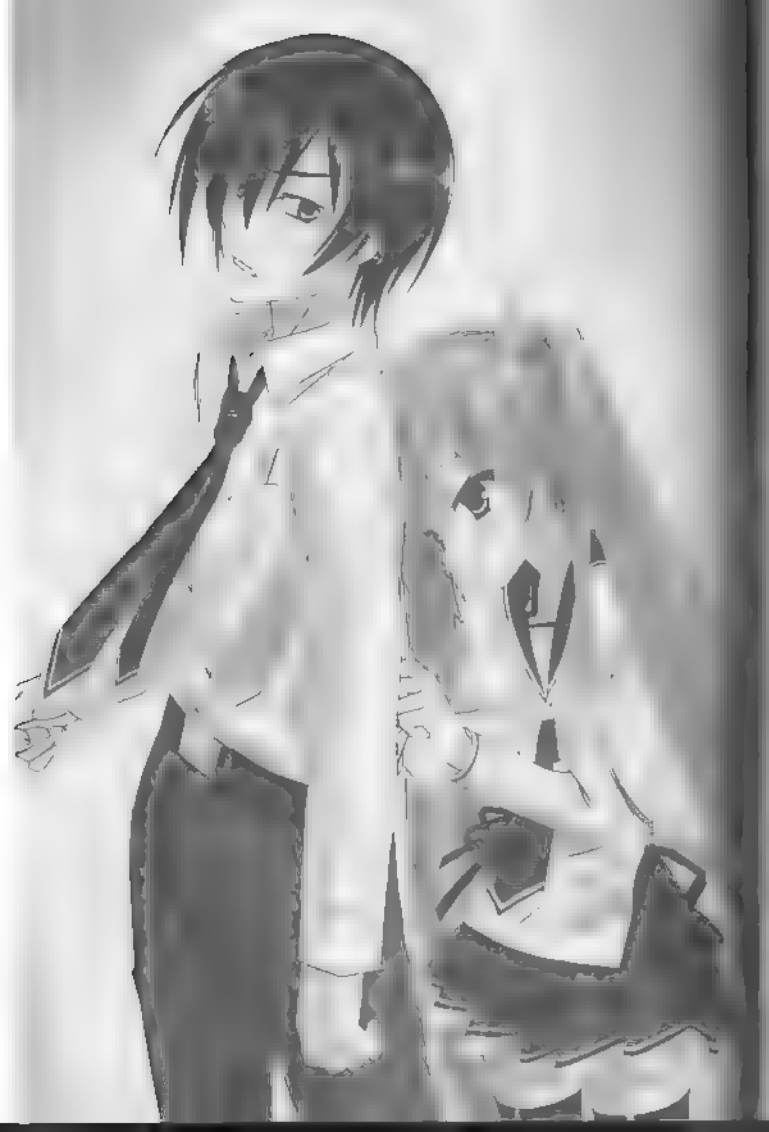
たか今のアリアは、そういう深層心理を無意識のうちに喋　ているような感じだった

ウソをついてる感じじゃない。だが……アリアが感情にかぶせていたカハ　一重もがかぶせて、本音を隠す　そのカハー　が、外れかけていたような気がしたのだ

酔　ぱらった人や、熱に浮かされた人　武偵的な感覚で言えば、弱い自一剤を打たれたような状態にもなる　そういった人か　いい本音を　それも言葉にできないような

大谷を、意味不明な表現で形へケてるように

そんな状態で何を言われ　ここ、着け今ここ、請け今えない



だから――
今のベランダでの事は、無かった事にしておいてやるよ　俺の中では
「冷えたろ。帰ったら、温かいコーヒーでも淹れてやるよ」
消灯した教室から廊下に出て、非常灯の中を並んで歩きつつ、そう言ってやると
「うん」
アリアは、俺の横で、つうなずいた
かなえさんが釈放されたら、みんなで御祝いしような　台場のクァ・エステーラで乾杯しよう　でかいケーキも注文しようこう　それを食い終わったら、俺のインスタントコーヒーよりずっと美味い、焙煎したてのエスプレッソ・ルンゴ・トゥピオで仕上げた
「うん。うんっ」
グリーンの非常灯に薄く照らされた、その顔は　とても幸せそうだった
良かったな、アリア
お前のその笑顔を見ると、今はただ素直に　心から、そう思えるよ
母親が無罪になる　アリアの念願が叶う　その時が、来週の、ここになるんだ
本当に、本当に……良かったな
アリア

3弾　白銀のICBM

「被告人・神崎かなえを――懲役336年の刑に処す」
東京高等裁判所第八　法廷に響いた判決に――
弁護席についていた俺は、耳を疑った
死刑や終身刑では後一しにされるという「一文」を裁判長が最初に言わなかったから、良くない予感はしていたか　まさか　アリアの母親　神崎かなえさんが
有罪判決だなんて
しかも執行猶予さえない　重い　重すぎる判決だ
どういう事なんだ
――
隣に座るスーツ姿の理子は、鋭い眼で検察側を見ている
冒戦会議から音信不通になったジャンヌ、長野のレベル5拘置所に拘置中のパトラッシュ
アリアは不参加だったか、この裁判、絶対勝てると思っていたのに
――敗訴だ　完全に
審より減刑されてはいるが、どう見ても被告人側の負けだぞ　この高裁

かなえさんの事実上の終身刑は、変わらないのだから
「おかしいだろ　ノー　こんなの　！
おかしい。
この裁判は、おかしい
なぜか傍聴人がゼロだったし、マスコミも1人も来ないし　！
俺たちには分からない何かが、背後にあるような気がする
「不当判決よ！」
ガタン　ヒイスを鳴らして立ち、がったアリアが、金切り声をあげた
こんな　どうしても　こんなに証拠、証拠が揃ってるのに――どうしてよ！　ママは、
ママは潔白だわ　どう　こで
スーツ姿のアリアが、床を蹴って検察側に駆けだそうとするのを
若い女性弁護士、連城黒江が抱きつくようにして押さえる
「駄くなアリア！　次の心証が悪くなる　即、自はする、落ち着け！」
――次――
つまり、最高裁だ。
そこで終身刑にされたら、もう覆せない。
追い詰められたぞ。この裁判。ついに

[illegible] [illegible] [illegible] [

さんの方を見ている

「行かないで　あたしと、離ればなれにならないで

そう、縋るようなーだ

グレーのスーツを着て、緩やかにウェーブした髪を揺らし、アリアの方を向いたかなえさんは…

ありがとうアリア　あなたの努力　本当に嬉しかったわ　まさかアリアがイ・ウーを抱丁に、ここまで成長を遂げるなんて　あなたは、大きく成長したのね　それは親にとって、何よりの喜びよ」

・落ち着いている　彼女は

この場の、誰よりも。

遠山キンジさん　あなたにも心から感謝しています　アリアは、どこへも良いパートナーに恵まれた　直接それを見届けられて、幸せです　でも――

そこまで言ったかなえさんは、すっ

と、その表情を全て消し、けぶるような睫毛の美しい目を閉じた

そしてまるで牛贄にされた人が、自分に死を命じた支配者を　誰か、ここにはいない人の事を思うような表情になり、

「このなる事は、なかりていたわ

そう、呟くのであった

かなえさんのカメオが付いた鏡を抱きしめ続けるアリアを慰めようとしたのか、遠城弁護士は日下のｓｕｄ・他たちを乗せ、駐車場でしばらく時間を潰してから

かなえさんを乗せた護送車が高裁から出るのを追うように、車を出した

少しでもアリアをかなえさんのそばに　いさせてやろう、という計らいだろう

助手席のアリアか、通行人めを避けて八本木通りに出た護送車を見つめている

「ママ

という声にフロントミラーを見ると、アリアは　また、泣いていた

それは　そうだろう

この裁判、弁護側は全員、勝つために戦った

勝つために、アリアは文字通り命懸けで戦い続けてきた　何年も

普通の女の子としての青春を全て投げ打ち、世界中を駆け回り　理子やシャーロックと戦い

ブラドを捕らえ、パトラやジャンヌと戦い

――それなのに。

減刑されたのは、理子・ジャンヌ・ブラドの分だけだ

他のメンバーの罪については、弁護側の主張不十分　残されたままだ

「……？」

連城弁護士が、サングラスを外して道の先を見ている。

俺も、その異変に気づく

前方の信号が――

（消えてる……）

外灯も、ビルも、それも白いところ、消えているのだ

歩行者用の信号も消えていて、人々は横断歩道の前でキョロキョロ辺りを見渡せている

なんだ……？

それは道路の向こうのビルから、サラリーマン達が次々と飛び出してきている

非常階段からか、ビルの1階にあるコンビニやカフェの中が、薄暗いメニュー板の灯りも消えている

停電か？

連城弁護士がそう呟いた時、理子が何かを警戒するように目を開けた

？

次の瞬間、俺の眼が――

異常な物を、捉えた

前方、停車中の護送車の下から　アスファルトの地面に、黒いものが広がっている

なんだ　分からない　かなえさんの罪に関する検察側の主張は　素人の俺にさえ、支離滅裂に思えた　理屈が成り立ってない事は明白だった　証拠だってあやふやだった

――たか、判決は下った

もう　どうしたらいいんだ

世界各地に散ったイ・ウーの　あのバトラヒルダを含む残党共を、全員逮捕すりゃいいのか　そして首に縄をつけて裁判所までしょっぴき、私が悪うございましたとわびさせればいいのか　そんなの、絵空事だ

仮にやれたとしても、何年かかるんだ　そんな事

連城が護士は時間稼ぎをしてくれるだろうが、最高裁に間に合うワケがない

日本の裁判運営は現実なる裁判の施行で改善されている　という頑張りがあって、3審いや、2年以内に最高裁判決は下り、かなえさんの終身刑は確定してしまうだろう

俺はそんな事をグチャグチャ悩みながら、隣に座る理子の方を見た

理子は目を閉じ、さっきからずっと何かを考えているようだ。

車は護送車に追いすがるように走り、普通交差点を右折し　外堀通りへ入りトンネルに近づく

その時、その信号の停止線からかなり離れた所で

護送車が　停まった

こっちへ向かって。

燃料漏れのよう…も見えたか、違う

あれは……影

影か、伸びてきているのか

車の窓から…を見…げるか、へ…や機行船が通りかかっているワケでもなさそうだ

「…」

影はみるみるうちに、この車の…を覆っていく

これもおかしい　車の外は明るいままだ

…物が無いのに、影だけがある…

――これは…

この瞬間の記憶が俺の頭をよぎった瞬間　ハノ――　ハチチハチノチノチノノ、

！」

閃光、続いて、車を包むような激しい放電音が耳を劈いた

車城自護士の驚く声と、アリアの悲鳴が一内に響く

粉塵かと思ったが、違う　これは　電気　高エネルギー流が、車を通り抜けたのだ

まるで、落雷が下から来たかのような衝撃だった

「……！」

…は…　車の…を…抜けた…　…は…小さ

たか、ボンネットから煙と　ハチハチノ、という音をあげながら炎が出ている

自動車には神発ホか何…リ　トレも積んであるんだ

引火したら、今度…

みんな車から出ろ！　危険だ！

ドアを蹴り開けて外に出ると、前方の護送車からも煙が上がっていた

タイヤも全て、潰れている。

「かなえさん――！」

護送車にアリアと駆け寄ろうとした時、ハ――ノ――

金色の放電が、今度は護送車側の後部扉に弾けた

「――ママ！」

「アリア、待て！　駄目だ！」

見れば護送車の中では、運転手がドアをガンガンと叩いている

動かなくなった車から出ようとしているが、出られないらしい

ドアが壊れたのか　それとも何か仕掛けられて、閉ざされたのか

道路に出た俺は、足元のあの異常な影が無くなっている事に気付く

一連の、不自然な『影』の動き――

ヒルダ　‥
その名を呼んだのは――
そいつが、見えたから。
いつの間にか護送車の上にのぼり、くるくる、とアリアの日傘を回す――
退屈そうで、どこか不吉な雰囲気の、ゴシック&ロリータ衣装の女
宮戦会議で、春麗、を名乗り、最も好戦的で――
あの夜、アリアを噛んだ、吸血鬼の娘だ
ヒルダ　写真では見てたけど――会うのは初めてね、
反射的に拳銃を抜くアリアに、ヒルダはフンと鼻を鳴らす
そして縦ロールの金髪ツインテールを揺らし、ソッポを向いた
イヤね　粗野ね　私、今はあんまり戦う気分じゃないのよ　日の光ってキライだし
日傘の柄を抱くように頬へ寄せたヒルダは――
「でも、つい手が出ちゃった　だって、タマモの結界からノコノコ出てくるんですもの。
それ、い　」
カノン　黒いエナメルのピンヒールの踵を一方鳴らし、護送車の上をくるくる
これ、あなたのママよね。　お父様のカタキは　眞郎兎、根絶やし、にしてやるわ
「――キンジ、右翼側面から援護しなさい！」

アーメ、一ノノたア　アは
いつもの行動パターン通り、真っ正面からヒルダめがけて駆ける
ノーノトエンジンでも積んでるんじゃないかってくらいの猪突猛進っぷりだ
！」
俺もやむなく、ヘレ　タを抜いてヒレダの右　なるほど、確かヤノの視界が塞がる
な方だ――に、駆ける。
俺とアリアの影が、護送車の影を踏んだ時
「――んッ」
ヒルダが小さくうめくのが見え　バチィィィィ　ィ
う　「」
「きゃあああっ！」
俺とアリアが、同時にその場に転倒した。
こ、これは…
コイツの、超能力かッ……！
60～90ボルトの強力なスタンガンを喰らった時の衝撃に、似てる
「たからァ　そんな血の気の多い姿を見せないで　ガマンできなくなっちゃうでしょ
ああ　もう食べちゃおうかしら　お馬たちなんか、第一、他ともやっちゃえそうだし」

かとう　かとう、とするのだが、ダメだ
意識は保っている　これもスタンガンと　緒だ　コイツの技　電流は妻まじかったか、
どうやら竜けはあまり上げられないらしいぞ
「く　くそ　」
だが俺は全身の運動神経を痛めつけられ、筋肉に力が入らない
それでもアリアは銃を放さず、ガクガクと膝を震わせつつ
「ヒ　ル　ダ　」
影の中を通って　まだ煙をくゆらせている護送車のナンバープレートの辺りにしかみつく
そして薄目を開いてこちらを気張っているか――ダメだ、アリアもケてない
ああ、私ったらダメね　アリア　あなたを見てたら食欲が湧いてきちゃった　あな
たの美味しい味、覚えちゃって、覚えちゃって――」
コノン、と階段を降りるように車のトランクの力へ降りてきたヒルダか　I
アリアの拳銃なんかお構いなしに、両膝を揃えてしゃがむ
「また、つまみ食いしちゃおうかしら　そこの死にかけたゴキブリの血は、捨てたビン
残ってる腐った酒の味がしそう　でも、あなたの血は100年物のワインのような
ゴキブリって……俺の事　かよ
だが、これじゃあ　ホントに、死にかけのゴキブリと一緒だぞ。

地べたに落ちたまま　何も　できねえ
指にも力が入らない。発砲すらできない。
「ヒルダ！」
叫び声は――
車から出てきた、理子のものだった。
だけどそっちを見れば、理子は両手でワルサーを、髪のテールでナイフを構えている
よせ　ヒルダ！
奴は奴銃を構えつつも、理子は　遠目に死ぬほど分かるくらい　震えていた
俺を撃ち殺し、なんとか優勢を張ってる　そんなカンジだ
そんな理子に、俺は6年に戦ったブラドと理子の関係を思い出す
理子よ――幼い頃、監禁されていた　このヒルダの父、竜悼公・ブラドに
精神的に、心を見るに、その頃、ヒルダと理子は会っていたのか
「ああん、4世。なんて凶暴な目。かわいい」
きゅうん、と自分を抱きしめるような仕草をわざとらしく見せたヒルダは、
「だから好きよ、4世　私が最も高貴なノルキー人なら、お前は狂犬病に罹ったノラ犬
でも　分かってるでしょう　あなたと私は、お友達
――アリアと俺の事なんかもう見えていないかのように　理子に語りかけている

「お父様がご不在の今は、私が竜悼公家の１　お父様がしたように、檻に閉じ込めたりはしないわ　私の人理石のお部屋も、シルクの天蓋つきのベッドも、純金の浴槽も、みんな貸してあげる　ヨコハマの紅鳴館を任せてあげてもいいわ

そう言うとヒルダは、ふわり、と車道に降りた。

「近づくな　、甘く見るな　そんなならないウソに、あたしが騙されるかよ　、」

――くすっ、

叫ぶ理子に、ヒルダが自らの口元へ指を寄せて笑う

「私の目を見なさい　理子　ウソをついているかしゃないでしょう

、」

ヒルダの目　金色の輝きを住かいたたえた紅い瞳を、つい直視した理子が――

こまった、という心の声が聞こえてきそうな感じで、小さく息を吞む

ほら　銃と剣を下ろしなさい　私との、友情のために　私の目を見ながら、そうよ、見ながら　ゆっくり、ゆーっくり、

、」

見れば――理子は、震える手で、ワルサーを下ろしていく　髪のナイフも同様、

そう　それでいいのよ、１世　偉いわ　私のいう事をよく聞く、いい子ね」

理子の体は、まるで理子自身の意志とは別に動いているようだ

カツ、カツ、とヒールを鳴らして目の前まで迫るヒルダに――

理子は、発砲　しない　たぶん気のせい、ヒルダを見ているだけで

やられた。何か、催眠術のようなものを掛けられたらしい

マズいぞ……これで、戦えるヤツがいなくなった。

この場の全員を生かすも殺すも、この　ヒルダの思いのままじゃねえか

ヒルダは自分の口から、コウモリの翼の形をしたイヤリングを一月外し――

友情の証に、あなたにあげる

と、理子の右耳に付けた

装着して震えながら、それでも目だけはヒルダを睨む理子に

ヒルダは、ニコニコと笑顔を向けている。

その瞬間に、と俺は何とかヘレ　タを握り直そうとするが

バチッ！

くあ、

その手元を、再び高圧電流が襲う

俺の体は弾かれるようにして、仰向けの姿勢にされてしまった

俺の手はそれっきり、痺れて動かなくなる　ヒク、ピク、と痙攣するだけだ

近づいている、
あれは――
見えるか、あれ
イ・ウーニンジャーロケが逃亡した時、同じくイ・ウーから逃亡した一味が乗っていた
――ICBM　それを改造して生み出された、乗り物　だそ
それに気づいた瞬間――ガスンッッッッッ！
地面を震わすような勢いで、その白銀のICBMが道路に突き刺さった
爆発は、しない　傾いたまま　クスのような静止している　やはりコイツは乗り物だ
その証拠に　ドアが一斉に開いていくのが見える
「……？」
倒れたままのアリアが、その人物に気を取られた
視線を交わした、らしい
危なかったね　キミか　アタね　自分かよ
白銀の光を背に、ここから低くと描かれた白銀のICBMから姿を現した、イは――
とこか海外の武偵高の制服と思われる、灰色のブレザーを着た女子だった
まるで、都市迷彩に馬に乗って駆けつけた了のようにせめいている
違和感に包まれる艶のある黒髪をひらめかせ、ソイツが、タと、ハノチから距離へ

「――お前が最も醜いヨロイモグラゴキブリなら、私は最も美しいヘレナ・モルフォ蝶
トオヤマ　お前には勝ちをここに向けることも禁じるわ
眉を寄せたヒルダが　一ノ、と赤い瞳を俺から背ける
ダメだ　下も足も出ない　ヒステリアモードさえない俺は、まるで本当に虫けらのような存在だ。この魔女の前では
いや、ヒステリアモードたったとしても　闘れんのか　こんな人間スタンガン女と
チクショウ、こ、こんな所で
こんなにもあっけなく、俺たちは――おしまい、なのかよ……！
――その時
「？」
ヒルダが目線を頭上、金色のツインテールを揺らし、整った細い眉を寄せて青空を見た
――？
なんだ……？
銀色の光が、ビルの向こ――遠かったに、見える
星しゃない　昼の日中に見える星なんか、ない

降りる。

そしてアリアを守るように、ヒルダに立ちはだかった。

ヒルダ　キミは、この世で最も傷つけてはならない人を傷つけた。

ヒステリアモード時の俺みたいな一調で　――声は、俺より高いか――言ったソイツの、紋章入りの銀銃から、細身の羊剣を右手で抜き放つ。

月光を受けてきれいのように煌めくサーベルに、ヒルダは不愉快そうに、眉を寄せた。

キミにアンフェキ　なお知らせが3つある　1つ　これはカンタベリー大聖堂より密使した十字銃剣　忠はスウェーデン鋼か――月身を覆う銀は、架齢1000年ぶりの十字架から削り取った神銀を沿したもの　2つめは

チャキッ――

と、次に美少年が右手で抜いた銃は　SIG P226R、通称、SIG。イギリスではSAS、アメリカではSWATが好んで使う、エリート御用達しのオートマチック拳銃。俺は張るか、信頼性の高い逸品だそ。

化銀弾　それもキミが慣れていない、プロテスタント教会で儀式済みの純銀弾たよ。

キミは、おそ！ほとには僕らとの戦いに慣れていないのだろう？

銀の弾丸　購買で売ってるあのバカ高い、通称　銀弾　か　それも恐らくは化被覆

俺のよく分からない女野たか、名のある寺社や教会で魔除けのまじないを掛ける事らしい
された銀の弾丸、いわゆる、対超性物体弾だぞ
「3つめ――ボクは怒っている　ヒルダ　キミか、アリアを傷つけた事に」
白を基調にして青をソイノの、　剣　銃の構えは　遠隔科でいう、カン　エノン
直接拳銃戦技の中でも難易度が高くて廃れた型だが、使いこなせれば実戦的なものた
俺もたまにやるが、あれは近距離・中距離どちらにも対応できて都合が無いからな
「……イヤだわ」
ヒルダは平い腕の力根を使った小さな弧を描き、それで鼻と口元を覆った
「とってもイヤなニオイ。どうも銀臭いと思ったら――」
ギリ……という音は、歯ぎしりらしい。
どうやら、この少年の威嚇が効いているみたいだ
貴族か……い決断の手順を踏まず、今襲する小社は承知のはたが、　竜悼公姫・ヒルダ
ここで、キミを斃す」
マンメそうな深みのある、ヶ月歯みかかった平瞳をヒルダに向けた美少年は
膝を少し落とし、両腕をクロスさせるような姿勢で構えた
アリア、　を庇って　叔父に　アイノの血なんか見せたくないからね」
言われたアリアは、赤紫色の瞳をキョトンとさせて黙っている。

意図的だろそれ。こっちを見すらしないし
・　」
ンリ　ヒ距離を詰めた少年の武装を見ぬかに駆かる暑撫　を見せたヒルダは、快晴の
空を頭で示す
――叔父と遊びたいなら時と場合を考えなさい、無礼者　こんな人気の悪い日、こんな
辺鄙くに遊ぼうだなんて　気狂い竜悼公姫が、受けると思って？
妙な断り文句をつけたヒルダの　ハイヒールの足が　膝か、膝か
容ける前納　のように、日の影の中に沈んでいく
これもさき地島で見た光景だ　マンションのように　見見から　消えていく
じゃあね　今はガマンしておいてあげるわ
とうとうと上傘だけになったヒルダは、アリアにそう言い残すと
そのまま、姿を消してしまった
ぺたん、という音と、ようやく動くようになった自を向けると
理子が、アスファルトの道にへたり込んでいた。
催眠術と共に、張り詰めていた緊張の糸が解けたようなカンタな
「大丈夫か、アリア」

と言う美少年に肩を借りているアリアの方へ
少し遅れて、俺も何とかおっかなびっくりフラフラと歩み寄れた
……もう動けるわ。肩、放して」
ファイドの高いアリアが、また小さく震える膝で少年に向き直っている
少年はアーアの様子を確かめるように、頭からつま先までを見た　そして大丈夫そうな事を悟ると、サッ、と肩のホコリを落として襟元を正してる
「ママは……？」
と、アリアが車の方を見るので俺も見ると……
やっと車から出られたらしい神崎かなえさんは警護官に両脇を支えられ、こっちを気にしたような目で見ていた。
規則上、彼女と喋る事はできないが　無傷みたいだな　よかった
しかし――
と、俺は少年の乗ってきたＩ－ＣＢＭと、彼自身を交互に見る
敵じゃなさそうだが、何者なんだ。コイツは。
「助けてもらっておうのも何だが　お前　イ・ウーの生き残りか　何をしに来たんだ俺か！？ＩＣＢＭの方を指して言うと、少年はようやく――
その中暗石のような瞳で、俺の方を鋭く見た

付たか　敵対心、のようなものを感じるぞ。
――人に素性を聞く前に、まず自分が名乗れ」
遠山キンジだ」
「知っているよ　事前調査でキミの写真を見たことがあるからね」
しゃあ聞くなよ
「ボクはエル　エル・ワトソン」
その名を聞いたアーアが「えっ」と小さな声をしぼって少年の方を振り向いた
ワトソン、と
その名は　探偵科の教科書に載っていた。
確か、シャーロック　ホームズ　アーアの曾祖父にして、イ・ウーのリーダー名ハトナー　九軍人の医師で、終生シャーロックの相棒だった有名な人物の名だ
「えっ……！　えっ、じゃ、じゃあ、あんた、まさか……」
さっきの電流の痺れとは別に、アーアが小さく声を震わせながら
ワトソンの顔を　見上げる
アリアには小さく笑顔を向けたワトソンは、こくり、と、うなずき
「そう　ボクはＪ・Ｈ・ワトソン卿の曾孫だよ」
今度は俺のために、また屈を寄せて振り向いてくる

「トオヤマ。キミは『何をしに来た』とボクに訊いたけど――理由が必要なのかい。
形の整ったふたえの目で俺を見つけたワトソンは、何やら不機嫌そうだ
それくらい自分でもいいだろ　俺はお前を知らないんだぞ」
俺も少しイラとして返すと――
ワトソンは、アリアと、向こうにいるかなえさんを順々に見る
そして、
「ボクは許嫁と、義理の母親を助けにきた　それだけだよ
と、言った。
？？？
意味の分からなかった俺がアリアのほうを見ると、ヒルダをまんまるにしてワトソンを見ていた
アリアまで、俺を見て、驚いた表情のまま　慌てるように目を、逸らした
許嫁？」
何だか分からない場の空気に、俺は再びワトソンへ尋ねる
アリアのことだ
なより何だろう？
と、おんなはかりにサファイア、ワトソンが言い放つ
そして一丁よりも背の高い俺を見上げ、向き直り

――アリアは、ボクの婚約者だ」
その後、駆けつけた警察に状況を説明し、改めてやってきた護衛車に乗せられ拘置所へ
向かうかなえさんを見送り　ヒルダの追撃もなさそうなので
虎ノ門まで歩いて帰る有護――と、話す事があるらしい有護についていったワトソンと
解散し――理子は、急に用事があると言い出して乃木坂方面へ向かい
俺とアリアは、仕方なく2人で電車で帰った
その間、アリアは……一言も喋らないでいる。
ツリ目で子が動かないアリアを軽くイジってみたが、話しかけたけど挙動不審に
なって俺から顔を反らすから、とっつく間もない
これは　暫くに渡けない事件だな
ワトソンの、事
エル・ワトソン
アリアはその、許嫁
陸史モノのマンガとかを読むと　貴族には、いるよな　そういうの　本人たちが若い
間から、親同士が勝手に婚約者を決めちまうってヤツ。
それが、アリアにもいたらしい　とうやら

へー　そうなんだ

ってとこだ　俺の感想としては

探偵科の授業で聞いた事があるが、ホームズ家とワトソン家は九々、初代の時代からの親密な　族同士　どちらも貴族に叙勲されてるから、家柄的にも申し分ないだろう

いいんじゃないですか　お似合いですよ　美男子と美少女で

という、どこかピリピリした空気を

無意識の内に流してしまっていたのだろうか

モノレールで武偵高駅に降り立った時、アリアが　くい、と、俺の袖を掴んできた

「……なんで黙ってるのよ」

はっ

微妙に声を震わせたアリアに、俺は振り向く

お前が黙ってるからだろ　俺は銀座線に乗った時、いっぺん話しかけた　それをお前が無視するから――」

「そんなに怒らないで。冷静に話を聞いてよ」

「なんで俺が怒る必要があるんだ」

「あのね、さっきの人は――」

「ワトソンなんかどうでもいいだろッ。俺には関係ない」

[illegible]

アリアをホームに置いて、先に階段を降りていく

その間の場　先ほどアリアが、俺とレキを見つけてケンカを売ってきた場所だ　一、追いついてきたアリアは

「じ……自分だって、レキと婚約してたくせに

とか声で狙りする

アリアの詮索はいつもの事なので、特段、怒るような事ではなかったのだが――

とても虫の居所が悪かった俺は、少しケンカを買ってやるつもりで振り返った

「お前な、レキとのあれは――」

「初めて会ったのよ。今日」

俺のセリフを先読みしたのか、アリアは少し早口で言葉を制してくる

ワトソンは　あたしのお祖母様が勝手に決めちゃった婚約者なの　でも、その話は白紙撤回されかけたし――お祖母様はお歳を召してるから、よく空想と現実が混ざった話をされる事があるの　だから本気にしてなかったし、昨日、忘れてた　その話自体

「これは本当よ　神に誓うわ　あたしはワトソンに今日、初めて会った」

真摯に俺を見上げてくるアリアは、何だか少し　必死な感じだな

もっと言えば、本当に彼が存在するのかすら知らなかったわ　ワトソン家には婿入がいる　って、噂に聞いてはいたけど、今あの家はリバティー　メイソンっていう結社の上級職を任されてて、女王陛下からの信書しか無い限り、みだりに正体を明かしちゃいけないの　だからみんな偽名で暮らしてるし、カモフラージュの仕事を――

捨てられる子犬みたいな目してるアノアに、俺は

「なんて、そんな泣死になるんだよ

無性に腹がいらつきを感じる

まるで俺が、アリアに婚約者がいた事をなじったような気分じゃないか　これじゃ俺は別に、最初から納得ずくなんだ

お前がここからいずれいなくなる事や、お前がそういう貴族の世界に生きている事は

キンジ……」

だからお前がそんな、言い訳みたいなムードで話す事なんて何もないんだ

俺とお前は武偵仲間として、時的に組んでるだけ　結局の所、俺とお前は違うんだ

能力も、身分も、生きる世界もな

俺は無言で再びアリアに背を向け、階段を降りていった

ついてくる足音は　もう、こなかった

7. Watson

と、甲板にワトソンが自分の名前を流麗な筆記体で書くと――

キャー！

と、それだけでクラスの女子が　全員に黄色いおそれた

あまりに元気良い歓声に、ビビりの担任・高天原ゆとりは教壇から足を踏み外してる

高天原先生が　それでは皆さん　スペシャルゲストの転入生を紹介　します　マイチェスター武偵高から来た、こっちもカップイイ留学生ですよー」と言うニヤニヤ顔で、うかつ　：もしやと思ったが、その通りだったな。

「転入してきやかった　ワトソンのやつ

扉を開ける俺の横で、わなわなと驚いていたアリアは

また、チラッ、と俺の様子を盗み見てくる

なんたよお前　昨日から

そんな、腫れ物に触るような態度すんなよ

お前と違って、別に俺はお前のプライベートな事には関与しない

特にお前とワトソンの関係は、お前の　族、家庭、関わる気た

俺なんかが、ち入る話しゃねーんたよ

エル・ワトソンです　これからよろしくね

男子にしては少し高めの少年っぽい声でワトソンが言い、一番後ろの席についた時
朝のホームルームの終了チャイムが鳴った
同時に、わー！　きゃー！　と、女子どもがワトソンの席を取り囲んでる
まるでジャニーズ系アイドルの囲み取材みたいだな
前の学校では、専門科はどこだったの？　ここではどこに入るの？
「ニューヨークでは強襲科、マンチェスターで探偵科、東京では衛生科――ボクは自分の武偵技術に、最後の磨きをかけに来た」
キャー！
また女子が盛り上がる　揃って、目がハートマークになってる感じだ
子様みたい
「うちは王家じゃない。子爵家だよ」
キャーキャー！
更に盛り上がる　見れば何人か、目がやっぱりマークになってるぞ
「肌きれい！　女子よりきれい！」
「……ありがとう」
ニコ　白い歯を見せて笑顔になったワトソンに黄色い声を上げた女子どもは、ついに何人かクラッと来たらしくフラついて……衛生科や救護科の女子に支えられてる

理子が休みで良かったな。
アイツはああいう祭りが大好きで過剰に煽るクセがある　見物客が増えるとこだ　か
しかし　人したもんだな、ワトソンは
もし俺があれだけの女子に取り囲まれたら　そう考えるだけで、逃げ出したくなる
武装した犯罪者に囲まれる方がまだマシだ
だが――ワトソンは平然としている。
女子の群れに対して、切構えてない感じだ　女に慣れきっている　友達に囲まれてるような気安さで、うまくあしらってるみたいだ
あそこまでの美少年ともなると、格が違うってことか。
「ワトソン君は、何部に入るの？」
「予定はないよ」
とのお答えぇ、女子たちはみんなの色を変えて　サッカー部に入ろうよ　あたし今からマネージャーになるし　え、演劇部にかがですか、水泳部に来てよ　なにと勧誘合戦を始めた
「ごめん　ボクはどこの武偵高でもクラブ活動はしないんだ　特に水泳はNGで――
と苦笑いするワトソンだが、女子たちは簡単にはひきトがらない
よっぽどお近づきになりたいんだな　留学生のイケメン子爵サマと

「ダメだよ帰宅部なんて！」

「そうよ、キョンと一緒に早く帰ってもなにもないもの」

おい水泳部　俺はいずれ転校する予定だから、確かに部活動はやってないが、そこで名前を出すな　ていうか見てんのかよ　俺の昼寝　まあアリアとか日向の機嫌が悪い時は部屋に帰りたくないから、よく時間潰しに寝てるけどさ

でも、ワトソン君が来るんだったらたらしが移るって　ああ、それなら私にもチャンスが来るかも♪」

などと、演劇部はウットリ独り占してる

たらしが移る？　なんだそりゃ

「たらしが移る？」

俺と司しポイントに引っかかりを感じたらしいワトソンな、女子に聞いた

女子は俺の方をチラ見すると、読経後封じに手で口元を隠し、ごにょごにょと、

ワトソンに何かを囁いてる。

それを聞いたワトソンは、俺の方を向いて急に頬を赤らめ――

「なっ　トオヤマは、そんな　こ、好色な　」

紺い闇を吊りけて、こっちを睨んでくる

お前が美形だからそんなに妬みは無いか、とうせ　キョンよあの見えた女ったら

神崎さん　与助さん　その他、も複数名を数えたよ　ようこそ、まほろばへ

俺は、よくそういうスキャンダルを女子に噂されてるからな

だが……あの女子の輪に特攻して、

・九々アリアはとスアリアモ　のトリガーを調べるため、俺の家に住み着いた

・白雪はアリアに鍵をもらって、なぜか俺の部屋に住み着いた

・理子は俺とアリアを近づけたくて、わざと俺に近づいてアリアに手本を見せてるだけ

・レキは風様の命令で俺に求婚してきただけ

などと一つ一つ自己弁護する気にもなれん。

というか、できん　機密事項や、俺にとっても不明な点が多すぎて

さらに俺の根も葉もない武勇伝を聞かされたらしいワトソンは

「まさに女殺しだな、トオヤマは。そんなに毒牙にかけてるなんて　」

史上赤面し、すごいテンパりふって慌てる

お前、いい年こいた男が他人のゴシップくらいでそんなに血相を変えるなよ

ていうか　普通、男子は俺のフィクション女性遍歴を誰かから聞くと「なんて人したヤツだ　見習いたい　とか勝手に目おいてくれたりするんだがな　経験、なぜか

（まあ、いいさ）

ワトソンの事は放っておこう。

どう思おうと勝手に思え。

その話は真実じゃない　取り合う価値もない、誤解に基づいたウワサ話だ

ワトソンが真偽も確かめずウワサ話に踊らされる程度の男なら、丼丁をするだけ俺の男が下がるってもんだよ。

その後、一般科目の授業で――

いきなりワトソンは授業にしっかりついてきた。

いや、ついてきた、どころじゃない。

先生に指されると、どの問題にも一答する　英語はアリア同様ネイティブ・スピーカー、だからか英文法、数学、生物、その後の日本史にまで全問一解しているという

武偵高の偏差値が低いとはいえ、これはクラス中が驚嘆する他なかった

なぜワトソンは海外の武偵高から、今日転入してきたばかりなんだからな

「少し予習してきたからね」

休み時間になるたび自分をもこはやす女子たちに、ワトソンは苦笑いしてそんなことを言っていたが……ふっ、ちょけ、との教科も1夜漬くらいの俺よりアキるそ

1夜や暗記ができれば頭がいいかといえばそうじゃないか、少しの予習でそこまで覚えられるレベルなんて、地頭の良さを認めざるを得ない

見た目は美形で、リアルに貴族だし、頭もいいときたか

そりゃあ女子が放っておかないワケだ

その後、一般校区から専門校区に移動するため巡回バスを待っているとき　未だ普段はアリアの自転車に2人乗りし、強襲科棟から徒歩で探偵科まで行くのだが今みたいにギクシャクしてる時は、俺たちは別々に移動する　それが裏目に出たなアリアは自分、結局俺の部屋に帰ってこなかった

少し心配だったので諜報科の風魔に探させたら、女子寮の1室で後輩の女子たちもまじえガールズトークをしていたという事だ

アリアは何やら物凄くイライラした雰囲気で、戦妹の星枷は怯えきってたとか。

とにかく俺1人になり散らしたり、食べ物をオモチャにしたり

（……相変わらずガキだなー、アリアは……）

と、小さく溜息をついていると　バス停、俺の前に1台の黒い車が停まった

バスじゃない　ハサードファンを付けた、これ　ボレンェ911カレラ・カブリオレじゃねーか　1000万は下らない、超高級車だぞ

と驚いていると、幌が自動的に開いて車両の後部に格納されていき――

オープンカーになった911のカレラハンドルの運転席で、

「やっぱりトオヤマか」
サングラスを外した男は、ワトソン……だ
えは来ないぞ　前の交差点で、強襲科の生徒同士が市内で乱闘していた　駆けつけた
車もすべて徴発されてバスを手で横転させたから、しばらくは通行止めだよ
し……強襲科のヤツら：
お国の国民にはいくら負傷者が出ても構わんが、公に迷惑をかけるのはやめてくれよ
ていうか簡約も簡約だ。素手でバスを横転させるな。
乗れ　トオヤマ　徒歩でも間に合うだろうが　探偵科まで送ろう　キミとは少し話し
たい事もあるからね」
――そう言ってドアを開けたワトソンに、俺は若干の戸惑いを覚えた
なんだろう
なんだか、コイツと2人っきりになるのはイヤな気がする
車に気に食わないとかそういう事しゃなく――直感的に、本能的に、危険を感じる
たが、バスは来ない　ここは　お言葉に甘えて、乗っておくか
幌は俺が乗ると自動的に開し、車を走らせ始めたワトソンから微かに
なんだろう　シナモンみたいな、いい香りがするな　男のくせに、ヘンなヤツだ
……いい車だな」

ノーシーターに白しであるカレラかあったから即　買った　本ではない柄なホディしゃ
ないと、持て余すからね」
すけえな　国によって乗る車を変えるのかよ
武藤が聞いたら、うらやましさに発狂するだろうな。
ていうか似合うなあ　ワトソンに、漆黒のカレラ　半髪の美形が乗ると、ピッタリた
それきり会話が続かない俺たちが、しばらく黙っていると――
信号待ちの際、チラと俺を横目で見たワトソンが一次を切った
「――そう見えて、女ったらしらしいな。キミは」
やっぱり、その話かよ
「そう言われてるらしいな、女子には」
「ホクは、そういう男が一番キライだ　ヒルダの前での体たらくに加え、こよ　女性に
対する　その、ふしだらさ　それは最も良くない　キミの第一印象は悪い　非常に悪い
最悪だよ」
と、ワトソンはハンドルを握る手に少し力を込めた。
どうやら生真面目で、頭に血が上りやすい男らしいな
単子なタイプだぜ
だからアリアドは、トオヤマの部屋に住むのはやめろと命じておいた

ありがたい話だな　俺は迷惑してたんだ」

フン、と俺が鼻を鳴らしてソッポを向くと――

ワトソンも、同じように鼻を鳴らした

「何となく、キミとは気が合わないみたいだな」

何となくじゃない　俺もそう思うからな」

その後、探偵料の為に停車したワトソンはムッとした様子で、

アーアとは、お互い成人してから正式に組む予定だったが　その前にまず、アリアをキミから遠ざける。アリアは妙にキミを気に入ってるようだからな

「勝手にしろよ　――送ってくれてありがとうな

俺が車のドアを開け、外に出ると

「よく覚えておけ　アリアのベストパートナーは、ボクだ　キミじゃない」

ワトソンは宣戦布告するような態度で、少し強めに言ってくるのだった

ハンッ

という音に続けて、俺は体育館のコートに尻もちをつく

ワトソンに送ってもらった翌日、4時間目……

体育の時間で、バレーボールをやらされてるんだが――

「痛ってて

顔面に思いっきり、アタックをぶち込まれた　いわゆる顔面レシーブ状態だ

「ゴメン、トオヤマ。大丈夫か？」

などとコートの上に勝ち誇ってくるのは――ハーフハンノ姿の、ワトソンだ

俺は　特に答えず、丁のきで　ボールにするな　と返してやったりがる

ていうか、今のアタック

お前、俺の顔を見て……狙って打ってなかったか？

それからしばらく、ポイントを取ったり取られたりこそ　事故と思わせるような危ない時間を置いてから、最後にまた　ハンッ

ワトソンのアタックが、俺の側頭部に思いっきりヒットした

しかもボールはちゃんとコートの外に落ちて、俺たちの負けた

分かって分かった　他のヤツらには分からなかったろうか、やっぱり故意だ

（アイツ……）

このゲーム、得点の半分はワトソンに取られた　器用な男だ

体かやたら柔軟で、ハ投も巧みだった　おかげで俺の顔にヒットする投も含めてな

体育館の　角では、4時間　が休講になったらしくさっきからワトソンを応援していた

1年の女子たちが、ヤツを取り囲んでいる

ワトソンは爽やかな笑顔で前髪をかきーけ、女子たちと話しながら
やっぱり、意図的にこっちを見ないようにしているぞ　分かりやすいヤツめ

その後のほほ休み、まだズキズキする鼻とキンキンする耳にイライラしながら学食に入る
と――困った事に気付いた。
（しまった
金が、無い。
ビックリするほど無い。
これは最近、報酬にならない仕事ばっかりしてたのと、　それでも戦闘は多かったから、
装備mをあれこれ買っていたせいだ
出費はかりで入金が無ければ、そりゃ金欠にもなるよな
自戒会議の夜、武藤の妹にモーターボートを借りたのも痛手だった　ソケにこくれ、
ったら　「輝いちゃうぞー」とか激怒して単車で取りにきやがったからな
今は、また厂も神社の祭事でいないし・
仕方ない　中賀さんに頂戴　ていた一オロチ」のもずく、分割払い金に手をつけるか
しかし贅沢はできないぞ
後で何か武闘からっ依頼を受けるにしても、報酬が入るのは来月だからな

ここは一番安いコッペパンで凌ごう。
「体育の後だから腹が減ってるってのに、これだけかよ
会計を済ませ、セルフサービスの水を持ってテーブルにつき、パンの袋を開ける
と、赤貧少女の風情とか少しがかなな
俺が、人前しくパンを食い始めると……
ぼ　俺の向かいに、食事のトレーを持ったワトソンが通りかかった
そこで俺の貧相な昼食を見て、クス、レイやな笑いをこやかる
「……なんだよ」
「一緒に食べようか」
気が合わないとかいってたくせに、ワトソンはニコニコしながら机にトレーを置く、
ていうか、それ　学食で一番高い、スァーキ・ブレートしゃね、か
神ェ牛の、それも霜降り肉のやつだぞ
「あのー、お支払いは前払いなんですけど
という声に顔を上げると、ワトソンの横にレン打ちのお姉さんが来ている
エプロンを掴んでモンモジするお姉さんを、長いまつげの目でキョトンと見上げる所
を見ると　どうやらワトソンは、後払いだと思っていたらしいな
そうか、日本では前払いなんたね　チップの風習がないからかな

なと言いながら、胸ポケットからワトソンが取り出した財布を開けると――
俺とお姉さんが、揃って引く。
ヴィトンの財布が破裂しそうなくらい、万札がギッシリ入ってる
「ちょっとまだ、円の通貨換算に慣れてないんだ　これで足りるかな」
「は、はい。すぐお釣りをお持ちします！」
万札を渡されたお姉さんが慌てて走っていくのを、苦笑いしながら見送ったワトソンは
……くる、とこっちを振り向く
そして、見とれてしまうようにキレイな仕草で十字を切り、食前の祈りをしてから
ナイフが溶け込むように柔らかいステーキを切る
カチャ　カチャ
「トオヤマ」
「何だよ」
食べたいか」
俺が野　ているとき、
キミには　やらん」
じゃあ聞くなよ。

俳優みたいに優雅な仕草で食事をするワトソンを睨む　俺は猫舌とハシを精一杯使って
それをワトソンは勝ち誇るように、ウキウキした目で見てきやがる
コイツめ。よっぽど俺が気に入らないらしいな
「見たところ、キミは金に困っているようだな」
悪かったな」
「武偵にとって、金は弾薬や装備に繋がる生命線だ　それが途切れると、こんな武偵でも弱体化する」
「そんな事は分かってる」
ワトソンが言うことは　事実だ　武偵高でも1年で習う
公金で装備を整えてもらえる警官や自衛官と違って、武偵は常に装備にかかる全経費を考えなければならない
武藤兄妹や平賀文にだって、全部かかるだろう
調べやがったな」
武偵は基本、金で動く
最近の俺が場当たり的にやってしまった『報酬がどこからも出ない仕事』は別として、通常の依頼については、報酬の支払いやな配、金の代わりに依頼を受ける札殺処理などを学生間でもしっかりするよう教務科から言われている。

なお、その際に金を一積む一事は禁止されていない　更に支払いが滞る仕事は中断する事もルール違反には当たらない

というシビアで現実的な　面が、武偵の世界にはあるのだ　たとえ学生でもな

「早くも、トオヤマの弱点を一つ発見だな」

フ　、と笑うワトソンのキレイな顔に

俺は再び、本能的な危険を感じる。

何だか分からないが――危険だな　コイツは、俺にとって　それだけは分かる

しかし、何が……？　それが、見えない。

武偵高では2学期でも月一回は屋内プールで体育をやるのだが　春と、水泳の授業でまたワトソンが何か仕掛けてきたら、今度は反撃してやるつもりでいた

しかし意外にも、ワトソンは見学との事だ

（アイツ、泳げないのかな。アリアと同じで……）

と、2年A組の男子　同じ準備運動をしていると、黒い長袖長ズボンのスポ　ノウェアで現れたワトソンは、シャネルのサングラスをかけ　ハイプ椅子を取り、床をポンポンと人全に払ってからテーブルの横に上げてる

キレイ好きなヤツだな。

そしてその椅子に膝を揃えて座ってから、何かにハッと気づいたような素振りで　慌てて、足を組んだ

妙な動きに皆を傾けていると、ワトソンの横では蘭豹が――

「よーしガキどもー　プールを20往復　ろやー　サボったヤツは射殺やからなー」

ドンッ！　スターター代わりのM600を撃って、すぐいなくなってしまった

蘭豹のヤツ、ほんと、よくあれで教員免許を取り　けられないもんたよな

まああの暴力教師がいなくなってくれる分にはありがたいので、俺たちは　縦か横かは言われなかった＝という屁理屈で、プールを横向きにサ　サと20往復してしまう

そして時間が余ったので、後は鬼の居ぬ間の洗濯だ

みんな適当に泳いだり、プールサイドで駄弁ったりする自由時間になった

俺は　蘭豹の授業放棄を先読みしていた武藤から　カーから持ってきた雑誌の束から映画雑誌を取り　ワトソンのそばにあるパイプ椅子を拝借しに行く

見ればワトソンは　なんか　水着で戯れる男子達の方を向いたまま、顔が赤いなカぜでもひいてるのかっ

だとしたら、それでプールを欠席したのかもな。

縦20往復に相当する横34往復を終えたマメな不知火が　がってきた時なんか、あわ

「断る。そ、そんな本を公共の場で広げるなっ」
そんな本、って。このグラビア写真がか？
俺ですら大丈夫なのに。
まあまあ、そう言うなって　こんだけ居りゃ、絶対1人は気に入る子がいるもんだぜ
騙されたと思って、全員サッと見てみろよ
と、いかがわしい店の客引きみたいな事を言いながら――上半身裸の武藤がワトソンと雑誌をムリヤリ組み、くい、と抱き寄せるようにして写真を見せると、
「――キャ」
武藤の胸に顔を寄せるようになったワトソンは、短く悲鳴をあげた
サングラスがズレて見えた目は、潤んですらいる。
のぼせてるみたいだ　とうやらプールを見学してる間中、熱っぽかったみたいだな
「な　なんだよ　女みたいな声出して　しゃあ、お前はやんなくていいよ　ついてるから、熱ある時は気持ちいいぜ」
お前　少し触っぱいんじゃないか？　ほら、コうやるよ　冷えてるから、熱ある時は
武藤はワトソンを放し、お詫びのつもりか、さっきのコーラをさし出してる
ワトソンは押しつけられたコーラの缶を両手で取り、
「で、でもこれは　さっき、そこが

っ」と小声で驚いてイスごと少し後ずさってるぞ。ワトソン。
おいワトソン　体調が悪いんなら救護室にでも行けよ」
俺に話しかけられたワトソンはこっちを向き、俺の胸や肩を見て――
わ、わわ、と口元を震わせてから――サッ、と顔を反らした
何もいわないし、耳まで赤いぞ　かなり熱があるんじゃないのか？
おいキンジー　これをKB全員載ってるぞー　不知火も来いよ、総選挙やろうぜー」
そこにプールサイトを堂々と武藤が、グラビア雑誌を広げて小走りできた
「3人じゃ選挙にならないじゃないかなあ」
ワトソンに対抗できそうなイケメンぶりで苦笑いする不知火は、付き合いのいい男だから……やる気らしいな。
「お前らなあ　そんな事して、何の得があるんだよ　ー
あまりの不毛さに断ろうかと思った俺たか、つれなくすると武藤に雑誌を貸してもらえなくなる恐れもある。
さすがに水着グラビアぐらいでヒスる事もないだろうから、付き合ってやるか
「じゃあ全員、5票ずつな　おいワトソン、お前も選べよ
山コ　フを開けて　日飲んだ武藤が、アラスチックのテーブルに雑誌を広げると
初めからこっちを見ないようにしていたワトソンは、アイノ、とそっぽを向いた

「一口しか飲んでねーよ」
「でも、この、ここに口をつけた物を――」
「月刊十で何言ってんだ」
と言う武藤の体から、さっきワトソンのスポーツウェアに水がついていたので
「鼻があるんなら、濡れたらマズいよ　拭かなきゃ」
不知火がタオルを手に、ワトソンの体からポンポンと水滴を拭きにかかると――
それが物凄くイヤだったのか、ワトソンは「ヒ」と飛びあがり
不知火と、ついでになぜか俺も突き飛ばした
ボ、ボクは帰る！　もう限界だッ！」
まるで声変わりしてないかのような甲高い声で言うと、ワトソンは慌てるのか微妙にジグザグ走行しながら――プールから、逃げ出してしまった。
指差わらず　何か、引っかかるものを感じるぜ　アイノの諸々の行動には

その放課後、俺は……
食費も節約しなければならないので、購買で半額になっていた午前の野戦食を買い込み
――風揚げかできそうなくらい軽くなってしまった財布を手に、平賀さんに電話を掛けた
「もしもしはいはいなのだー？」

「平賀さん、遅くたよ　その、『オロチ』の方丁分、ついてなんたか
「あー、あれは、まだできてないのだ　今週中には何とか　一
言いづらいんたが　代金の支払いか遅れそうなんた　来月には必ず払うから、品だけ
その日程で仕上げてもらえないか？　いつも済まないが、ノケでおいてくれ」
「むうー」
平賀さんは少し考えるような声を出し、ばらばら、と電話口のそばでスケジュール表をめくるのをうかてた
「ま、くんはお得意様たから、いつもならOKですのだけと　今回は　それなら延期させて欲しいのだ」
「延期……作るのが難しいのか？」
「それもあるけと、別口で教務科から緊急依頼をもらったのだ　あれこれ壊れてる段ボールの備品を、寄付金が入ったから修理してほしいとのご依頼てすのだ」
「寄付金……？」
「ワトソン君が、すっごい額を出してくれたそうなのだ」
ワトソン　？
「あやをご指名したのも、ワトソン君たそうなのだ　なので、今月のあやは大忙してすのたあ　一

「平賀さんの俺を横取りされた俺が、不機嫌そうに話すと
『あー、あれなー　遠山くん、ジェラシーしてるのかー？　カワイイのー♪
幼稚園児みたいなカワイイ嫉妬ー　ワケの分からん事を言い始めたぞ、平賀さん
シェ、ジェラシー？
こないだワトソン君、アリアさんと2人っきりで喫茶店にいたってウワサなのか　遠山くんとアリアさんは乳母中との情報もあるんだー
別居って
く、詳しいな　俺もワトソンとアリアのその件は知らなかったぞ」
あやや　はチビだからモテないった　だからリア充同士の惚れた腫れたを聞いて、自分も参加してる気分になるのが趣味の一つなのだー♪』
ね、根拠な趣味だな　ネクラの異名を取る俺が言うのも何だが
『両方の情報を組み合わせると　遠山くん、アリアさんをワトソン君に取られちゃって嫉妬してるのだ。わはー、マンガみたいなのだー！』
ちっ違う　俺はただ　ワトソンが怪しいから――
『ワトソン君はいい人なのだ　おっきなアメもくれたのだ　遠山くん、男のジェラシーは、みっともないのだー』
ふ、俺が繰り返　ワトソンに否定的な事を言おうとすると、電話を切られてしまった

「平賀さんは、はふー、と少し疲れ気味の息をつく
ワトソンのヤツめ　平賀さんを手一杯にして、どうするつもりだ
ひょっとして　これも俺への嫉妬からせか
おい、平賀さん
『はいなのだ
「すまん、あと5分、延期にしてくれ　たが　ワトソンには気をつけろ」
『気をつけろ、ですのだー
「あいつは何か怪しいんだ。俺に……」
妙な嫉妬からせをしてきている、とおうと思ったが　証拠が無い
そこは伏せて話すしかないな。
『うー　どこか怪しいですのだー』
それは　その　なんとなく、だ」
『そーは見えないのだ。ワトソン君はいい人なのだ　こないだあやや町に木一、他にもあれこれ武装を発注してくれたのだ　ふはふはは』
これは……平賀さんなりの「ウハウハ」だ。
高価を吹っかけても相手が値切らず、ホロ儲けした時の笑いかそいや、あいつは不穏な動きをしているんだ　アルの時にも」

どうやらいつの間にか、平賀さんはワトソンに懐まされてたようだそ
何となく分かってきたか　ワトソンは俺の見てないところで、俺の動きを封じるような根回しをしているらしい
何か狙いだ
ていうか、アメって　女子それぞれの好みかよく分かるヤツだな　そういうところも気に喰わないぜ。

――ワトソンにも弱点がある事が分かった
クジ運の悪さだ
転入生は後から、変装食堂、の衣装を決めるのだが、期間も短いので自作する事までは求められない
その代わり、クジを引くチャンスは1度　変更は認められないというルールらしい
1年が休み時間に持ってきたクジ引き箱には、有り物をそのまま着ればいいタイプの衣装しか入ってなかったのだが・
何人かのクラスメートが見うるは、ワトソンがべらりと広げたクジには、
『女子制服　武偵高』
とあった　一番の大ハズレ　実は女装だからな　体質改善、失した

内心、さまあみろ」と思う俺以外、1組の生徒たちに緊張が走る――
「
ふーむ　と少し考えるような仕草をしたワトソンは、
「それは流道なり　疑われたくない事は、逆に見せる事で疑われなくなる
と、英語で諺のような事を呟いて、
イヤだなぁ。ちょっとイヤだけど・・まあ、やらないと教官に殺られるそうだしクジを引いたからには、やるよ　すぐ着替えるのから
なんとうから、教室は大騒ぎだ
女子どもは　私の制服をどうぞ　アタシの制服使って　いや、あたしのだ　などとシャーシンをまいトイレへ駆けこんでくし、一部の男子は　ついに生で　次の男の娘か見れるぞ　などとワケの分からん事をいいテンカメを用意してる
すぐ着替える必要はないのだが、それは誰も言わないな
その後、女子から制服を借りたワトソンは・
それを手に、廊下からとこかへいなくなった
女子がやきもきして待っていると、かたん　と、天井のパネルが外れ、
「せっかくの変装だから、少しサプライズで登場するね
と、ワトソンの声がして　すたっ

人井の穴から教壇へ、制服姿の少女が降りてきた
チャキッ、とSIGとM1911を構え、とや顔でウィンクしたワトソンに
ホアーッ！と、男子から異様な歓声が上がった。
どうやら、ほう　―レ　わぁ　が瞬間的に混ざった声らしい
気持ちは分からなくもない　俺もヤノと仲が悪くなければ、声の一つくらい出てたかもしれない。
それぐらい、ワトソンは可愛かった
それもカナみたいにキレイ過ぎて現実感のない女優みたいなタイプじゃなく、身近感のある、ホーイッシュな美少女になりきってる　女子と比べても、そこそこあんくりーを残けてるアーアとか由子みたいにキャラ立ちしまきのキャラじゃない
この一件以降――
女子人気をかっさらったワトソンに快くない印象を持っていたらしい一部の男子たちも、急にヤツに優しくなった。
晴れてワトソンはクラス全員の親児となり、どんどん友達を増やしている
そのワトソンと気が合わない、凡々友達の少ない俺は――
だんだん、クラスに居場所が無くなってきた。
数日後には武藤が、ワトソンのホームパーティーに招待されて　もちろん俺は呼ばれて

ない。寮にあるヤツの人部屋にて手味い物をいろいろ食わせてもらった　とかいうのを嬉々としてするので　「ワトソンには気をつけろ」と警告してやると、「アイノはいいヤツだぞ？　こないだの変装で分かったけど、ノリもいいし」と逆に怒られた
武藤も「ワトソンに連絡されたのか
気になったので探りを入れると、俺がたまに借りてた防弾仕様のトライクもワトソンに長期貸出中だという　ヤツは車を持ってるのに　明らかに、俺の足を封じにきてるぞ
小さいな　アイノ　こういう外堀の埋め方か

夜　俺は自宅のノアールで1人――
特に趣味と言える趣味も無いので、拳銃の完全分解整備などをして時を過ごしている
今は合欠た　故障したら修理にも出せないからな
アリアは女子寮だし、キンジは神社だしな　1人、か
銃は通常30、100個の部品から成るか、俺のヘレノタとDEは改造銃なので多いなのでバラ分解となるとブラモ並の難しさがあるし、一つ一つの部品の状態を確かめてクリーニングしていくと、それなりに時間は潰せた
ほぼ整備を終えたヘレノタの銃身刻部に、改めてフランネル布でオイルを付けつつ　―
つい考えてしまうのは、ワトソンの事だ。

キーくん　怖い顔
耳元で囁かれた、そっと鎗を転がしたような声にハッと振り返ると
真横に、理子がいた
「理子か……お前はいつも神出鬼没だな」
「抜き足差し足で入りましたー　いつ気づくかなー、って思ってたけど
きゃは、と笑いながら顔をこげ、理子はPCブースのうしろにある回転イスにポンと座る
そして、コロコロとイスを移動させてきて俺の横に来た。
いつもの改造制服で――耳元には、どこかで見覚えのあるイヤーリングをつけている
わぁお、キーくん　ひとりぼっちで寂しく銃の整備ですか？
理子はチェリー　みたいな飾りのついた靴、の足を床につけ、くり、くり、と左右に体を
少しずつ回す。
その動きで　ヒラヒラのスカートや緩いウェーブの髪がふわ、と空気をはらみ
ふわ、ふわ、
と、バニラみたいな甘い香りが漂ってくる
鬱陶しかったので、拳銃のチェックに戻るとー
キーくん、ひとりぼっちだ」
「優しそうな　同情なんていらないぞ」

アイノが俺の事を気に入らないのは、直で言われたから分かってるが
ワトソンは何らかの理由で、俺を離れようとしてきている
アイノは俺の弱点　社交性の乏しさを突いて、孤立させてきた
同時に、金で動く武偵高生徒の特性を使って、平賀さんや武藤のサポートを取り上げにかかってきている　だが俺は、金を積んで取り返すこともできない
これらの行為に、俺は　切打れできない状況だ
俺は独りになりつつある　少しずつ　アイノの策略によって
まあ　前置きの海難事故以降、俺は武偵高そのものから距離を置くようにしたし、そのせいでネクラってアダ名されてるくらいだし　孤独には、慣れてるけどな
たか、アイノのやり方は気に喰わない　そこは腹立たしいぜ
男女を乱するような言い方で好きじゃないか。　ワトソンの奴　男のくせに女の扇ったようなやり方をしやがる。
俺が嫌いなら、男らしくケンカ売ってくれればいい　それが武偵高、いや、日本中の男子高校生同一の一道だろ
そん時ゃ、買ってやるぜ
優秀なアリアを独占したいのは分かるが、ここまで俺を排斥するかあの　脅威、共との戦いを控えたいまは、仲間割れ、こそ絶対にしてはいけない、ことくらいよ

「働くなー　理子そんなつもりじゃないもん
「そんなに頬を膨らますなよ。ガキっぽいな」
えへへぇー
俺のあぐら行けオーラなんかお構いなしに、理子はポッケからPSPを2台取り出した
そしてその2台を　拳銃のように、ちゃき、とキッチンの方に向ける
その時丁度、チン、と電子レンジの音がした。
「　」
はいキーくん　レンンが回ってる音にも気づかないくらい、没頭してましたねー
本当だ。
お前には負けるよ　少し、根を詰めすぎてたみたいだな」
幸福も終わったみたいだし、理子とおへんと食べながらゲームしよ　あのね、あのね
私限定くりこはんオマケ売ってたの　カップル特典でスクラッチカードもらえるから、2つ
買っちゃった。1つ、カレシのキーくんにあげる」
なんとかいいつつ、理子は改造銃座の背につけた人をなリボンをフーフーさせ、レンンの
前に行き・・あちち、あちち、と熱いでレンンからコンビニ弁当を2つ取り出してる
カレシについて　まあ、いただくよ　野戦食も食い飽きたしな
キーくん、エースコンバットで対戦よ！　食べながらでよ！　負けないんだからね！

理子はソファーのテーブルに弁当を持ってきて、ぱふ、と俺の隣に座り、PSPを1
方押しつけてくる
あ、これ、俺のPSPじゃねーか　いつの間に取り出してきたんだ
というかお前　ソファーのテーブルで食べるつもりかよ　こぼしながら
（相変わらず、自由なヤツだなぁ……）
いつもみたいに　お行儀が悪い　めっ！」と怒る（とらる）かいないと、途端に足を
伸ばすんだよな。理子は。
俺は理子の奔放さに、久々に――笑った。微苦笑だけどな。
……というワケで……
俺と理子はソファーに掛けたまま、栄ゴハンを食べたり、〈サイレの撃ち合いをした
温かくて違和感のある食べ物を食べたり、機銃掃射ルールで空戦を繰り広げたり、肘に
ツンツンをしたりされたりした
現代の戦闘機を使って空戦をするこのゲームには、俺も腕に覚えがあったが
理子は機体を旋回させる時　くいっと体をその方向に傾く子供みたいなクセがある
しかも、俺の右、真っ隣に座ってるから……
ぐぬぬぬー！　よし後ろを取った　逃げるなキーくん！　きゃはは！
あ、おい、左旋回するなっ。

理子は俺を押し倒すような勢いで、傾けた体を押しつけてきやがる
すべすべした腕が俺の腕にぺったりくっつき、スカート越しには弾力的な腰が押しつけられ、甘ったるい香りのするマロンブラウンの髪が、か、顔にかかる。首筋もリボンやテールにくすぐられて、くすぐったい。体が右側から理子と融合していくみたいだ
こ、こらー　シャマすんなっ、髪で両耳が見えねーたろっ
「おりゃー！　おりゃりゃー　墜ちろーッ！」
理子は純粋にゲームをしてるので、色っぽいムードではない。従ってヒステリア的には大丈夫そうだが、これしゃあ操縦かままならん。理子機の追尾を振り切れないそあ、ああ　もう復活回数が無いのに　またやられた
ばかん、レ地表に追い詰められた俺の上11が墜落させられて――
はい　これで理子の12勝　キーくんは2勝12敗ー！」
ときっ、と力の抜けた俺は左へ倒れ
そのまま、理子は俺をフトンか抱き枕にするかのように覆いかぶさってきた。
くふふっ　キーくんは弱いのう！」
むにゅ、むに、と理子のやらかいあれこれが体にくっついてきたの――
「お、おい。どけ……って」
さすがにこれはマズい、と思った俺は理子を押し退けようとする

胸の下に抜けるように、体を起こした理子は、
あ、キーくん　ごはんつぶついてる。」
俺の顔を至近距離から見て、俺のほっぺ――ひっ、と本当についていた米粒を取った
そして、ぱく。
それを食べてしまう
「――」
俺が気恥ずかしそうにすると、理子は「いいこと思いついた」って顔になって、笑顔でテーブルの弁当ガラから米粒を取り……ぴと。
やま　ん、理子にもついてるう！」
自分のほっぺたに米粒をつけて、ウルウルしたお目々でこっちを見上げてきた
……どうせ、「取って食べて。お口で直接」とか言うんだろ。
「キーくん、取って食べて♪　お口で直接取って？」
ブイっこポーズで予想通りの事を言う理子の額から、ピン
俺は米粒を、指で弾き飛ばしてやった。
「みゃ！」
理子が目を×印にして上体を起こすと――ぶるっ！
小柄な身体に似合わず重量感のある、プリンのような胸が跳ねるのが見えた

その動作で、俺の顔は2つの立体の影に一瞬隠れてしまうほどだ
あ、相変わらず　け　からん体をしたヤツだ　そういうところだけ発育しやがって
アリアのちっこかわいさと、白雪のむっちりしたグロボーションのいいとこ取りをしたような体型だな　理子ってヤツを、改めて間近に見ると
よくよく見れば、最も危険なヤツかもしれん　ヒステリア的な意味で
「んー？　もぉー、どこ見てんのー？　このスケベぇーー」
理子は本気としていた俺の顔面を、ぽこぽこ！　嬉しそうに叩いてくる。
お、おい、罰ゲームはノーヘルろ　顔なんか叩くなっ」
なんとか理子のトから逃れ出た俺が文句をいうと、
もーレか変わりまったー　今からはどう叩いてもいいのです　」
なとニサ・理子的な自分勝手をい出すので——
キレた俺は本気を出し、次の先戦では敗闘の末　理子を撃沈してやった
そして負けた途端、さっきのレ変更は再変更！　元に戻しまーす！」などと言って
逃げる理子に今キレを超えた超ギレになり　ン捕まえて脇に抱え、フリフリスカートのオシリをペンペン、いや、ベシベシ叩いてやるのだった
などと……バカをやっていたら、すっかり遅くなってしまった

時計を見ればもう0時だ
明日は学校もあるし、早く寝ないとな。
と、シャワーを浴び、パジャマに着替えてリビングに戻ると……
またソファーでゴロゴロしてた理子が、掃除をついてこっちをニヤニヤ見てきた
なんだよ」
ん、ねむい
「俺に言ったってしょうがないだろ」
ねむい
ハタハタ、と、理子はハタ足
「じゃあ寝ろよ」
ねたくなーい
とうしろのーんたよ
赤ちゃん返りしたような甘え声でむずかる理子に、俺は深い溜息をつく
「おしゃべりしたい」
「何を喋るんだよ」
「何でもいいよー。おしゃべりしてたい。ずっとしてたい」
「断る。俺はもう寝るぞ」

と、俺はベッドルームのドアを開け……
寝室が寒いので、リビングの温かい空気と対流させようと思って、開けたままにした
「でもまあ……今日は、ありがとうな」
2基ある2段ベッドの右下、自分のベッドに座りつつ――
さっきまで気恥ずかしくて言えなかった事を、隣の部屋の理子に言う
お酒、俺が最重ふてくされてるから来てくれたんだろ　少し気分が軽くなったよ」
しばらく黙っていた理子は、
それだけじゃないよ」
小声でそう返して、とこ　とこ　リビングからはて、バスルームに入ったよう
シャワーの音がしてる
ここで寝ていく気らしいな
イヤはイヤたか　理子は俺を気遣って来てくれたわけだし、まあ、好きにさせるか
というか、いつの間にかこの2基ある2段ベッドはも！　アリア、左下、理子、右！
自宅、右下　俺と、ここに自由に出入りする4人　内3人は不法侵入たがこで使い分けら
れてしまっている　それぐらい、理子は勝手にここで寝泊まりしやがるからな　追い返す
にも、今さら感かぬめない
など」と考え、横になってウトウトしていると

ぱちん、とリビングの電気が消える音がして――部屋が暗くなる
とことこ　とベッドルームに入ってきた理子がフットランプを付け　きし
と、俺のベッドに手を突く音がしたので――
「ゆ」
気に、俺が覚めた
振り向けば、パジャマ姿の理子が右側下段　俺のヘ　ドにもぐり込もうとしてる
「お、おいッ。何だよ。お前は左下だろっ」
あ、間違えちゃった♪　そして、間違いは続きます！
ベロッとT を出し、自分をコツンと叩いた理子は　きっ
そのまま、膝も乗せてくる　俺のヘットい
お、おい。
なんだこれ
逃げようにも、このヘ　トは理子のいる側からしか出入りできない
慌てた俺は、壁の方に体を寄せて逃げようとするか　それが逆によくなかった
むしろ理子に、ヘ　ドにかぶってくるえへースをりえてしまったような形になる
それで案の定、ぎしっ……と、理子は上がってきてしまった。
何やってんだ俺。自爆もいいとこだろ。

まるで「入れ」っていうような動きだったじゃねーか。今の。
「せ、狭いんだから入ってくるなッ」
「……今日、誰もいないし」
と、鼻にかかった色っぽい声を出した理子は――
いつもの綴い笑顔しゃなく、切なげな目をしている
――いきなり人ヒノチたそ　俺　瞬で追い詰められた
このへ　ーから逃るには、理子の力から出なきゃならない　かか力くでしようにも
逆に力尽くで来られたら　あのへヒみたいに動く髪の性力で押し倒されるだろ
とうすればいい　頭が真っ白た　どうしくて体を起こす事もできん
たがこのまま黙ってたら、何をされるか分からんそ　今日は理子がうとおり、理子が
俺に抱きつくのを妨害してくれる支援戦闘機もいないんだからな
駄ってたらダメだ　押し切られる　な、何か　え、俺
やばい、マシで何かいわないと――
と、テンパった俺は、
「お、おい理子　ハンヤマ裏返しだぞ
と、つい気づいた事をそのまま言ってしまう
いや。いやいや。キンジ。そこじゃないだろ、今ツッコむべき点は！

「あ、ホントだ」
ふたえの大きなお目々で自分のパンツを見た理子は、顔に手をかけ、いきなり！
――ぬぎっ――
一気に、まくりあげやがった！
「――！」
すんでの所で、俺は寝返りを打って理子に背を向ける事に成功する
一瞬見えてしまったのは、理子のまんまるな両胸　そのトップ　1ぐらいまでだが
「お、女ってヤツは　寝る時、胸に下着をつけないのかよ！」
お、落ちち、じゃない、落ち着けキング
そんな女子の習性を発見して慌てる場合じゃない
改めてパンツを着直したらしい理子を　なんとか、追い払わないと
「理子お前、その、よせ！　いつもならこの時点で　アリアや白雪にボコられてるだろ、お前。大抵なぜか俺も一緒にだが」
「ここでアリアとゆきちゃんの名前を出しますかぁー」
俺の背中へ、少し笑うような小息交じりに理子がささやく
理子はいいの　キーくんが誰を好きでもいいの　キーくんを好きな女子はみんな、こーハ　なカンジじゃなくかいアノとしたりもするけど　でもそれを好きって、理子に男

を見る眼力があるってことでしょ？」
「な、何の話だよ」
理子は、いいの　理子と2人の時は　キーくん、いつも今日みたいに、今まで優しく接してくれたから　ん・　そういうとこ、やっぱりゆきちゃんがすきー、理子って愛人体質なのかもねー
きこ、と俺の背後でまたベッドのスプリングの音がする　よ、横になりやがったぞ、こいつ、というかお前と白雪は　体、普段どんな会話をしてるんだ
「お、おい。毛布を広げるなって」
「えーいいじゃん。寒いし
なにと理子は俺か体にかけていた毛布の背中側を持ちーげ、中に入ってきて…ま…
「手、冷たくなっちゃった」
俺の後頭部　首筋の辺りで、鼻に掛かった、媚びるような声で囁いた理子は
すぽっ。
俺のパンツの腹の左右についてるポケットに、手を突っ込んできた
体をこわばらせた俺に、クスクス　理子が笑う
お、追い詰められたぞ。ついに抱きつかれた。

「理子ノ、俺の体質――知ってるんだろ」
最後の手段とばかりに、俺は何とか冷静を装って警告する
HSSのこと。キレ〜んは、ヒステリアモードって呼んでるんだっけ。
「そうだ　俺はカナと違って、あれに　度なると自分では制御できないんだ　あれは元々、女をガって、魅力的な男を演じて――その、今の事態が事態だから　子孫を残すために備わってるものなんだぞ」
「しっ・て・る・よ」
顔を俺の頭に寄せた理子が、シャンプーの香りと共に囁いてくる
「じゃあ――自分のベッドに戻れ」
もう……必死にヒステリア化を自制している状態で、言葉を取り繕うこともできないぞ。
だが、理子はまだ引かない。
少し厳しめに、最悪の事態を警告しておいてもいいだろう
お前、俺がヒステリアモードになって　襲われたらどうするんだ
と、最後通牒のように告げたのに――
「そん時はそん時だよ」
――理子は平然と、返してきやがる。
なんてヤツだ。もっと自分を大切にしろよ。

あと俺のこともだ　頼むから警告を聞き入れて、退散してくれ
「でもヒス化されちゃうと、ちょっと困るかなー　理子の考え、裏の裏までぜんぶ見抜かれちゃいそうだし　だから　ならないギリギリのとこで理子とイチャイチャしよ」
「だから、そういう制御が自分ではできないって……」
「だいじょーぶー。ヘンな事しないからぁ」
「もうしてるだろっ」
と、俺がポケットに手を入れて、理子の手を取り出そうとした時――
その手を、理子が握ってきた。
そのまま、急に――
（……？）
理子が、俺の手を強く握りしめる。
「お願い……そばにいて……」
そのシリアスな声に
俺は、それまで強く閉じていた目を開いた
理子が
（泣いてる……のか？）
つい振り返ろうとすると、理子は俺の背に顔を押しつけてそれを拒んだ

朝日の中、ぼんやりと目が覚める

「……理子……？」

俺は　腕の中に誰もいない事に気付き、寝ぼけた声で呟く。

やっぱり、理子といたのね　どうりで楽しそうな寝顔してると思ったわ」

アリアの声に、かぱ、と起きると

通学カバンを持ったセーラー服姿のアリアが、腕に手を当てて俺を見下ろしていた

心　失礼なから、胸開をチラ見して　理子の変装しやない事を確認する

極小だ。本物のアリアだな。

アリアは凡々ソリ不気味の目尻を更にソッとげ、細いアンヨを肩幅よりいっぽ上げて仁王立ちしている。

これは……怒ってる時のサインだぞ。

ここで理子といたとか言うと、風穴踊りをやらされかねん

「違う。俺は一人で……」

「ほっぺについた口紅を拭いてから言いなさいよ」

何っ　り、理子のヤツ

と、俺は頬を擦るが——何もついてない

ウソよ　あんた、やっぱり探偵科は向いてないわね

しまった。一杯食わされた。

アリアめ

お前こそ、そういう探偵科的なトリ　クは苦手なクセに　何を必死になってんだよ

「あたしはここの下に理子と擦れ違ってる　それに、ビンゲに、同じお弁当を2つ食べたやつのトレーがあった

更なる証拠を示すように、アリアは俺の枕のそばから　ズバー、と、マロンブラウンの綺麗なウェーブした長い髪を　本ンまみーせ、ぱい、と掲げた

「キンジ。あんた今、なんで隠そうとしたの？

ひきい

と、こめかみにD字の血管を浮き出させたアリアか、きろ、、、ところを見下ろす

こ、怖え　。

完全に詰んだ俺は——

わ、お前が鬼のような顔して聞くからだ　というかお前こそ、ここに来ていいのか？

ワトソンに「われてるんだろっ、キンジの部屋には行くなって

遠山家に伝わる秘奥義、「逃キレー」を久々に発動させた

べ　見ぃ　あたしに、ワトソンの指示に従う義務はないわ

「よぉーく従ってて、来なかったじゃねーか。最近」

「それは――ワトソンが来てから、あんたが急に機嫌悪くなったから……」
「はいはい　何もかも俺のせいですよ」
少しアリアが気弱になった隙を突いて、俺はヘソから抜け出す
そして発砲に備え、防弾制服に着替えていると――
「っていうかキンジ　なんでワトソンの話なのよ　繰り返しになるけどね　ワトソンとあたしは、勝手に決められた婚約者ってだけなの　そんな話、あたしにはまだ早いしパートナーにだって、彼が勝手に『なろう』って言ってるだけ　だから、あんたがヤケになって理子に走るようなことは無くて……」
ぶちぶちとうアリアは、何やら言い訳するようなムードだ
何言ってんだ　ワトソンはいいヤツなんだろ　お前、仲良くしてりゃいいしかねーか」
「いいから。怒ってない。俺に構うなよ」
突き放すように言う中で
俺は自分の中で少し、アリアとワトソンに対するモヤモヤした考えがまとまるのを感じていた。
俺は　今まで、アリアのパートナーとしてイ・ウー絡みの犯罪者たちと戦ってきた
だが、それらの戦いはどれもギリギリの接戦だった。

助けに来てくれなければ俺も　アも、とっくに死んでる　綱渡りみたいなことばかりだった
そこへきて、今度は「帰国」と「香港」の紛争に巻き込まれてる
だが俺には、対超能力者戦の経験がほとんど無い　あんなハケモノ共と正面衝突したら、ひとたまりもないのだ　この間の外堀通りで、そうだったように
なのでワトソンは、威嚇だけであのヒレダを撃退した　ああいう難敵に対抗する高価な武装を備え、専門的な知識も持っている。
これからの戦いに於いては
アリアは、ワトソンと組んだ方がいいんだ
だから俺は、アリアの身の安全のため　無意識の内にわざとそっけなく当たって、アリアを遠ざけようとしていたのかもしれない
それに、そもそも――「ホームズとワトソン」たしな　2人は
だから、お似合いってもんだろう。誰がどう考えても。
「――」
構うな、と言われたのを守るように、アリアは
しょんぼりした足どりで、部屋を出ていった
――今日も、独りで登校か
そしてクラスに行っても、俺は独りだ

あのワトソンレ険悪なせいでな
完全に、外堀を埋められたな
だが、俺の外堀を埋めたとなると、
――ヤツは、動くぞ。多分
昔の戦争しゃ、城の堀を埋めたら次は本丸を攻めたものだからな

4弾　高度350メートルのトルネード

探偵科の授業の後、強襲科の講義室で「戦略Ⅰ」を受講してから帰路につくすっかり遅くなっ一外に出れば、秋も深まってきたせいか、もう暗いなかさ、かさ、と、街路樹の落ち葉を踏んでバス停に向かっているレ隣の通信科、その裏口から数人の女子がキャッキャッと笑いながら出てきたエッシらは、ぽいぽい、と、それぞれ持っていたホウキを通信科の校舎裏　納屋ノ辺りへ、人の林に投げ込んだな　何やっ一てんだ？
なっち、後はヨロシクねー」
なっち、林のむこうからメガホンで言った女子たちは、商店区の方へ行ってしまうなっち一　誰のアダ名だ？
あ、は、はい」
今度は、誰もいないように見えた林の中から声がかさ、こそ、と音だけするから、眉を寄せてそっちを見ると・
誰かが、薄暗い林で落ち葉を掃除してるみたいた
あれは

とうせ帰っても誰もいないし、することも無かった俺は
「1つ貸りるぞ」
と、ホウキを拾い上げ、落ち葉集めを手伝ってやることにした
それを見た中空知は、
あ、あー　いいんです、別に、いいんで　ひっ、ひっく、ひくっ、ひっ、くー！
しゃっくりが始まったらしいそ
いいから。手伝うよ。武偵憲章1条だ」
はひっ、ひくっ、あ、ありがとうございます　ありがと、うございます
ぺこり！
ホウキを抱きしめたまま、中空知は真っ赤な長い髪を揺らして深々と頭を下げる
血でけえよ　なに急にテンション上げてんだ
引く俺の前で中空知はずさ袋に飛びつき、思いっきりしゃがんだ　そしてこぼれた木の
葉を、わしゃわしゃと、と袋に素手で詰め込んでる
やればできるじゃんか　さっきまで緩慢だった動作が、急に俊敏になった
と、俺は落ち葉を掃きつつ……

無防備にしゃがんだ中空知のスカートの奥に見える、むっちりしたふとももから目を逸ら

中空知、か？」
声を掛けると、びくっ
人影は、ホウキを抱きしめるようにして身震いした。
その動作で、落ち葉を入れていた大きなゴミ袋がホウキに引っかかり、わしゃあ、と
倒れて中身がこぼれてしまっている。
「そ、そその、その声は――と、おと、とおやま、おとこ、おとこやまだー！
この残念な噛み方　やっぱり、中空知か
地味で林と同化してたからなかなかわからなかったよ
「一人で掃除してるのか？　さっきのヤツら、掃除当番だったんじゃないのか
俺のせいで袋を倒してしまったらしいので、それは直してやろうと林に入ると
「は、はい、でも、その、私、他の当番の人たちに、頼まれちゃったので、
がさ、がさ、ひと回り大きい内股で俺から後ずさる中空知は
背中が木について「ひっ」と1人でビビってる。
ていうかこれ　頼まれたというより、押しつけられたんだろうな
心なく、あいつら
林自体は狭いか、落葉はベストなので掃除は大変そうだ。
この掃除を押しつけるとか、もう、イジメだろ。

した
あ、辺りが暗くてラッキーだった　明るかったら、さらに奥が見えてたぞ
というか　しゃがむなら、もうちょっと膝を揃えてしゃがめよ
ゃ　日、どうしたんた
視線を、に逃がしていた俺は、中空知の長い前髪の奥にメガネが無い事に気付く
あ、あ、メガネっ　これはその、じゅ、授業で　体調でして、顔にボールが、えと、体育の授業で、バレーボールか、ぶつけられちゃって　メガネが、体調でして、その」
俺に話しかけられただけで、また声順入れ替えみたいな喋り方になる中空知
どうやら、俺の顔面レシーブ仲間かいたみたいだな
「ていうかそれ、敬語　だよな　同級生なんたから、タメ口でいいぞ」
た、男子、お、おとこ　わ、私、その　だ、男子全然、しゃ喋　たこと、全くないから　つい、けっ、敬語になっちゃうんです、すっ、すみません」
かさあ　九月は落ち葉の袋に入り込みたさな勢いで頭を下げる
そ…それに、わ、私、舞いかっちゃって、と、遠山君を、作戦中、カメラ映像こっそたけ、だったから、映画　トラマの　中の人、ああ、あ、なんたような気分で　に、喋りすぎちゃって、話しかけられたら、舞い上がって、しまって、しま、しましま」
あ　もう敬語でいいから　ほら、舞い落ちた葉っぱを集めるぞ」

作業をしなくなってしまった中空知を再起動させつつ、俺はホウキで落ち葉を集め、それをしゃがんでチリトリで取った中空知が袋に詰める役割分担をした
指示さえすれば中空知はちゃんと動くので、掃除はテキパキ進み
「……もう、こんなもんかな。暗くてよく分かんないけどな」
「はい　草と落ち葉が、こすっ、こすれ、る音も、しなくなりました」
と、中空知が袋の口を結んでいるとき
ハバァン
通行人から出て車道を横断しようとした生徒に、車がクラクションを鳴らすのが聞こえた
「ひっ！」
中空知はその音にさえビビって飛びあがり、しがみつくように俺の腕を掴んでくる
（うっ……！）
あ、危なかった　ホウキで殴んだから　瞬で済んだが、ハレ・ボールのような大きさのたらこないカンジの柔らかさをした胸が押しつけられた
俺にとっちゃ鋭利な刃物を突きつけられたのと同じような危険性だぞ　これは
緊迫感のある俺の目と、前髪に隠れた目が合ったらしい中空知は
「あ、あ、い、ひいっ！」
と、俺を意外な怪力で突き飛ばした。

ゴメン　お陰で俺は木の幹に後頭部をぶつけてしまう　痛ェ
ちっち、ちも、違うんですっ！　い、いま腕を掴んじゃったのは、目が合っちゃったのは、違うんですっ！　私が、ヒと、友達の、も、友達なんてしてません
な、何ですか、今度は
ここ、も、も友達なんかしてません　いやらしい事しゃあしません！　そっそこの、林の奥とか　人目に付かない草陰とか　して、して、してません！
林の奥っ　ワケが分からん
「あー、中空知。とりあえず喋るな」
と、俺が言うと――
「！」
中空知は高圧電流でも浴びたかのように体を伸ばした
そ、そそそんな、強引な　！　でっ、でもでも、掃除も終わった事ですっ、これなら、準備にさき、先に敷物を敷きます！　しばらくお待ちくださいっ！」
ばし
リセットスイッチを押すように、ホウキで軽く腰を叩いてやる
ほら　片付けるぞ　終わるまでお喋り禁止　いいな」
俺が落ち葉の袋を持ち上げると、中空知は口を片手で押さえてコクコクうなずき、わた

わたホウキを片付けに行く　喋るな、と言われたのを守ってるらしい
ていうか中空知、車のクラクションでビビるほど臆病で、よく武偵が勤まるな
これはこれで、珍しいタイプかもな　うちの学校じゃ

バス停で、中空知とバスを待っていると……
「と、遠山君、今日はその、ありがりございしました　：」
ありがとうございました、かな？
「いいよ別に。ちょっと掃除を手伝っただけだろ」
わ、私、誰かに、こ、ここ、こういうの、手伝ってもらうの、初めて、でしたから
私、と、友達とか　いないので、ジャンヌさん、くらいしか、い　いないので
……ジャンヌ。
そういえば、どうしているんだろう
百戦会議以降、姿を消したままだが　――心配だな
お前、ジャンヌが今どこにいるか知らないか？」
ダメ元で聞いてみると、
今、ですか　わ、私の部屋に、というか、私とジャンヌさんとの、女子　女子寮の、相部屋していて……いますよ？」

「え？」
「先週、夜、私に電話で伝報をしてきて　今朝帰ってきて、欠席してました、子校はケガをしてたので。部屋に、いまいます」
ジャンヌ。
武偵高に帰ってきてたのか。
しかし、ケガとはな。心配だ。会いに行かないとな。
たか：ジャンヌは、どうやらこの中空知とルームメイトらしい
とこの部屋か知らないので案内してもらいたいが、それはつまりこの人に　お前、部屋に入れろ、ということだから、言い方が難しそうだな
ちょっとレー事にあわないと、また語順並べ替えクイズをやらされる
「中空知、ちょっと頼みがあるんだが……」
「た、頼み、頼み、た、ダメですっ、お、男の、男の人の頼み　がかが、ぴゅい」
いきなりこれた
わ、私、頼まれると、イヤと言えない性格、ですので　や、やさしくっ」
「じゃあ都合がいい　頼ませてもらうか」
「そ、その前に、き着替えを　お、おトこ、着替えさせてください　特に下を」
「まだ何も言ってないだろ……」

という状態から、ハスに乗り、降りるギリギリまで意思疎通に時間を要したが：
俺は何とか、第3女子寮にあるシャンヌと中空知の部屋に行くことができたのだった
X脚の膝をガクガク震わせている中空知と、部屋に1歩入ると——
うお：：
と、声が出てしまうくらい、中には弩級機器がビッシリ集められてあった
ラックに積まれた無数のスピーカーや高そうなアンプが、黒い机を半月形に囲んでいる
事実上の防音壁には、色とりどりのヘッドホンが家電量販店みたいにブラ下げられてる
ラジオ局のミキサー室のような装置に加えて、室内には更に古今東西の通信機が整然と並んでるぞ　処理用のPCや無線機だけじゃなく、携帯電話も30機種くらいあるな
アクセスランプが全ての所でピカピカし、電子機器のニオイがする室内で　密閉されたこーんと活かれたミニ観葉植物たちが、女子の部屋っぽいといえば、っぽいな
というかあの双葉の鉢　トオヤマクン、って書かれた小さなプラカードみたいなのが立ってるんだが。そんな植物あったっけ。
俺がミニ植木鉢を見ていると　「」と飛びーがった中空知は、がばぃー　とヘッドホンのささ箱で植木鉢を覆って隠してしまう
ちっちっ違います　わ、私、こよ、植物に話しかけたりとかはしてません　そっ、そこまで孤独じゃありませんよっ：　わ、それに、そっちの部屋には何もありません
不測の事態に備えて買い溜めした　ふ、不埒な下着とか、お酒はありません
いや　別にガサ入れしに来たワケじゃないから　それより、シャンヌは
「ジャンヌさんは、そちら、ですっ」
トオヤマクンを背にした中空知が、ぴっ、と指した扉は　そこだけいきなり、古風で洋風の装飾がされた本目調のドアだった　説明不要で、シャンヌっぽいカンジだな
きぃ
と、ドアの向こうに入ると、明るい。
確かに、いるみたいだ　姿は見えないが
マホガニ　の机　古風なカス燈みたいな形のルームランプ　なんたか　流へ業の事役室とか、政治家の執務室みたいなシックな装飾がされてるな　中空知ルームとは大違いだ
本棚には　フランス語や日本語の、歴史書と思われる書物が並んでいる
「勉強家だなぁ、アイツは……」
と思って1冊抜き取ると、その革表紙の本の向こう、奥にもう1冊、こん：：
少女マンガが隠されてあったぞ　それも訳ありっぽいやつ
少コミ、マーガレ　ト、別フレ、花とゆめ　くらい　シャンヌ、こういうのも読むのか

ちょっと意外な一面を発見だな　女っぽい部分は、奥に隠してるわけか　あいつらしいよ
ごそ　ごそ
気配に扉をノックすると、奥にもう一部屋あった　シャンヌはそこにいるらしい
そうだ、笑ってる場合じゃない。
ジャンヌ「春風」を追って、ケガをしたらしいが　大丈夫だろうか

ケガが重くて寝込んでたりしたら、騒がしくしちゃいけないな
と思って、ノー　レトアを開けると　中は細長いL字部屋で、大きめのウォークイン・クローゼットとして利用されているようだった
だが――な、何だこれ。
そこには　ヒラヒラ、フリフリ……赤、白、ピンク、水色……チェック、ストライプ、ハートのプリント柄　のトレスか、ズラリと奥まで並んでるぞ
これは　理子に強制的に着えさせられたが、ロータファッションだ　それがまるで服屋、それも卸し所のように集積されている
（理子から預かったのか……？）
とも思ったが、ここの服は理子よりサイズが大きい　もっとスラリとした大人用の服だ
よくだけて頭や手足に掛かってくるリボンやレースを掻き分け、ロータのシャンデル

を進むと　いた
縦長い部屋の　番奥、ロココ調の彫刻で縁取りされた姿見鏡の前、シャンヌが
変装衣装向けに代用の俺がクンをリ　トルーム・カフェアプアのロゴ入り
ウェイトレス衣装を着てモデルウォーキングをしながら　キリッとした表情で鏡を見ている
引き締まった長い美脚を目立たせるすハ二ノクスを履き、腰に手をあて
カッコよくポーズをキメている。
フフ　やはり良いな

ひし、レ膝に片手をついて上目遣いになったり、微妙に振り返って背中が大きなオープンな
調整したり、トろしている長い銀髪をファサァと手で靡かせてみたり
何……やってんの？
ていうかシャンヌ、元気しゃねえか
フィ――私はこんなにも、愛らしい――フフィ」
声を
かけるに、かけられないぞ
1人で、ファッションショーやってる。
獲物を狙うピューマみたいな状態になった俺が、レースの集まりの間からターゲットを

見ていると、満足したらしいジャンヌはカチューシャを直しつつ、
フフ　まさか、皆の前で堂々とこれを着られるドが来るとはな　死々持っていたとは
情報科の連中も思うまい　遠目のヤツ、最高のクソを引くものだ　でかした
などと独り言するので、
「はあ」
と、つい声を出してしまった
びくっ
と、俺の声を聞いた銀氷の魔女・ジャンヌが凍り付く
鏡の中の俺と目が合うと、そのまま心停止したみたいに動かなくなったぞ
ジャンヌ　まず1つ　元気じゃねーか　中々知が、お前がケガしたっつーから心配した
んだぞ　それともう1つ　なんだこれ　全部お前の私物か
ヒラヒラの森から1人フェ　ンョンョー会場へ移動した俺が言うと
ようやく動き出したジャンヌは、ばし、とこい指の両手で額面を覆った
お……おしまいだ……」
そして、へな、へなへな
スカートをふんわりさせながら、膝から、悲劇のヒロインのように崩れ落ちていく
「……何がおしまいなんだよ

執務室みたいなりの部屋で、吊り張りの黒ソファーに座って待っていると
制服に着替えたジャンヌは髪をピンクに染めたまま、仏頂面でコーヒーを淹れてくれた
こっちの部屋にも大きな鏡がある　ジャンヌは好きなんだな、鏡が
言っておくが、私は自分でも分かっているからな」
お嬢様っぽく脚を揃えて座り、長い脚を傾けてジャンヌがいう
「何をだよ」
ああいう女には似合わないという事が、だ
本当に心の底から恥ずかしそうに、ジャンヌは一瞬俺を見てくる
あの子のトレスは、理子のような派手な少女が着ることで愛らしくまとまる　たが
私はこの身長だし、幼い頃から月のように育てられてきたから――合わないのだ、本来
しかし、そう思えば思うほど・・なぜか、私はああいうトレスに憧れを　一
あー
まあ、なんとなく分からないでもないな
人は、自分に無いものに強く憧れる習性があるからな
それでそれか、理子の影響もあって　似合わないと分かっていても、着だけと思って
日本の原宿で買ってみたら・　それ以降すっかりクセになって、ご覧の有様だ　ハハハ

：：遠山　お前は・　見てはならない物を、見た　生かして帰すワケにはいかん」
――ちゃき、
ジャンヌは涙目で、背中から魔銃を取り出した
おっ、おい　そんなカッコでも武装してたのかよ」
俺に裸でも見られたかのようなノリのジャンヌが持つ銃を、慌てて掴む
手に力が入らないのか、あっけなくジャンヌは銃を放してしまった
「こ、この部屋を見た者はいない　ここは私だけの秘密の花園だったのだ　理子にも、
秘密にしていたのに
涙目になり、わなわなな手を震わせるジャンヌの――
カクテルエプロンの裏側から、今度は拳銃がこんにちはした
わ、分かった　内緒にする　秘密にする　だから撃つな」
「約束するか　誰かに話したら、お前を今度グラタンにするぞ
約束する。というか人間はグラタンになれん」
と言った俺にジャンヌは、はあ　と憂鬱そのものといったカンジの溜息をつき、
こんな所で発砲したら、服に一斉に穴が開くしな……」
と、銃を収めてくれた
というか俺の命より服の穴かよ　まあ　それで助かったんだから、お子様なんだか

私は可笑しい女だろう。笑わば笑え。ハハハッ……」

などと壊れ気味の笑いすら漏らすので

「い、いや、笑ったりしない。可愛かっただろ」

服が

「か、可愛い……」

俺の言葉が意外だったのか、ノヤンスはアイスブルーの瞳を丸くする

んっ　あ、ああ

服が

「お前はヘンなヤツだな　センスがないぞ」

とそっぽを向いたノヤンスは　耳に向かって、ちょっと嬉しそうにヤケるのを我慢してるような顔になったぞ。

よ、良かった。

とうやら今の俺は、ノベルゲームでいうところの正しい選択肢を選んだみたいだな

ようやく本題に入れそうだ

ところで　その、お前、どこへ行ってたんだ　自戦会議の後

「――『眷属』らの動きを追っていた。ずっとな」

ヤノらはどうしてるんだ　ここからだと、全く動きが見えないんだが」

「皆それぞれの本拠地にて、機会を窺っている　すく動いたのは、ヒルダくらいだ

私もヤツと接敵した　実は酷く感電させられてな

「ケガってそれか。どこだ」

「見たところでは分からないか、ダメージか全身の膜に残っていて手足に力が入らないのだ

おかげで、半月は戦闘に参加できなさそうだ」

たからさっき、俺にすら簡単に剣を取られてしまったのか

ヒルダには俺とアリアも襲われたぞ　何とか無事だったかな

理子から聞いている　だが安心しろ　ヤノは、ひと月もすれば東京にはいられなくなるから

多分か小眠不休で鬼払結界を広げているからな　ヒルダは既に、学園島　空き地島　、場

島、豊洲から東京ウォルトフロント辺りまでの湾岸地帯には立ち入れない　北海道からの一角しか保たないらしいか、十分の鬼払結界は強力なものだぞ」

「キバライ……結界？　何だそれ」

分かりやすく言うと、鬼が侵入できなくなる領域を作っているのだ　人体には無害だが、結界内に鬼の類が入ると　そうだな、人間でいえば多量の電気が電線を流れているような状態になる」

「な、何か　凄い事を始めてるな　永田町で」

「今に始まったことではない　東京はそもそも、ローマ、香港に次ぐ退魔性の強い都市だ

上子線と中央線が鋼鉄の陰陽太極図を描いているから、その円内であらゆる魔物が弱まるのは有名な話だしな」

ちっとも有名じゃねえよ。

何年も東京に住んでるのに、初めて聞いたぞ　そんなS研的な人仕掛け

「　ところでジャンヌ、どうする　『師団』と『幹城』の件　アリアにも話すか？念のため、まだ話してないが」

そうだな　アリアにはギリギリまで黙っておこう　性格から考えて、知ったら攻撃に回りかねない　上藻の結界もある事だし、この戦い、防戦の方が有利だからな」

「俺もそう思ってたよ。白雪はどうする」

「上藻の判断を待とう　お前のような超能力戦の素人が不確かな情報を伝えて混乱させるのは良くない」

「それも……そうだな。専門家同士、よろしくやってもらうか」

と、俺がコーヒーを飲み終えた時

ジャンヌの携帯が、鳴った。

「……中空知だ」

中空知って　中空知は隣の部屋にいるはず」

不思議がる俺はさておき、ジャンヌは携帯に出てしばらく話している

うむ　分かった　中空知、少し待て　亜夜、お前はこの部屋に残れ　お前を見ているとそれだけで知は本領を発揮できなくなる　彼女とは、この携帯で話せ」

「どうした　先週　中空知に何か依頼したらしいが　それか？」

「そうだ。転入生の会話を盗聴させている」

「転入生？」

「エル　ワトソンの事だ　私はヤツを疑っているのでな」

「――ワトソン――」

ジャンヌの言葉に、俺は目を見開く。

「お前もどうやら気づいているらしいが、ヤツの動きは不自然だ　それで経歴を洗ったあれは間違いだ　この名は『西欧忍者』――秘密結社リバティー・メイソンでは、有能な諜報員として勲章も授かってるような男だ」

「アイツ……」

私は、そういう姑息な活動をするヤツは嫌いだ　それに硬式テニス部で、私の支持者が随分ワトソンに鞍替えしたらしい。それも気に食わない」

姑息な仕事　って、盗聴は姑息じゃないのか？

しかも何か、女子の人気をワトソンに取られた腹いせっぽいカンジもするが　それは

言わないでおこう　シャンヌがはワトソン派なのは頼もしいからな
遠山　これを聞け　ヤノは動いたらしいぞ　アリアと、対　で話してる
そう言われた俺は……
中空知の部屋に入るシャンヌから携帯を取り、急いで耳に当てる
少し中空知の部屋を覗くと　集中するためか、中は暗くされていた
インカムを付けた中空知は、通信機器や音響機器の上部板が放つ黄緑や水色の光で顔がチカチカして見える状態だ　機器のディスプレーでは音域ごとに分かれたレベルメーターが何本も並び、それぞれせわしなく上下している
その横でシャンヌもインカムを付け、中空知が両手で操作するイコライザーを見ているよく見ようとはせず、エレクトーンでも弾くかの様に、足元でも無数のヘダルスイッチを踏んでいる。まるで、音の海を泳いでるみたいだ。
「今　中内です　台場1-9-1　ホテル・航東京3階、コンチネンタルレストラン、アラス・オン・ザ・ヘイ　個室に入りました　室内の会話音声、比較的明瞭。さっきとは別人のようにシャキッとした、女子アナみたいな中空知の声が聞こえてくる
中空知は、通信機さえ介せば普通に喋れる変わり者なのだ
そんな所に……盗聴器を仕掛けたのか」
「いいえ　女子寮の時に設置した、極指向性のレーザーマイクに集音しています

半径3kmほどの地点であれば、特定した人間から声をモニタリングできます」
「さ、3km　凄いな　3kmもの中内にいる人間の話も聞けるのか」
「可能です　窓ガラスに伝わる声の振動を元に、音を増幅します　室内の会話音声、明瞭、回線に繋ぎます」
凄いな……科学の力も。
台場のレストラン、それも個室の会話が、ここに筒抜けかよ
超能力とほとんど同じだな　俺から見れば
「…それで、メヌは何て言…てたの？」
距離があるせいか、少し雑音が混ざっているか、
聞こえてきたこのアーメ声は、確かにアリアた
「、ントンに寄った時、メヌエットさんは　お姉様の　をよろしく、って言ってたよ
あの子ったら？　妹のくせに、1から目線な　から　あと、トランプの罰ゲームは、また継続中ですって」　相変わらずね　やらしいんだから　ひねくれてるわ」
ワトソンの声と、アリアの声が交互に聞こえる。
微妙に途切れ途切れだが、アリアの妹の話をしてるみたいだぞ
ていうか、いたのか。妹
今年　緒に暮らしてたのに、俺には　度も話した事がないぞ　妹の存在すら

まあ　俺も兄さんの事を隠してたから、人の事は言えないけどな
何かはいづらい特徴を持ってるとか、何が悪いとか、そういう妹なのかもしれない
それにしても　妙な不愉快さがあるな　アリアとワトソンが、自分たちしか知らない
共通の話題で話してるのは
――着席するようです　ワトソン側、足音」
中々知か、集中するように努く
「――足音に、違和感　有益な情報ではありませんが、気づいたので報告します　どうも、
ワトソンは体脂肪率が高いようです　27%と思われます」
中々知　この雑音だらけの音からでも、そんな事まで分かるのか
音響捜査をさせると、本当に天才的だな　人間誰でも、つは取り柄があるもんだよ
しかし、体脂肪率27%か　それは多いな　強襲科をやめた俺でさえ　15%だからな
ワトソンのやつ、隠れ肥満ってヤツなのかもな
「――アリア着席。ワトソン着席」
「「　が　イギリスに帰ってこないのは、どうしてだ　ボクは明日にでも、婚式を
あたしには、そういう　考えるのは、また早いわ　「なぜ戻る　他に、婚約者でもいる
のか」
「――アリア、沈黙中」

中々知の丁寧な解説が入る
「「どうした　他に婚約でもしたのか、アリア」」
同じ質問を繰り返すワトソンと、黙るアリア――
「――います　アリア、「婚約」と聞かれるたびに心音が大きく高鳴る　その他、身体的
反応あり　特定の、強い好意を持つ男性がいる女性の反応です」
中空知が断言する。
そうなのか
ワトソンの他にも　いるのか　婚約者　アリアはアリアで、モテるしぃね　か
それも、俺には話してくれてなかったけどな。
「「アリア　キミはホームズ家では厄介者みたいだが　ボクと結婚してワトソン家に
入れば　もう　ワトソン家は金融で成功して、今や、ホームズ家よりも格上　から
見返してやれるんだよ　それに仕事も、ロンドン武偵庁の切り込み隊長なんかしゃ
こ…ワトソン家の一員になれば…の、幹部として…」」……」
と説くワトソンと、黙るアリア　か、続く
俺の中で、何かが募っていく
それにワトソン家は、日本の政界・法曹界にも　キミの母親の裁判も　「
「――アリア、「母親」、「裁判」の部分で心音に変化　発汗」

「……なら　書類のようだけでも　どうかな、アリア」、　少し、考えさせて」

おい

考えさせて、って。

それって、ワトソンと結婚するってことかよ

「中学知　その　アリアは、本気なのか。その　結婚、の件　、

「本気です。ただ、語調は　一同年代の女性の音声データと憶から類推する」　何か、

自分を犠牲にしてでも守りたい物がある、そういった語調です」

本気なのかよ

アリア

――お前、ワトソンのものになるのか

（アリア）

その時、俺の体に

ドクン！――

これは・

何か　……

ドクンッ――

叩けつくような、鼓動かまった　度　度　それが続いている

どういう事だ。

この、頭に血かーり　何も、考えられなくなるような感覚

ヒステリアモードにも似ているが、違う

もっと強猛な感情に、自分が呑っこまれていくのが分かる

――奪い返せ

と、言うような声か　自分の中心・中央、その奥底からあか聞こえてくる

（これは……！）

思い出した　これを、体が覚えていた。

イ・ウ　で　シャーロックにアリアを攫われた時と同じた

ヒステーア・ベルセ

兄さんが教えてくれた、派一系のヒステリアモ　ト　その　つ

女性を一守る一重常のヒステリアモードとは異なる、「奪う」ためのリ

こういう状況で自分以外の男に向ける敵対感情か、コイノを開く、トスロい鍵、

ツ……！」

俺は壁に寄りかかり、胸を掻き毟るように押さえた

もう――止められなさそうだ。この、血の流れは。
確か、ベレセは　危険なモード　戦闘力は通常のヒステリアモードの1・7倍に増大するか、その代わり・思考が攻撃　辺倒になる　いわば、諸刃の剣――だったか？
　たか、それが何だ
もうそんな事、どうでもいい気がしてきた
どうでもいい、何もかも
逆に、今までの自分の不甲斐なさを呪いたくなる
なぜ俺は今まで、アリアに近づくワトソンを放置　ていたんだ
ワトソンに、口の方は悪いが――アリアのパートナーの席を、譲るつもりだったのか？
確かに、ヤツは俺よりあらゆる点で優位だろう。
これからの戦いにも対応できる　見た目も美形だし、成績優秀で、大金持ちだが、それが何だ
アリアは、俺のパートナーだ
横取りしようってんなら――ワトソン。
男らしく、俺と戦え
アリアを　巧みに騙して、横から掠め取るようなマネはするな
そんなヤツに、アリアは渡さない。

――そしてアリア　悪いな　今回は、お前に対する気遣いも無しだ
奪うぞ。お前を。
思い出してみれば、俺がレキにムリヤリ組まされた時　お前も　度、同じ事をやろうとしたからな　学園島の駅で
俺も一度、奪い返しにいかせてもらうぜ。
「遠山、どうしたッ」
いつの間にか近くに来ていたジャンヌに肩を掴まれて――
俺は、耳からジャンヌの携帯を離してしまっていた事に気づく
俺の思いきか普段より、ヒステリアモードの時より鋭くなっているのを見たジャンヌが
何かを言おうとしたので、ハッ、と、その口を右手で押さえる
すくさま背後に回った俺は、銀髪の後頭部を自分の胸に抱き寄せながら
ジャンヌを、中空知から見えない角度まで連れ込んだ
「ウノ　ノッー
鏡に映るジャンヌは俺に抱かれ、身悶え　ているが
やはりまた体に力が入らないらしい　なされるがままだな
お前、しばらく気をつけろよ　今の俺みたいな男に、こういう乱暴をされないよう
「ジャンヌ」

俺は左手の指で、氷のような色をした髪の間から白い片耳をそっと探り出す
耳に触れられたジャンヌが、びくっ、と身を震わせるので――
「声をうわずってるな」
その耳元に、低く囁く
中元知はヘッドホンをかけ　盗聴に集中してるからな　数秒　様子を見てもこっちに
気付かないようなら聞こえないらしい
鏡の中のジャンヌがまだ動こうとするので、俺はとっさに腰も抱き寄せる
「！」
また耳元に口を寄せられた自分の姿に、ジャンヌはアイスブルーの目を見開いて
頬と耳を、じんとピンクに染めていく
思い出させてやるように、手を口からどけて　それでも、薔薇色の唇に人差し指を
当てて、静かに、のジェスチャーを続ける俺に
「――っ、遠……」
空気を読んだらしいジャンヌは、無声音で返してくる
「ふ、武偵が男女の逢い引きを盗聴した経験で　劣情を催すな　と、隣には中元知も
いるのにな　私は知らないから確認は無いが、お、お前を落ち着かせようにも、おそらく
声を出さないほど器用ではないっ　い、いや、それ以前にお前はＨＳＳ――

そこまで小声で言ったジャンヌの耳元に、また俺が囁く。
「その通りだ」
「ど、どっちの通りだッ」
「今の俺はＨＳＳ――ヒステリアモードだが、これは変わり種らしくてな　少し外出し
たくなった。携帯はこのまま借りるぞ」
「外出……？」
中元知には、通信で状況を伝えさせ続けろ
ヘッドセレ俺はジャンヌを解放し、ヘレ　タヒ――Ｄヒの押食も確かめた
ジャンヌは、つ頷くと、ヘルセの俺かよほどショノキングだったのか　へなへな、と
その場に座り込んでしまった
おいおい　俺よ
とうすんだ、これ
ジャンヌには後で絶対、あれは何だったのか　とか怒られるぞ
というか今さら気付いたが、ヘルセの俺は通常のヒステアモードとは対照的な
女子に対して、強猛だ　乱暴とも言える　まるで、肉食動物
こういう動きがアリアにも出ない事を祈るのみだぜ。
肉食獣同士が噛み合ったら、穴だらけの血まみれになるからな　おりい

「――ワトソン、続いてアリア、移動　アリアの歩き方に変化　若干、いわゆる千鳥足のようです　エレベーターに移動　下り　扉が閉まります　音声途絶　――」

ワイヤレスLANで接続したインカムから、シャンヌの携帯を通じて中空知の声が続いている。

もう盗聴音は、素人の俺には雑音だけに聞こえる

中空知はその中から、僅かな音を拾ってアリアたちの動きを教えてくれているのだ

自室に戻って予備弾倉と、一丁だけでも無いよりはマシのこのオモチ　を持った俺は――

武蔵の手助けが得られないので、仕方ない、自分の自転車に乗っている

時刻は22時過ぎ

フロントフォークに据えたライトが、流れる車道を照らす。

今乃坂走って武った経験があるが、ヒステリアモ　ド時の俺は普通の自転車を使っても時速90キロくらいまでは出せる　台場までなら他の交通手段と大差無いだろう

と、思っていたが

「――音声、建造物への反射音にて予想　ワトソン、アリア、車内にいます　車種は、ポルシェ911カレラ・カブリオレ　型帳　都道482号線を北東に走行中」

ワトソン、車で出やかったか

北東――武偵高に戻らず、どこかへアリアを連れ去るつもりだな

だが、ポルシェとチャリじゃ駆けっこにならねえ

「――ワトソン　アリアに話しかけています　アリア、回答無し　眠っている模様」

眠っている……？

不自然だ　どんな眠りか教えてくれ、中空知　難しいかもしれないか、できるか」

「――　聴音中　意識レベル、JCSII-10以下　呼吸音・心音等のバイタルサインは　投薬、麻酔等による昏睡度の低下に酷似　熟睡と昏睡の中間辺りに思えます」

ワトソンの野郎……！

やってやかったな　レストランで、アリアに服従か何か盛ったらしいぞ

何をするつもりか分からないが、少しでもアリアを傷つけてみやがれ

お前に、同じ傷を付けてやるからな

一番、乱暴なやり方で――！

「だが

ワトソンは、どこへ行くつもりだ　それが分からなきゃ、引き離されて追えないぞ

打ちしなから、モノレールトの道路をチャリで台場へ渡っている時　ト

「――車内にてカーナビゲーション、入力音　ナビゲーションの音声あり　目的地は東京都墨田区押　1　1-2」

「ナイスアシストだ、中空知。後でキスしてやるよ」
「――不規則発言は控えて下さい」
はは
素で注意されちまった。
ベルセの俺と、通信機の向こうの中空知　いつも普段とはまるで別人格だな
『――ワトソン、アリア、高層捕捉の限界距離に到達しました　首都高速夕留JCTにて、
音声喪失　状況から見て、ここからは聴音不能と判断します――お気を付けて』
中空知の声も、とうとう限界か
だが十分だ。助かった。
行き先さえ分かれば、追えるからな
待ってろよ、ワトソン　アリアを起こして　代わりにお前を眠らせてやるぜ
病院の、ベッドでなー」

自分の携帯で地図を見つつ、辿り着いた先、押上1-1-2は
――東京スカイツリー。
その、建設現場だ
本当にここかと思って周囲を探ると　近くの駐車場に、ワトソンのボルシェがあった

だが、車内には誰もいない。
マフラーの熱をチェックすると、停車してから15分ってところだな
金網越しに見える砂ぼこり工事現場の足元を、自転車から外したライトで照らすと
見つけたぞ　武偵高指定の靴の、足跡がある
だが、アリアの足跡は無い。
眠るアリアを、抱きかかえて歩いたんだな。ワトソンは。
ここなぜ、アリアを連れてきたんだ
俺は、割り成しているスカイツリーを仰ぎ見る――高い
見上げると首が痛くなるほどに、高い。
アリアと教室のベランダから見た時には分からなかったが、真下に来ると巨大な柱の、本
一本が恐ろしく太いな。
これが塔である事が分からなくなるほどの、巨大建造物だ
現在の最上部、第一展望台を建設中のクレーンなんか　開いた網目で、全く見えないそ
さらによく見ると普通の塔とは違い、支柱は全て軽く螺旋状に並び合っている
（この……上、なのか？）
俺は金網をよじ登って越え、足跡を追って塔内部の建設現場に侵入した
深夜だから無人で、そのうえ物がほとんど無い空間に――俺の、鉄板を踏む足音が響く

1事現場にある看板や重機の陰に警戒し、時々、拳銃を向けながら進む

砂っぽい鉄板の上の足跡か、ほとんど見えなくなり

その先には、作業用の仮設エレベーターがあった。

エレベーター、か

動かせば、追跡がバレるかもな。

だが知った事か　今の1ヘルセの俺には、敵に襲いかかり、アリアを奪うこと以外、あまり物が考えられないんだ

俺は作動用の鍵穴に、武偵手帳から取り出した解錠キーを挿し1

全網を現代わりにしている不安定なエレベーターを、昇らせた

何度かエレベーターを乗り継ぎ、白く太い鉄骨の間を上へ、上へと向かうと1

まるで飛行機で飛んでいるような高さまで、吊り上げられていく

――高い。なんて高さだ。

夜景だが、眼下の東京はまるで航空写真のような

ここはもうアフトと戦ったフジマークタワーの屋上より、俺とアリアが入ハ600使で飛んだ高度よりも、ずっと高いぞ

そうして上り着いた先

柱の一本に横線と「350m」という数字が書かれた第一展望台、侵入する

視界は暗いが街明かりもあるし、もう目は暗さに慣れてきている

未完成の展望台は、剥き出しのコンクリートで足元を塗り固めただけの状態だ

だだっ広く、幾つかの機材が隅の方に不規則に置いてある以外、何も無い

物音は――しない。

遠く聞こえるのは、スカイツリーの最上部にいるらしいカラスの群れが鳴き喚くくぐもった声

高所をグレリと囲む何本もの柱の間には　まだ、ガラスが填められていない

そこを、陣の風が吹き抜け、微かに1ンナモンのような香りか1――

「……やるじゃねえか、ワトソン」

俺は、まだ影も形も見えない相手に

それでも、話しかける

ヤツはいる　近く、

「お前が武偵高で俺の外堀を埋めたりケガが分かったせ　アリアを攫ったあと　いずれこうなる事　俺と直接対決する事を、想定してたんだな」

周囲の風に吹かれながら、キュッ　と、俺は右手に＝オロチ1を填める

結局、右手なら銃に合わなかった

もし銃弾逸らしをやるとしたら、左手の指は犠牲にせざるを得ないな　その後が無いとんなに不利な状況でも、1度きりしか使えない
つまり俺は便利な新技の使用回数を、限定されたわけだ
いや、ほとんど封じられたと言ってもいい。
「俺は今まで、仲間と協力して物事を乗り越えてきたフシがある　イ　ウーとの戦いも、仲間とのチームワークが無かったら切り抜けられなかっただろうな　お前は、そこに目を付けて　まず俺を孤立させたわけだ　随分と　薄汚いマネをしてくれるじゃねえか」
武偵のサポートも無かった俺は
ここに着くまでに、ワトソンより15分も遅れている。
15分あれば、誰だって大抵の事ができるよな
アリアを隠し、自分も身を潜め、俺が隙を見せるのを待つ事だって
転車なんかで来させられたせいで、足の筋肉がパンパンだ　おまけに最近ロクな物を食ってないから、フラフラくるぜ
随分不利な状況から始めさせられたな。この戦い。
出てこいよ　それとも朝まで、そこでコノ泥みたいに隠れてるつもりか？
――ゴリッ
と、周囲の空気が張り詰める感覚がする。

やっぱり、ワトソンは頭に血がのぼりやすいタイプらしいな　挑発に乗ったようだ
「……何をしにきた？」
右前方の暗闇から、ヤツの声がする
ようやく喋りやがったか。
「…それを聞くか？」
ジャキン
俺はベレッタのスライドをコッキングし、その作動音で回答に代えた
声の方、闇の中に目を凝らすと――いるぞ。
U字形の展望台の反対側　機材の陰で　うっすらと人影らしき物が動いた
距離は、20mほど。
「俺は、アリアを奪い返しに来た」
「アリアは渡さない　トオヤマ　今なら、まだ殺さないでやる――帰れ
「そうもいかねえんだよ　俺はハスカービルのリーダーって事になっちまってる　チームメンバーがやられたら、リーダ　の内申がトがるからな　お前、アリアをどうした
「薬で眠らせてある」
「いいのか、婚約者にそんな事して」
「婚約？　ああ　それは形だけの、ゴッコ遊びのようなものだ

「『遊び』か。そうか……」
アリアを、騙したってわけか
俺の体内で――
ドス黒いヘルセの血流が、一層強くなっていくのが分かる
「正式にホクのパートナーになるには、アリアは頭が悪すぎるしな　教育が必要だ
それなら俺も、お前を教育してやるよ　武偵高流のやり方でな
ブロブロ　と、遥か上空で遠雷の音がする。
まるで、俺のヘルセの感情に合わせるかのように。
「トオヤマー
「何だ」
先に言っておくか――イギリスでは武偵に　衛のための殺人が認められている　そして
ホクは、治外法権を認められた一等付き武偵でもある　つまり、そこを日本で殺害しても、
罪に問われる事は無い」
そうかい、そうかい
まあ、いるけとな　日本にもコロン有りの公務員は
俺の父さんかそうだったよ　生前、1人も殺さなかったそうだけどな
「安い命しだな。ワトソン。口ばかり達者な割にはよ

「その言葉、決闘の申し込みと取るぞ」
「取りたきゃ取れ」
俺が吐き捨てるようにそう言うと――
ワトソンの側から、カシュッ、という小さな音が聞こえた
――打つタイプか
今のは、無針式注射器の音だ。
ここで使うって事は、恐らく『ネヒェラー』　武偵用の中枢神経興奮剤だろう
日本では禁止されているか、時的に集中力が増し、夜目も利くようになる強襲戦用の
ドラッグだ。
経験上、打つヤツは…　手強いぞ。痛みや恐怖心にも強くなるからな。
「教えてやろう」
薬が回るまでの時間稼ぎか、ワトソンはそう切り出し
ホクがアリアをキンから逃さなかったのは、彼女を保護するためだ
保護
「師団」にいれば、アリアは確実に殺されるからな
極東戦役――の、話か。
「実際、アリアを守っていた役をいま保有している数も「眷属」が5つ、「師団」は2

のだ　早くも、彼女の身は危険に晒されている　ボクは彼女の身の安全のために、まずハスカールのリーダ　――キミから、取りかける　キミ達は判断を誤った　どう考えても、ミリアは『眷属』につくべきだった　いや　今からでも、つかなければならない」

「無敗忍者　さんよ　高飛車な議じゃ、お前からリバティ・メイソンの人使は『中立』と言ってたぞ

「現状を見て、ボクか『眷属』への帰属を進言した　今、本部グラント・ロッソで審議中だよ。来週には可決されるだろう」

「それなら、敵の芽は早めに摘ませてもらうぜ」

言いながら俺は、自分から間合いを詰め始めた

これ以上くっちゃべってると、アイノが『ネビュラ』で有利になるからな

目指すは、早期決着だ

近づく俺に、ワトソンの　冷笑いの声が返ってくる

「勝てると思っているのか　自分を過信する武偵は早死にするぞ

「そんな事はないだろう。お前が生きてるんだからな」

コノ、コノ　と、無人の展望室に俺の足音が響き

ヤツの姿が、明らかになっていく

闇に紛れる黒　色の強弾・刃対ヘストを着込み、足に鋼鉄仕込みと思われるコンバット

ブーツを履いてる　背面はマントのような長い防弾コートで守らせて、完全装備だな

対するこちらは、武偵局の防弾制服のみ　『オロチ』も同じだけだが

がが、ヘルセの俺はそういう戦力分析を放棄する

レベルな、不利でも、ブ倒す　それだけだ

「どうした。殺傷圏内だぜ」

拳銃交戦距離に入った俺か、低く言うと　――

――サァッ――

キッギーまで業の回る寸前を稼いでいたワトソンが、ほとんど足音もなく駆けてきた

（――速い

低い姿勢で迫ったワトソンが　ビッ――これもほとんど無音で、湾曲したククリナイフを抜いた　これも後戦用だ　刃が黒く着色されてある

ワトソンは俺の目の前で×記号のように突然コースを変え、すれ違い様に刃を振るう

狙いは右手首　軌道から見て、俺のデザート銃を切り落とすつもりだ

「――っ」

俺はヘレ　タの引き金から指を外し、立てた人差し指でナイフの先端を払う

ンヤリ

『オロチ』の最化タングステン　コバルト合金が火花を散らし、ナイフを受け流す

咄嗟に指が出たが、なるほど　こういう使い方も出来るんだな　『オロチ』は
そして今の交錯で分かったが、ワトソンは俊敏で、狙いも精密だが
あまり、筋力がない。
それに気付いた俺は、左手でバタフライ・ナイフを抜き
お前こそ逃げてもいいんだぜ、ワトソン
ガキン　と、刃の反対側　破壊峰の部分で、ヤノのナイフと切り結んだ
そのまま、バキッ
四字形の峰を捻り、力任せにナイフをへシ折ってやる。
今は、ボクも東京武偵高の生徒だ　敵前逃亡は校則違反だろ
ナイフの残骸を捨てたワトソンは、ロングコートを翻して1足バック宙を切り
距取りする姿が、遠くて見えた雪に滑く、どこか美しく浮き上がった
――ジャキン――
着地すると1重、黒袖からスリーブガンの装填ギミックでCO2ガスHER12GBを出したワトソンが、
即座にそれを連射してくる
ギギギギンッ――
俺の前方1～2mで、全ての弾丸が四方八方に飛び散った
銃弾撃ち

かけじゃないぜ　ヘルセの分だ　もう1手打てた
俺は1発、外したように見える発砲を織り交ぜているのだ
ヒン、ヒー
「あっ――」
ワトソンが、背後の柱から跳ね返ってきた俺の弾に背中を撃たれた
跳弾射撃。
レキが俺を「人間狩り」で追い詰めた時に使った、物に跳ね返った弾で敵を撃つ技を、
貸してもらったぜ。
追い撃ちをかけようと思って、ヘレノタを構えるか――
前のめりに、どさっ　と倒れてしまったワトソンは、そのまま動かなくなる
おい
発でダウンかよ　撃たれ弱いな
「　さてよ」
ヘルセの獰猛な血が、ハスー
俺に、ワトソンのすぐ横の床を撃たさせる。
こかしワトソンはピクリともしない
まあ　防弾チョ　キの上からでも、肺を撃たれるとしばらく息ができないからな

慌ててワトソンを押し返し、瞼をまさぐると
〔針、か……！〕
！、含んでやがったな　やられた――
プノっ　と瞼に突き刺さったそれを抜くと、1センチほどの針の先端には細かい穴が開いている　毒溜めた諜報科の後輩・風魔が、竹製の吹き矢を持っていた
眼球はやられなかったが、瞼の縁からこめかみにかけて――痺れ始めてる
死んだフリに、毒かよ　さすが一九四忍者　さんたな　手しがちねえせ
その時、Iを押さえていた俺の右側　死角側に消えたワトソンが、ドスッ――カッ！鋼鉄を仕込んだコンバットブーツで、俺の腹、そして顎を思いっきり　段蔵のしてきた――認めてあげるよ、トオヤマ　キミはやはり逸材だ　弾丸を弾丸で弾き、跳弾まで使う。アリアが夢中になるのも分からなくない」
俺と再び距離を取ったワトソンは、P226Rを上に投げて嘲笑うように揺らす
俺はナイフをしまい、虚勢を張るようにDEを抜きつつも――
若干、後退せざるを得ない
目もそうだが、今の蹴りは肝臓と顎を直撃した　痛烈だったぜ
人体の急所を的確に打ってきやがった
しばらく朦朧状態から回復するまで休まないと、戦えないぞ

まだ　動かない。
当たりが悪かったのかな。
ていうか、死なれたら俺も死刑だぞ　武偵、倍罰で
「おい」
と、そばに寄ってコートの首根っこをネコ掴みし、抱きかかえるようにすると、
「ぅ……」
なんて呻いたワトソンの、気絶したらしい顔は
な、なんたよコイノ
その：認めたくない事だが、えっと　まあ、事実だから仕方ない　認めようかわいい、顔を、してるな。男のくせに。おかしなヤツだぜ。
ヘルセでもやはり女っぽいものに弱い俺か、一瞬たじろいだ時――
ぱちっ――
ツンツンした睫毛の目をいきなり開いたワトソンが、フッ
紅い唇から、鋭く息を吹いた
「ふっ！」
九月に、鋭い痛みがはる

キミなら、リハティー・メイソンの一流エージェントともり角に戦えるだろう　だが、残念だったね　僕はその上を行く超一流なんだよ」

また、ベラベラ喋りやがる　時間を稼いでるんだな

自分の「ネヒュラ」と、俺に打った毒か、お互いの体に回る時間を1秒ごとにアイソは有利になり、俺は不利になるワケか

キミの情報はマイナーだったから高価だったが、資料の通りだよ　東京武偵高の問題児らしいが、戦闘技術、とりわけ近接戦に関してズバ抜けた資質を持っている　百七万次第ではカナ級のエキスパートになる、と書いてあったのも納得がいくよ」

妙な下調べをしやがって

お公式なデータだから知らないかもしれないが、キミはアンアのSランク

日本での俗なアダ名は、超人ランクだったかな　あれにも100倍以内に戦ってる

誰だ。そんなもんをランク付けしてるヤツは。

速攻、圏外に戻してくれ　武偵高じゃEランクなんたし

「さて　そろそろ効いてきたかい、トオヤマ？　ボクも効いてきたよ　ワトソン家は代々、名師の家系だ　薬を使って戦いを有利に運ぶのが、ボクらのまでね　フフ

P226Rを構え　こっちに歩き始めたワトソンか、俺を嘲笑う

俺は「フン」と鼻を一つ鳴らし……呼吸を整え……仕方ない。

右目からうまく利かないこの状態でも、闘るしかねえな

「近接拳銃戦で、ボクらの戦いに幕をトろそう　この戦いを、アリアに―捧げる！―

側転で一気に距離を詰めてきたワトソンは、

――チャキチャキチャキンッ――

目の前にきつまでの1秒半に、体のあちこちから金属音をさせた

見ればその肘、膝、ブーツの踵にも右それぞれ、合わせて6振り、カードナイフの様に細いプレートの出刃が飛び出ている

――全身武器――

英陸軍特殊部隊で研修を受けた先輩が似た装備を持ってた

闘りずらいぞ、これは　銃も含わせて、7つの武器に対応しなきゃならないんたからな

それも、ほぼ片目の状態で。

バッ！

ハハッ！

俺とワトソンの銃が、至近距離でナイフのように振るわれる

ワトソンはこっちの目が利かないんへ、右へと回り込む

その動作の中に、俺の指を引き金から外させたり、腕を関節技で捻ってきたり、器用な技を織り交ぜてきやがる

まるで湯気の下にでもいるように、闇のせいでも細雪が見えてるんだな　ネビュラーで俺の残弾数が――減ってきた
最後の　発を撃ち、すぐ再装填を、と思って制服の背中の裏に手を伸ばすと
……ッ？
「お探しのものは、これかい？」
ベレッタの――俺の弾倉を、ワトソンが面に放り投げる
今の格闘戦の間に、盗みやがったのか
ベレッタの反射神経で、飛びついてそれを取ろうとした俺の動きに――
ワトソンは、バンッー　ギンッー
と、舌を舞う弾倉をP226Rで撃って、塔の外まで吹き飛ばしてしまった
もうベレッタは使えない。
なら、DE――！
ドンッー
ヤツの胸を狙い、　撃ちきな音をしげた俺のアサート・イーグルが　当たらない
ワトソンは、ありえない程の柔軟さで体を背後にそらして躱したため
跳ねるように再び組み付いてきたワトソンは、ムエタイのように膝の曲刃で俺の右手を切りにかかってくる　スウェーして躱したが、俺から奪われた制服が右手にを落とした

ギリギリだった　次の攻撃を狙った膝蹴りも　何とかバックステップで躱すが
俺は何度も俺の体を掠め、俺の銃弾は躱され続け！
装弾数が8発しかないため、すぐ弾切れになったDEの弾倉を探るが――無い　これも盗られたらしい
マズい。
弾がない。
武器を刀剣に持ち替えるため、数歩退いた俺は――
（うッ……）
そこかいつの間にか、展望台の中央に鎮座である事に気付く
ワトソンは闘いながら、俺を端のカベに巧みに誘導していたらしい
もう、後退はできない　後ろは高度350mの虚空
そう思い、スクラマ・サクスに手を伸ばしかけて　やめた
無い
背中の重さで分かった　ヤツを攻撃する事ばかり考えていたせいで、気付くのが遅れた
盗まれて、今はワトソンが隠し持っているか、捨てたかだ
バタフライ・ナイフさえ無いぞ。盗られ過ぎだろ、俺。
――これも、ベレセの撃策か

丸腰になった俺の足元に、パン！　とマズルフラ　ッシュを閃かせたP226Rの弾丸が当たり

「ッ！」

ずるっ、と展望台の縁を踏み外した。

そのまま腰、胸、顎をコンクリートの足元にぶつけて落ちながらも　なんとか、縁の部分に両手でブラトかる

「トを見るな！　すぐワイヤーを　」

と、右手を縁から外して腰のベルトをまさぐるが　ち、チクショウ、これも無いぞ。ハンクルだけは取られてやかる

足を掛ける場所を探すが、外周は既に塗装かされており、ノレソレと滑る

ーかれない

この手を離したら、奈落の底　だぞ　！

ブラトかる俺のそばまで来たワトソンが、縁を掴む俺の右手を蹴って外す

度　度、俺は右手を縁にかけるが

クスクスと笑いながらのワトソンか、それを叩くように蹴って虚空に返す

っ、教育してあげよう　今のキミは攻撃　が頭になかった　実に読みやすかったよ」

右手をあきらめ、ヘルセの力を利用して、片手懸垂のように何とかーがろうとした俺の左手を——

黒いコンバットブーツの靴底が……そっと、踏んできた。

「では、よく頑ったねと思う　おかげでボクも残弾は1発だけた　さっきのキミの弾倉（マガジン）あの9、1弾を空から撃ち落としたのは　もたいなかったかな

くく

ぐりッ

と、ワトソンが俺の左手に、体重をかけてきた。

鋼鉄仕込みの靴で踏みにじられると、右手の指が拗れ、骨が折れそうになる

痛みに、右腕が伸びてしまう　右肩が落ち、右手はもう縁に届かない

耐えろ　耐えるんだ！　この右手を離したら、地　までまっ逆様だ

だが、この状況で……どう、逆い上がるんだッ。

「トすヤマ　もう泉になれ　アリアの今後は心配するな　アリアはボクが、幸せにするよ

——アリア。

その名を聞いた瞬間　——

俺の口に、また、全てがスローモーションのように見え始めた

片膝を高くーげたワトソンの足が、俺の右手めがけて落ちてくる——

脳裏を――

全身の筋肉を、斉に動かす超高速の『閃、桜花』のイメージがよぎる

――

今、俺の体レスカイソリーを繋ぐ支点は、左手だけだ

だが、右手首、左肘、左肩、右肩、右肘、右手首――これだけ加速点があれば、きっとできる　通常のヒステリアモードじゃ、できないかもしれねえけどな――

ヒステリア・ベルセの俺よ　お前のせいで、随分追い詰められたんだ

1・1倍の能力を発揮できるってんなら　自分への汚名返上ぐらい――

――これくらい、できろ！

ワトソンの足が、俺の手に落ちるその一瞬前

「――！」

左腕から、右腕へ。

加速を伝えた俺の両腕が、ヒステリア・ベルセの爆発力で、

鉤爪のように構えた右手を――亜音速で振るった

それと全く同時に

ガス！

ワトソンの踵が俺の左手に落ち、ついに手が離れる。
一瞬安堵し、激痛に目を閉じた俺は　落下　ない
（……やるじゃねえか、ベルセ……）
我なから、恐る恐る　視線をずらすと
俺は展望台の縁のすぐ下――鋼鉄の壁面に、「オロチ」で装甲した右手の2本指を突き刺して、ブラ下がっていた。
指は深々と壁面に穴を開け、ホールドのホ　しに指を入れるような形になっている
ありがてえ。
さすが、ヒステリアモードの、さらに1・7倍の能力だ。
鉄板に、本指貫手で穴を開けるとはな　我なから人したもんだ　感謝するぜ、ベルセ。
「　」
転落する俺の姿を見物しようと、眼下を覗き込んだワトソンか
その生暖かのような顔を見開いた瞬間、俺は突き出した左手でヤツの髪の毛を掴んだ
踏まれて筋を痛めたせいで、指に力が入らないか――
なんとか絡めて、掴んでやる
俺も、ヤツも、教育してやるぜ　お前は、信用すぎるんだ　おかげで助かったけたぜ」

「い、痛い　やめろ！　髪なんか掴むな」
知るか！　こちとら生死の境目なんだ
俺は激しくワトソンから右手を離さず、両腕の力で　くっ……！　と、這い上がる
自分も転落しないように伏せてくれたおかげで、安定した掴み所だったぜ　ワトソンは
「はあ、はあ　てめえ　今のはな　ホントに死ぬかと思ったんだからな！」
よじ登った俺は、ワトソンと取っ組み合い――
ゴロゴロ、と、もうカキのケンカみたいな状態で展望台の床を転がる
転がりながら、何発かお互いの顔や腹を殴り合った俺たちは　！
「んッ！」
ごす、と俺の胸を蹴って、まずワトソンが離れ、
右手突きハック転で、さっき俺が立たれていた展望台のフチ――拳銃交戦距離まで、
下がる
「はあ、はあ、はあ　」
よろ……と立ち上がった俺は――
涙目のワトソンがP226Rをこっちに向けているのを見て、揺れる胸を寄せる
トオヤマ　お、お前は　貴族の、しかも本婦の淑　あ、いや――ボクの髪を掴
み、か、顔を殴ったな　この、ここまでの侮辱は、もう許さない　！

——一難去って、また一難だ。

さっきまで比較的冷静だったワトソンが、なぜか今の取っ組み合いに怒り狂っている

こっちは今にも、銃を撃ち抜かれそうだぞ

さあ、今度はどうするッ……キンジ。

俺は、もう丸腰だ。

——逃げるか？　この距離なら、逃げられるぞ。

ここは逃けるべきだ　とうめえても

一旦逃げて、態勢を……

（——いや。できねえ……逃げられっかよ……！）

おい　ヘルセの俺よ

さっきは感謝したが——やめてくれよ、そういう男気出すの。

お前、間違ってるぜ。

だが

やっぱり、できねえな

できねえんだよな

いま退いたら、コイツはアリアをレうにかしちまう

想像が走りつかないが、奪われる　それだけは分かる

だから——

お前に、アリアを、渡せるかッ！

そう思った俺は——戦術的には明らかに間違ってるが——退かない

よくよく考えりゃ、もう俺は充分すぎるほど逃け回っていたんだ

ワトソンとアーアの、関係から

背を向けて、見ないようにしていた。何日も。何日も。

だから今日は。

今は、退かない。

——もう、一歩も退かねえ！

その、ベレセの執念とも思える決意と共に——俺は、ワトソンの銃口を睨む

ヤツの狙いは、防弾制服に護られていない頭部

コユの時と同じシチュエーションになったな

だが、状況はあの時より悪い。

銃弾斬り、銃弾撃ち、銃弾噛み、銃弾逸らし　レれもムリだ

俺には武器が無い　蘭でトめて仔倒したら、刃物でトドメをさされる　日損覚悟で指で

弾丸の軌道を逸らそうにも、さっき踏まれて傷ついた左手では、もうムーだ

だが——

ある。切り抜ける道は、必ず、ある。
アリアに禁じられた言葉――「ムリー」と言いかえしなければ
そう。それはきっと……こうだ……！
「よく狙えよ、ワトソン」
そう言い残した俺は
5ヶ月、あの、地下倉庫での戦いを思い出す　それが、つめの、この技の原点
――いくぞ。
ピステリア・ベルセ頼みの荒技　今後は2発、やらせてもらうぜ
キンに頼まれるまでもない　この距離で、外しはしない
この螺旋状の支柱に包まれた、東京スカイツリー
それは、天空樹。樹木、という意味だ。
木には花が咲く
桜花　奇しくも、この技のもう一つの原型の名も、それだ
螺旋――
口をつぐんで、新たな技の名前が出る
右足を前に出し、右肩を後ろに引いて踏み込めた
そして右腕で自分の右肩を抱くような、不自然な形で

腕を、自分の体に巻き付けるようにする。
さらに腰と背を回す　限界まで、右に
――全身を、大きく、ねじる。
この技には、事前に姿勢を作って力をためる　ある種の、「溜め」が必要だ
それが恐らく、この姿勢――
頭も右下、右を向いてしまうか　自を右に向け、生きている右目でワトソンを見る
俺の目は、分の右肩で隠れるが、目だけは、逸らさない
銃口から、逸らさない。
「何か企んでいる・・・ような、見せているな　トオヤマ　哀れだよ　そんなブラフを最後に、命を散らすとはな」
――散らせるもんなら、散らしてみやがれ
この技は――
0・001秒の遅れ、0・001ミリのズレでも命を落とす。
集中力を高めろ　極限まで、高めるんだ
「――アーメン――」
祈りの言葉と共に、銃口が光り――
俺の引き金がけて、弾丸が飛んでくる

――――」

俺はまず、「雪の照合い抜き、『緋緋色伽神』のように
限界まで捻り、溜めに溜めた全身の力を　気に解き放った
比較的直線的な『桜花』とは異なる、しかしそれに匹敵する速度の回転力で――
弾が俺に到達する、刹那の瞬間
俺の右腕が、左から右へと振るわれる
速度は　音速の一歩手前　これでいい　衝撃波で腕を傷つけちゃダメだ
俺は地下倉庫でジャンヌに使った一　指真剣『土取り』、その横薙ぎて
ハチイノノノノノ！
オロチーを装備した人差し指と中指を使い、弾丸をコンマー秒抉る事に成功する
たか当然、人間かチで弾丸を下めることはできない
弾はスノ抜ける　指と指の間を
たか俺の回転力は――『銃弾逸らし』と同様に、弾の軌道を斜めに変え――
「――ツー」
ギン！
……と、背後の柱で火花が散った。
右腕を鞭のように振るいきった俺は、弾を見送ったような姿勢で：：

大きく、息をつく。
一瞬前
「手だけでの、『銃弾逸らし』
やってのけてから、背筋が寒くなるな。
悪夢だぜ。こんな技。二度とやりたくねえ。
右腕の前、ほんの数センの所を弾丸が通過　やがた
ヘルセしゃなきゃ、こんなクソ度胸のいる技、ふつうは本番で使えなかったかもな
これでおわり、残弾ゼロだな　どうする　まだやるか？」
と、俺か展望台の縁にいるワトソンに脱みをきて振り返ると　――
俺の事を調べていたのに知らなかった技を次々と見せられたワトソンは、口を合わせた
瞬間、まるで一人に睨まれた子供のように――
後ずさった
「お、　、……バッ……バカ野郎！　落ちるぞ――」
俺は全力で駆ける。
銃弾か尽き、さらにどんな必殺技を隠し持っているか分からない俺に睨まれたワトソン
は――ハニックを起こし、自分がどこにいるのかすら把握できなくなっているのた

「――キャノー」

凸凹を踏み外し、防弾コートをひらめかせて転落しかかったワトソンめがけ――

俺はヘッドスライディングするように、飛びついた

「……！」

自分も落っこちかねない勢いで、俺はワトソンの両脇を抱きかかえ――ごちゃ

猫同士をぶつけ合いつつも、何とか、キャノチに成功する

「っ！」

鼻と鼻が触れ合う距離で、俺に抱きかかえられたワトソンは――

いま真っ青になっていた顔を、今度は急に、かぁあ、と、真っ赤に変えた

「何が、恥ずかしいんだ、よッ……！」

俺はワトソンの体をズリ、ズリ、と、抱き上げていく

「な……なぜ、助けるんだッ！」

「――それを聞くか？」

こんな状況でも強がるワトソンに、俺は苦笑いが漏れる

それを見たワトソンは――今度は、

「きゅん！」

という音がしそうな表情をしやがったぞ。

だからやめろって　確かに、お前は美少年かもしれんが　男がそんな顔

男　が　って

お、おい　っ

ある程度持ち上げたワトソンを、まずは縁に腰掛けさせられるよう　体を裏返し、

後ろから抱きついてるような姿勢になっていた俺の……

ワトソンの両胸を思いっきり掴んだ、俺の手に伝わる　この、この、感触は

って、ウソだろ　っ

何とか上がってきたワトソンは、転落しかけた恐怖で足腰が立たないらしく　人魚姫

みたいな座り方で、一体だけを起こしていた

そして、わな、わなわな、と震える口で俺を見ながら、はし

自分の両胸を、隠すように自ら抱くのだった。

Go For The NEXT! 螺旋の天空樹

「お、お前……『転装生』だったのか……？」

驚きのあまり、つい武偵高のローカル単語が出てしまった俺に

顔を伏せたワトソンは、何も答えない。

――『転装生』とは、極々希な話だが　男子が女子のフリをして、または女子が男子のフリをして武偵高に通うことだ

特殊条件下の犯罪捜査に備え、教務科の許可をもらい、異性のフリして学校に通う生徒が

――武偵高には、いるのだ　1学年に1人か2人

コイツはどうやら……それだったらしいな

思い起こせば、怪しいフシは幾つもあったよな

武藤が持ってきたグラビア写真を見たがらなかったし、俺が最初から妙な危険を感じていたのも――ヒステリアモードの本能が、そうさせていたのだろう

女装食堂一の件で女子の制服を平然と着たのは　性格から考えて　自戒だったのだ

探偵科に向いたが、母子の兵士には　疑われたくない事は、逆に見せる事で疑われなくなる」という、知能犯が使うトリックの手口がある

つまり真犯人が自分にアリバイが無いことや、自分が被害者を知っていることを――平然とした態度で、武偵や刑事に示すのだ

そうすることで、犯人が自ら疑われるような材料をわざわざ残すハズはないような

と騙され、ソイツを無実だと思い込んでしまう

自分の性別を偽っていたワトソンは、もしや女子の制服を着ることで動揺、怖がらない

ことで　女だと疑われる事を、防ごうとしたのだろう

マジかよ

俺の問いに答えなかったワトソンは

答えない事で、自分が女であることを認めているようだった

そして人魚姫座りのまま、めそ……めそ、と……

あー　泣き始めちゃったよ

この泣き方　男にはできないな　マジで女だ

ああヤマ　なんでボクなんかを助けたんだ　自分を殺そうとした相手　その前には、学校で自分をあれだけ虐めた相手なんかを　なんで

武偵法9条を作った偉い人に聞けよ」

罠にハメた相手に助けられるなんて　こっ　こんな恥辱、もう、耐えられない

殺してくれ　キンジ教授は、自殺できない　いっそボクは殺されても事故死したことに

されるんだ。武偵法を守る必要はない」

「もう弾がねえよ」

とたった、と、力の抜けてしまった俺は大の字に寝転がる

弾ならまだある　そこの柱の陰に、法化銀弾を隠してるから

そんなに死にたがるな　ていうか、おまえさっきそれ使えば俺に勝てただろ

対人使用は禁止されている　まあキンは人間1分、魔物1分といった所だけど

サラッと失礼な事を言いやがるな

そうか……弾を残してたのか。

ってことはまあ、「勝負に勝って試合に負けた」ってところだな　今日は

「ボクは……貴族だ。負けたからには、今までのこと……」

こしごし、と手の甲で涙を拭くカワトソンは、キリッとした顔で俺を見下ろしてくる

相変わらず、イーブンになるまで諦めて受ける　何をされても抵抗しない　好きにしろ

「そいつは、ちょっと危険な発言だぜ　今の俺には　お前は女なんだろ

ごろ、とワトソンに背を向けるように寝返りを打つ。

もうちょっと説教する元気もねえや

　ていうか何で、男のフリなんかしてたんだよ」

「アリアを、ワトソン家に入れるためだ　男のボクと結婚すれば、アリアをワトソン家に

入れられる　ボクはルグ、そのために　男子として育てられたのだ

……」

「一族に引き入れるため、ときたか

レキかウルスに俺を入れようとしたり、ちょっと一貫性のない

因果応報ってやつかな　アリアの身に降りかかった事と同じ事が、今度は俺の身に降りかかってるワケか

「貴族の社会的責任　第四貴族には名誉のため、表社会における成功だけではなく、

世間に知られる事なく、無償で、秘密裏に世界を救う活動が求められる　ハイディ・メイソンとは、その活動を実践する気高い秘密結社なんだ」

人知れず、タダで、人々を救う結社か

なんというか、正義のヒーローの集団みたいなヤツらだな

たかがワトソン家はその活動に於いて、30年ほど前から最低傾向にあった　過去の功績により、ワトソン家の者は必ず1級武部に取り立てられる　それほど貢献している家なのに

　また　表社会で大成功していた分、逆にそこを突かれてさえいた　それで

「アリアを――使おうとしたワケか」

　そうだよ　ホムス家はリバティー・メイソンに加盟　ではなかったが　その

活動には共鳴していた　たから将来優秀な探偵：　或いは、武偵に育つであろうアリアの

誕生を知った先々代のボーがホームズ家と密約を結び　ちょうどその冬に生まれる予定だったオクの許嫁にしたんだ　生まれたオクが女子だった事は、ホームズ家には隠されていた　結社の規則で養子は認められなかったから、婚姻しか無かったんだ　ホクら、ワトソン家とは」

……お家騒動みたいな話だな。

それで殺されかけた俺は、いい迷惑だぜ。

「だが　トオヤマ　それは事態の裏面に過ぎない　さっきホクが言った、アリアの身に迫る危険も本物なんだ　ハスカールのキンが〝眷属〟を選ばない限り――このままでは、アリアは」

と、続けようとしてくるワトソンに、

まだベルセ的なノリだった俺は立ち上がり、

「ええもそも＝師団（ダイン）とやらになると言った覚えは無いんだが。今から〝眷属〟になったら今度は　師団（ダイン）に狙われるんだろ　裏切り行為とかみなされて、ミョルニスに襲らされたりレキに撃たれたり、一族やメーヤにワケの分からん術をかけられたくはないだが　アリアは

「――俺にとってこのアリアは、もう乗りかかった船みたいなもんだ　強引にパートナーにされちまったし、チームの仲間でもあるからな　相手が誰でも関係ない　襲うヤツがいればぶっ　撃つヤツがいれば奪い返す　というわけで　案内しろ　アリアの所へ」

とうしても、眷属、にはなりたくないのか　こんなに不利で、危険でもか

いいもの事だ

と言う俺を、座ったまま見上げたワトソンは――

驚くことよ、分からないか、なんか　ときが、急速に

また、きゅん　と、女っぽくなった気がするな　イヤな感じた

れ　分かった　トオヤマ　ここからはオクも協力しよう　せめてもの　償いとしてリバティー　メイソンへの〝眷属　婚姻提案も撤回し、「師団　となるよう再提案するそうしようとワトソンは、腹を決めたような顔でおもむろに

そして……柱の陰に隠していた弾倉を2本拾ってきて、

アリアはこの1た

りの弾倉を、なぜか俺に渡してくる

受け取ると　弾頭は鉛ではなく銀だが――ヘレ　タにも使える、9ミ　弾か

「なんで銃弾がいるんだよ」

　いえない　使わないで済むよう、オクか　人でアリアを連れてくるよ」

ワトソンが有無を言わさぬ調なんで、俺は銃弾を取り出し

パチン、パチン、とベレッタのマガジンに収める。

そうしていると……

「ボクは……キミが羨ましかった」

「羨ましい？」

「……本当は、初めてキミとアリアを見た時から分かっていたよ。アリアのパートナーにふさわしいのは、キミだ。ボクは生涯をかけて、アリアに尽くそうと決めていたから……悔しかった。妬ましかったよ。それで武偵高では、少しやりすぎた。謝る」

「じゃあ、こんど俺にあのステーキを奢れ。食い物の恨みは恐ろしいんだからな」

学食でやられた事を出すと、ワトソンは小さく笑う。

初めて俺に見せた……初めての、女の子らしい、等身大の笑顔で。

やっぱり……カワイイじゃねえか。コイツはコイツで。

「アリアの気持ちが、少し分かるよ」

「何がだ」

「それもキミへの嫉妬の原因だった。ボクはやはり女だから……分かってしまったんだ」

「だから何がだよ」

「――アリアはキミに、恋してる」

……

……は？

バカ言え。アイツは一日平均7・5発、俺に発砲するんだぞ。

「ありえん」

と、切り捨てると……

ワトソンは少し、注意するように眉を吊り上げた。

「キミの気持ちも少し分かる。だから敢えて言うが、キミはアリアに恋してはならない」

また……それか。

レキも前、似たような事を言ってたな。

皆、俺とアリアの関係を誤解しすぎだぜ。

「敢えて言うけどな、分かってねーよお前。俺がどれだけアリアに日々ボコられて……」

と、ソッポを向いた俺は――

そこで、ようやく。

眼下の街――

その一部に起きている、異変に気がついた。

……フッ……フッ……フッ……

と、ある一角の……そこに灯る電気が、次々と消えていくのだ。

ここからだと、暗くなった黒い空間が広がっていくように見える。

それが続く。停電らしい。街路や信号、家の灯りも1丁目分ぐらい消えたな。

「……？」

その代わり、明るくなったのは――俺たちの、遥か上空だ。

何だ……？

スカイツリーの４５０ｍ付近。第二展望台の辺り。光があるな。

まさか俺たちがドンパチやってる上で、工事をしていたのか？

「――ッ……！　Watch out High!」

その光に気づいたワトソンが上を振り仰ぎ、慌てるあまり英語で叫んだ。

光、が――落ちてくる。

何だ……あれは……？

光を灯したまま、強烈なライトが落ちて来ているのか？

いや、ライトじゃない。

でかいぞ。

直径２ｍぐらいの、球状の光――！

目を見開いた俺の胸を――

「トオヤマッ……！　ボクから、離れろ！」

ドンッ！

思い切り突き飛ばした、次の瞬間。

俺の視界が――

真っ白になった。

「――！」

悲鳴すら上げる間もなく、ワトソンがその球体の直撃を受けたのだ。

俺の耳に、バリバリという虚空を劈く激しい放電音が響く。

咄嗟に自分の顔面を覆った両腕にまで――バチバチッ――という、電流が迸る。

これは――ヒルダの技――!?

どういう事だ、前に襲われた時より、ずっと強いッ……！

「――ワトソンっ！」

『Hi-Hi-!』――上だ！　と叫んださっきのワトソンの声が、俺の頭の中にこだまする。

高熱を受けた空気が、上昇気流となって吹き荒れ、螺旋の渦を巻く。

まるで俺に、『来い』と言うように――気流が、上へ――上へ……！

――竜巻のように、上へ――！

あとがき

メリークリスマス！　今年も本屋さんに赤松サンタがやってきましたですのだ！

前巻末で一斉に現れた新キャラに加え、さらにアリアのベストパートナーを名乗る謎の美少年も登場し、通信科の中空知さんも意外と活躍する豪華な㈧巻、元気にお届けです！

楽しみなアニメ版も順調に制作中です。MFコミックスからマンガ版も発売中、ヤングガンガンでは『緋弾のアリアAA』が連載中と、アリア・ワールドは元気に拡大中です！

さて！　恒例となりました『緋弾のアリアQ&Aコーナー』、今回のご質問は――

Q：『武偵憲章はどれくらいあって、何が書かれているんですか？』

――アリアやキンジがよく引用する武偵憲章について、お答えします。

武偵憲章は10章まであり、国際武偵連盟が発足した時に作られた『武偵の心得』のようなものです。（ちょっと紛らわしいですが、9条で殺人禁止を定めた日本の武偵法とは別モノですのでご注意下さい！）その憲章の内容は……

1条　仲間を信じ、仲間を助けよ。
2条　依頼人との契約は絶対守れ。

3条　強くあれ。但し、その前に正しくあれ。
4条　武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事。
5条　行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし。
6条　自ら考え、自ら行動せよ。
7条　悲観論で備え、楽観論で行動せよ。
8条　任務は、その裏の裏まで完遂すべし。
9条　世界に雄飛せよ。人種、国籍の別なく共闘すべし。
10条　諦めるな。武偵は決して、諦めるな。

と、仲間との協力を促しつつも1人1人がしっかり自立するよう、割と勇ましいことが書いてあります。キンジたちの持つ武偵手帳にも、最後のページに明記されてるんですよ。

この内容の一部は、私の通っていた高校にあった校訓をモデルにしています。アリアがキンジに言うように、時々ビシッと先生に言われて、深く心に刻まれたものでした。

皆さんも人生のどこかで大切な言葉に出会ったら、ずっとずっと大切にして下さいね。

それがもしこの『緋弾のアリア』の中で見つかったなら、赤松はとっても幸せです。

といった所で㈨巻もおしまいです。次はアニメ放送の頃、お会いしましょう。では！

2010年12月吉日　赤松中学

こんにちはこぶいちです！

今回はコスプレ満載で
楽しく描かせていただきましたよ！
ジャンヌの意外な一面も見れましたね。

それではまた次巻でお会いいたしましょう！